

2020年10月1日

10周年記念集



NPO. Jomon Shiba Inu Research Center

も く じ

「NPO 法人縄文柴犬研究センター発足 10 周年記念誌の発行にあたって」	
JSRC 理事長 土井 鐵 徳	1
「特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センターまでの概史と縄文柴犬について」	
五味 靖 嘉	2

特別寄稿

「縄文人と動物たち」	東京国立博物館客員研究員	金子 浩 昌	8
「日本のイヌの歴史」	京都大学名誉教授	茂原 信 生	51

金子先生の紹介と主なイヌ・オオカミ関連著作紹介	62
茂原先生の紹介とイヌとオオカミ関連の著作紹介	64



特定非営利活動法人
縄文柴犬研究センター

NPO 法人縄文柴犬研究センター発足 10 周年記念誌の発行にあたって

理事長 土井 鐵 徳

NPO 法人縄文柴犬研究センターは(以下 JSRC)、2009 年 4 月に設立の認可を受け、この間たゆまず活動を続けて 2019 年 4 月で活動 10 周年を迎えました。

当法人設立の目的は「この法人は、柴犬を愛する人が協力して、縄文柴犬の研究・保存・普及に関する事業を行い、動物愛護の精神に則り、平和で心豊かな人と犬との共存社会を育むことに寄与することを目的とする」、活動内容は「縄文柴犬に関する各種の研究、及び地域社会への普及に関わる事業」「縄文柴犬の繁殖管理、及び飼育(里親としての育成・管理を含む)に関わる事業」「縄文柴犬犬籍簿の整備、及び柴犬血統書の発行に関わる事業」「縄文柴犬に関する審査及び指導員の育成に関わる事業」と定款に明確に定めています。

NPO 法人とすることにより、縄文柴犬の保存、研究に尽力されてきた諸先達的意思を受け継ぎ、広く社会的認知を受けるとともに、私たち会員の社会に対する責任と自覚を明確にするために敢えてブレない活動の道を選択しました。(縄文柴犬の詳しい解説は本記念誌に先達でもある五味前事務局長の論文が掲載されておりますのでご参照をお願いいたします)

当初、活動 10 周年を記念し、本年 5 月中旬に JSRC 設立以前からご支援いただいている京都大学名誉教授の茂原信生先生(形態学・人類系統発生学)と東京国立博物館客員研究員で元早稲田大学考古学の金子浩昌先生に、それぞれ縄文柴犬に関わりの深い「日本のイヌの歴史(仮題)」と「縄文時代の狩猟(仮題)」の記念講演をお願いしておりましたが、JSRC 事務局移転の都合により、開催の目途が立たず茂原先生、金子先生から寄稿していただいたの記念誌の発行となりました。記念講演から記念誌発行に代えたことは、未来への貴重な知的財産となる茂原先生、金子先生の論文をこのような形ではありますが後世に残せることとな

り JSRC としては大きな喜びであります。茂原先生、金子先生に深く感謝申し上げます。

JSRC の会員は、縄文柴犬を家族の一員として迎え、温かで心豊かな日常の暮らしを楽しんでいます。又、縄文柴犬に番犬や狩猟犬として、更に熊や猪、鹿等の獣害から地域の安全確保や畜産、果樹園、畑、田んぼ等の被害防止に活躍してもらっています。そして、多くの会員が系統的な保存活動や広範な研究活動にも参加しています。

想像ですが、これらの事は縄文人も村や家族の生活を守るためにしていたのではないのでしょうか。もしかすると冬には子供を温めていたかもしれません。犬がいなかったら生きることさえ大変だったと思います。このような想像をしてみることも楽しいのではないのでしょうか。想像と言えば、縄文の人々と現在の縄文柴犬のルーツはどこにあるのでしょうか、アフリカやアジア等に縄文柴犬と似ている狼や犬もいるようです。JSRC で取り組み始めた縄文柴犬の遺伝子研究も縄文人や縄文柴犬のルーツ探しの一助になるかもしれません。

このように家族でも楽しく、社会に役立ち、創造性ある活動に一般市民や研究者、学生、農林関係者等も含め多くの参加者を募り活動の発展を図っていきたいと思っています。

JSRC は、これからも NPO 法人として会員の交流と団結を大事にして活動していきます。

(2020.06.05)



特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センターまでの概史と

縄文柴犬について

五味靖嘉

I-日本犬保存運動のはじまり

1). 日本犬保存運動の提唱者

縄文柴犬は研究目的として、日本の風土に馴染んで現在、飼育されています。

しかし、1900年代頃には、日本の犬は雑種化が進み、このままでは滅びると考える方々が現れました。日本犬保存運動の提唱者に渡瀬庄三郎(注1)の影響があり、後に斉藤弘吉(注2)などが中心になって、1928年日本犬保存会が創立されました。

2). 柴犬保存会との関わり

1935.10 戦時中に中城龍雄は日本犬保存会入会しました。その後、執行部との意見対立から、1959 柴犬保存会を創立・主宰し、「日本犬の純化」という課題を掲げ活躍しました。背景には、長谷部言人(注3)のアドバイスもあり、1980年ころから縄文イヌと似ている柴犬の作出に貢献しました。

1981年、中城龍雄氏(柴犬保存会創設者)(注4)と、私が最初の出会いになります。そして間もなく、柴犬保存会の会員になり、後に日本犬保存会にも1年間の会員にもなりました。当時、中城氏から譲渡の柴犬は、飼い主に馴れない、触らせない、逃げたら二度と捕まらない、心臓疾患がある。仔犬は簡単に死んでしまうなど、人と共存するには様々な問題点がありました。それから、犬関係の情報文献を探し読みふけりました。

当時、出版された金子浩昌著1984「考古学シリーズ・貝塚の獣骨の知識(東京美術)」を持参し、中城氏宅にて、2時間ほどの犬議論を重ねました。それが「魅ったか? 縄文犬!」という言葉が生まれた最初で、やがて仔犬希望者の広告掲載へと転嫁しました。

3). 柴犬研究会の設立へ

1990年秋に、沢山の方々に支えられ柴犬保存会と決別して、「柴犬研究会」を創立しました。運営は会則に則った内容を基本とし、科学的成果に学び経験を生か

して柴犬の保存とその研究をする。という主旨に沿って会誌年4回発行・103号を数え、科学的成果に学ぶ一端として、豊かな内容の基礎ができました。そして、縄文柴犬という表現へと



発展します。その根本には、縄文柴犬が飼い主との馴染みやすい、それでいて獣害対策に充分活躍出来る、という社会的活用実験の一定の成果が挙げられます。

4). JSRC の設立

2009.4・特定非営利活動法人縄文柴犬研究センターが設立されました。定款には「この法人は柴犬を愛する人が協力して、縄文柴犬の研究・保存・普及に関する事業を行い、動物愛護の精神に則り、平和で豊かな人と犬との共存社会を育むことに寄与することを目的とする。」とあります。

JSRC 会誌創刊号に初代理事長、現在、☆名誉会員・顧問 新美治一(元理事長、名古屋経済大学法学部・大学院法学研究科教授)は、「全てのことは、過去の積み上げがあると同時に、新たな営為を求めています。」と述べております。JSRC は、縄文犬についての時代・歴史・労働(価値)・社会環境など多面的に学ぶことです。縄文柴犬については、研究目的の法人組織であり、決して営利目的ではありません。

注1: 東京帝国大学の動物学教室の第5代教授。日本哺乳類学会初代会頭(日本百科全書)天然記念物保護法の発令に向けて運動し、1919年に実現しました。同時に、「日本犬保守運動」の中心人物でもあり、急速に失われつつあった日本犬の保護に尽力しました。

注2: 1899生。日本の日本犬研究家、芸術家、古美術研究家。ペンネームは斉藤弘。1963『愛犬もの



三面村探検の際、民家に残された古式の狩衣付けた著者。「日本の犬と狼」より

がたり』文藝春秋新社（1983「全集日本動物誌 12」講談社）、1963『犬科動物骨格計測法』自家、1964『日本の犬と狼』雪華社、『日本狼骨格の研究』、『日本史前家犬の分類』。東京都渋谷駅前の『忠犬ハチ公』を有名にした。第1次南極地域観測隊の『タロとジロ』他の樺太犬救出のために尽力した事でも知られる。

注3: 1982生。人類学者。学会議会員、文化財専門審議委員。日本人類学会会長。日本学士院会員。（1927）『自然人類学概論』。明石原人の研究をはじめ、幅広い活動をした。1945「石器時代日本犬」（動物考古学 No. 26、「長谷部言人博士の学位論文」石器時代日本犬”についての解題」茂原信生が解説。人類学以外に

左:長谷部博士、右:中城氏

上野公園、展覧会会場

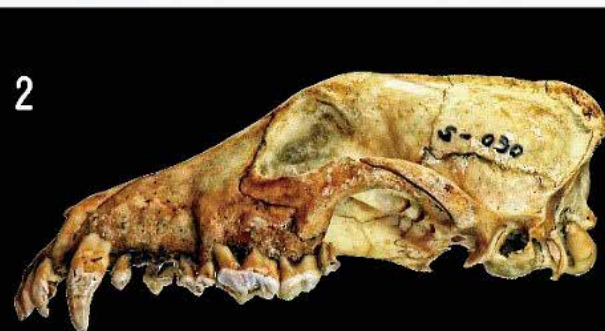


日本犬の研究でも著名。（1975 日本考古学選集 15）

注4: 1904:北海道生まれ、(本籍:長野県駒ヶ根市)八ヶ岳山麓の小学校代用教員として過ごす。1924。上京し主婦の友社の記者、嘱託。「日本犬・歴史と将来」。1959。柴犬保存会創立、主宰。縄文時代の、イヌの姿形に似ている作出に道筋を開いた。

図1 頭骨比較

- 1:縄文時代のイヌ(宮城県文化財報告書第111集「田柄貝塚出土犬骨の形態的特徴について・茂原信生ほか」)
- 2:縄文柴犬(筆者所蔵)
- 3:一般のシバイヌ(歯界展望 70-6・茂原信生 1987「ヒトの咀嚼器官の未来を示すもの」)



II-縄文柴犬について

1). 縄文柴犬とは

「縄文柴犬」とは、縄文時代のイヌそのものを指す呼称ではなく、研究目的として、他の犬と区分した名称です。また、商業活動は行っておりません(定款参照)。

縄文時代のイヌは、額段が浅く小級から中小級であり(表 1)、頭骨などは縄文柴犬と似ています。品種改良を目的とせず、保存目的に繁殖・飼育・研究活動をし、原種性を保ち続けている意味では、わが国の文化遺産であり、額段の深いタイプではありません。

縄文柴犬として重要な事は、小級から中小級の犬で額が広く後頭部が発達し額段が浅く面長で、口吻部は太く頑丈なことです。(図 1・2)

2). 縄文イヌの特徴

遺跡からの発掘によると、縄文時代のイヌの特徴は、額段:ストップが浅い(金子 1984)など、次のような特徴があります。

①全体に頑丈なこと(頭蓋骨、四肢骨)。②前頭部から鼻の先端にかけての窪み(額段、あるいはストップ。図 2)が浅いこと。③頬骨弓の幅が小さく、顔の幅が狭いこと。④口吻部が太いこと。⑤歯の損傷や摩耗などが見られること。(1989 茂原)

3). 小級から中小級である

縄文時代のイヌの体高は、36~46cm の小・中小級が殆どで、50cm 位の中級は極めてまれです。(金子)

縄文時代後期の田柄貝塚の出土 (1984・茂原、小野寺)に於ける頭骨と、縄文柴犬を比較しました。その結果、雄はほぼ横ばいという数値になり、雌は微量ながら大きくなっています。

一方、実測体高では、1997年頃 15年後の 2015年では雄が 0.8 cm、雌では 0.06 cmと大きくなる傾向が得られました。(体高測定基準定義に合致した個体選別の作業中です)。(図 3)

この中で、雄の頭骨最大長 163.78 mmは現況・縄文柴犬の体高 41.3 cmになります。雌の頭骨では 150.3 mmであり体高 36.4 cmという値になります。(表 2)雄の最大値は 46.5 cm (46.5 cmというのは、図 3 肩甲骨上端の測定が確認出来ないまま扱い)、最小値は 33 cm、雌の最大値 42.0 cm、最小値 31.0 cmと言う結果でした。(表 2)

4). 原種的・野性的

原種的というのは、人工的にあまり改良されなかった (内田亨 1948)、と言う意味で、やや激しい気性でありながら、鋭い警戒心があります。しかし、一旦信頼を深めた場合 (飼い主・人)には大変に素直で従順で、忠誠心のような性質 (心服) が強まり、頑固な反面、忍耐強く陽気で純情、様々な環境・条件に適応する能力 (研究協議・1987) があります。

野性的とは、野生動物風と考えても良いが、顔貌などの基本的な事柄は「額が広く平らで、額段が浅く」です。体躯構成は全体的に力強く締まり、無駄がなく弾力性があり、機敏で敏捷にして勇猛な状態を指し野生動物風と考えられます。即ち、野生動物と対峙する感覚と、いかなる状況にも対応出来る、俊敏な身のこなし方を意味します。

(以下は次項) (図 4.5)

土を食べる、野性の植物を食べるなどについては、動物には、二次化合物の解毒と関係があるようで、特にナトリウム不足とも関わっているのではないかと考えられています。

(2003,Cindy Engel)

身近な植物、ドクダミ (ドクダミ科ドクダミ属の多年草) などは、人の整腸剤とか食材として昔から活用されていましたが、これはイヌも好んで食べる漢方薬

表 1 :長谷部言人(1952)によるイヌの型区分(抜粋、単位はmm) 動物考古学 2009No. 26 より部分

	小級	中小級	中級	中大級	大級
頭蓋最大長	-155	156-170	171-185	186-200	201-
下顎骨長	-113	114-124	125-135	136-146	147-
上腕骨長	-120	121-135	136-150	151-165	166-
橈骨長	-115	116-130	131-145	146-160	161-
尺骨	-140	141-155	156-170	171-185	186-
大腿骨長	-135	136-150	151-165	166-180	181-
脛骨長	-130	131-145	146-160	161-175	176-

表 2 (注 1:1 歳以上。注 2:長谷部の 5 段階分類)

縄文柴犬の体高調査(注1)単位cm					頭骨測定 単位mm			
調査年度	個体数	性	最大値	最小値	平均値	縄文柴犬	田柄貝塚	分類(注2)
1997	49	♂	46.5	33	40.5	163.73	163.78	中小
2015	15		46.5	38	41.3			
1997	61	♀	42	31	36.4	155.7	150.3	中小
2015	26		41	34	36.5			

日本犬	性別	体高	頭骨全長
		小-大	小-大
秋田犬	♂	64-70	214.9-224.3
	♀	58-64	-
北海道犬	♂	48.5-51.5	151-194.2
	♀	45.348.5	168
紀州犬	♂	50-54	184.5 *2
	♀	46-50	-
四国犬 *1	♂	49-55	178.8-185.8
	♀	46-52	172-193.1
甲斐犬	♂	40-50	161.5-181.6
	♀	40-50	136.7-172.6
縄文柴犬*3	♂	33-46.5	146.4-181.5
	♀	31-42	144.6-175.4

表 3 1980 在来家畜研究会報告(1 歳以上)

*1:四国犬は太田測定による。

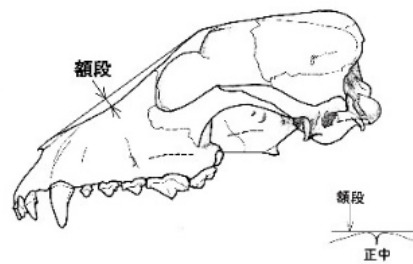
*2:紀州犬の頭骨は五味所蔵の測定

*3:2012.3 五味測定

でもあります。イヌが様々な草を食べ (ここではイネ科などを念頭に)、胃の中のを吐き出す事もあるが、ナトリウム不足とも関係があり、下痢の症状も病原体や毒を取り除く作用があるようです。縄文柴犬を観

ていると、体調が優れない様々な理由がある時は自ら絶食し、ひたすら休息をして保温し、自然治癒力に専念しています。(例:マムシに咬まれても同様の行為が観られます。)彼らが、時に嘔吐をするのも毒物や病原体を排出する反応行為(それとは別な理由もあるが、以下省略)であり、これは長い歴史の過程で、野性的・原種的に自然淘汰され、その結果、遺伝的に備わっていると考えられます。

図2
額段(ストップ)



5). 縄文柴犬の蹠 (あしのうら)

ニホンオオカミの蹠である第三指と、第四指の基部が融合している(小原 1990)。縄文柴犬とも相似しており、我が国の急峻な山岳地帯や岩盤地帯に適応したのではないかと考えられます。

この俊敏な動作に関連して、私の調査では縄文柴犬の蹠(あしのうら)の、第3指と第4指の基部が融合し、ニホンオオカミと似ています。この事象は、単なる早く走るというだけでなく、我が国の急峻な山岳地帯を軽快に音も無く走りまわっていたニホンオオカミとも共通しているのではないかと考える事ができるでしょう。(図4・5)

図3
体高と体長

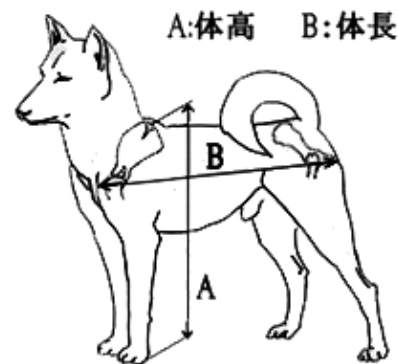


図4 左:ニホンオオカミの蹠(小原巖 1990 神奈川自然史資料) 右:最近の縄文柴犬の蹠

6). 犬の特殊性と縄文柴犬

①変異し易い - 細心の注意が必要

非公認記録ではあるが、犬種はおよそ 700 以上といわれ、国際畜犬連盟(FCI)による体高が世界最小のチワワは 15~23 cm、体重 0.5~3.0 kg、最大とされるマスティフは 70~76 cm を超え、体重 79~86 kg を超えます。

同じ種の *Canis lupus* という中に、体高約 4 倍、体重約 60 倍あるという動物は他に存在しません。

(図 6.7)

「人為的な交配をさせすぎたため、生物学の常識が、イヌには通用できないのです。」と云われております。

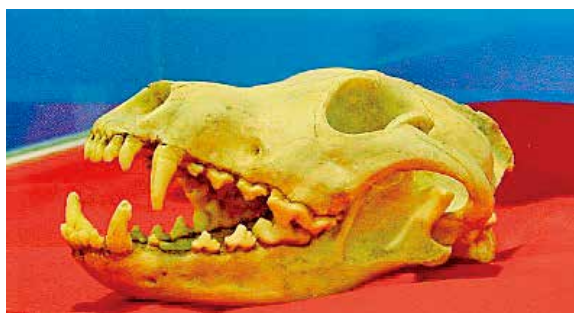


図5 左:和歌山大にあるニホンオオカミの頭骨 右:最近の縄文柴犬

②進化という観点

小原秀雄 (2001.5) は「イヌの新しい進化を想定する」の中で、イヌと人は1万年以上特殊な共生関係であり、相互進化とよばれる法則性に基づいた歴史的变化が起こっている筈である、と述べています。つまり、ここでは縄文柴犬が、それぞれの時代的環境・条件に於いて、適切な繁殖の結果「適応」する能力を維持しているかと考え、保存する事が大切ではないでしょうか。

<オキシトシン>

麻布大学の菊水健史教授による研究では、犬とその飼い主が互いに見つめあったときに、人の体内で脳の下垂体から「オキシトシン」というホルモンが分泌されることが分かったと報告されました。つまり、良好な関係が築かれ、闘争とか恐怖心を減少させる効果があるようです。

注) 図 6.7 は縄文柴犬を除く以下の犬種図鑑より

①世界の犬種図鑑(誠文堂新光社)

②David Alderton(Stoddart)

図 6 同じ遺伝子の犬たちの比較

スパニッシュ・マスティブとチワワの比較

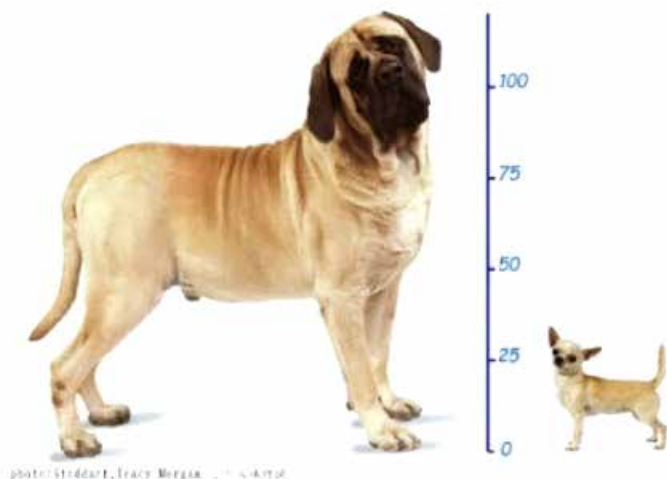


図 7 左から ・ブルドッグ ・シバイヌ(頭骨写真:前記図1・歯界展望より) ・縄文柴犬

III-保存・繁殖の重要性について

1). 保存・繁殖と研究活動は一对です

保存するための繁殖は、様々な研究活動と切り離せません。縄文柴犬は、必要な性能を維持し環境に適応する能力がある一方で、前記、II-(6)でも述べたよう

に僅かな注意を怠ると簡単に短期間で変異します。可愛くて、人懐っこい気質が強調されると、やがて本質的な縄文柴犬の風貌から離れます。イヌについての根拠を示した主体性が失われると、多数の思考に迎合し縄文柴犬の特徴は失われるでしょう。現代社会の中では、人や他犬に友好的な性質も保持することが重要な

のは云うまでもないことです。

更に、縄文時代には当たり前であろう、厳しい自然淘汰や人為選抜が現代社会では無く、虚弱で劣悪な犬でも飼育されます。一方、人から観た外見の「優秀一番」が追求された結果、科学的思考から遊離する状況があるのは、周知の通りだと思います。また、過去（過度）の近親交配による劣悪な性能の蓄積を回避するための捉え方、その思考と管理は、重要になると思います。

これらの問題を解決できるのは、“縄文柴犬は特定の個人や団体の私有物ではない”という商業活動に傾倒しない思想と、犬への愛情であり、そして保存と研究であり、政治的な道具の利用から離別すべきです。JSRCは現在まで、里親制度を実施して10年が経過し、これを踏まえた新たな取り組みに差し掛かりました。

2). 過去から経験を学ぶ

日本列島が誕生し島国になった頃から、まだ解き明かされていない縄文柴犬の、歴史を顧み、およそ一万年以上の物語が続きます。ここまでを振り返って、犬の研究は単なるイヌを学ぶ話ではなく、人類がどう関わり生きてきたのかを学ばないと、イヌ学の本質は見えません。我が国の、イヌ学は類例がないと思われる程、豊かで広く深く素晴らしい過去が存在しています。我々はこの豊かな内容を知った以上、「研究・伝承」に相応しい活動の展望を描く必要があり、一面的な方向に陥ってはならない理由があるところです。

環境破壊や、生態系の乱れ、原発問題、自然界にはこれまで存在しなかった化学物質が増え、環境ホルモンが問題になる現在、この地上に、生物界に、緊急課題があまりにも多すぎます。しかし、それらに怯むことなく大いに挑戦する価値があるでしょう。JSRCはいま、この縄文柴犬を単なる原種的とか、可愛い、獣害対策などの、犬自慢・人気取りの旗振りは望んでいません。

JSRCとして、これまで未経験の、未知への展望に向けた地道な挑戦になるでしょう。その最優先事項が、繰り返しですが縄文柴犬の保存活動であり、社会的協働への探究でしょう。そのための第一歩は「イヌ」の基本・科学的な理論によってのみ、新たな時代に即した必要とする展望に確信がもてるでしょう。

最後に-

私の研究を助けて下さった方々に、この場にて感謝申し上げます。

茂原信生先生には、私の未熟な知識、イヌに関する考え方など、長年にわたり適切に、多くのご教示をいただきました。特に忘れられない、1984「ヒトの咀嚼器官の未来を示すもの-歴史的实验としての将軍とイヌ」に出会って以降、頭蓋や四肢骨に接し、「斎藤弘吉の犬科動物骨格計測法」について学ぶ機会をいただきました。まだまだ中途半端ですが、更なるテーマについて、今後も探究に精進したいと考えております。

金子浩昌先生とは、文字どおり言葉にならないほど、数々のご教示、感謝で一杯のお付き合いです。考古学からの、縄文時代の狩猟に関することから、犬に対する私の考えを根底から変えることになりました。本誌に寄稿いただきました「縄文人の動物たちへの思い」は、その総集編のようであり、温かな人柄に触れ、人間的に貴重な体験をさせていただきました。振り返れば1984「貝塚の獣骨の知識(東京美術)」を目にしてからの30数年間、浅学ながら縄文時代から現在までを考えながら、大きな視野で楽しくイヌを学ぶことができました。

藤井忠志先生(岩手博)・根深誠(元登山家)氏をはじめ「クマゲラ」メンバーから、JSRC 創立時には欠くことのできないご協力を頂き、今日に至ることができました。「北上山地の獣害問題と縄文柴犬(会誌 20)」では、多くのご教示をいただきました。

小原秀雄先生からは、何度かの投稿との過程で、進化に関するご教示を頂き、嬉しかった当時の感動が忘れられません。

議論がそのままの中村先生、増井先生、小山先生から多くのオオカミとイヌ関連について、教えを頂きました。

そして30余年前、大曲市長のご支援は忘れられません。またJSRC設立に、力強いご支援の初代理事長・新美治一先生、時間はかかりましたが、若い世代中心に移行することができ、同時に、今後は楽しみとなりました。

ここにお名前を書ききれませんが沢山の会員と内外の仲間たちから、暖かいご声援をいただき、心からお礼申し上げます。これからもよろしくごお願い申し上げます。本当にありがとうございます。(2020.5.5)

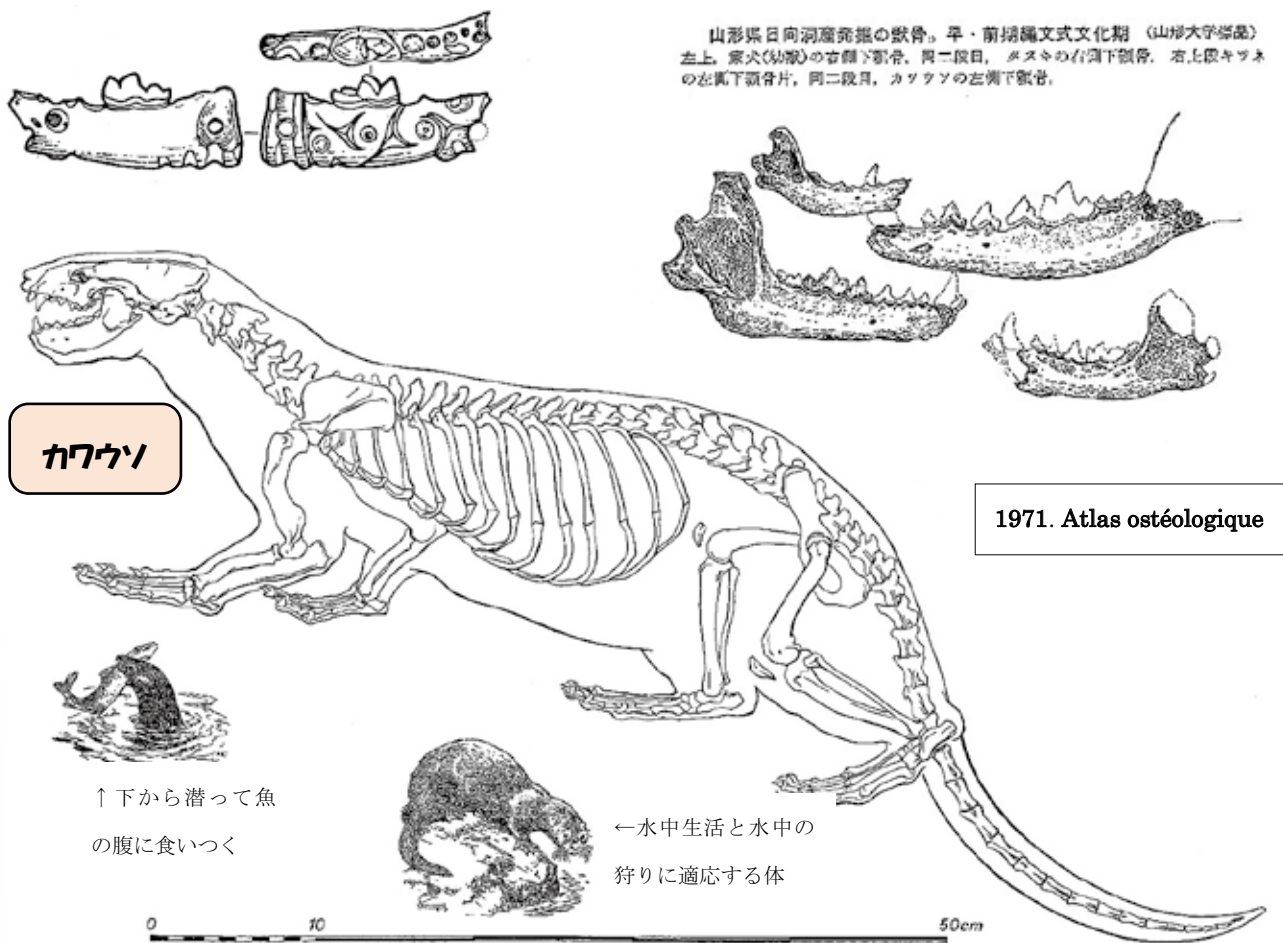
縄文人と動物たち

東京国立博物館客員研究員 **金子浩昌**

縄文人と動物との関わりを文様の彫刻されたカワウソの下顎骨でみます。縄文晩期の三叉文様をつけたカワウソの下顎骨があります。

カワウソは日本列島から姿を消してしまいました。かつては縄文貝塚のどこでもその遺骸を出土しました。ただ、タヌキやキツネなどに比べると数は少なく獲るのは難しかったようです。水辺や水中で活動する獣でした。

縄文貝塚からの出土品にここに図示した下顎骨の骨体部に土器につける文様そのままが刻まれている例がありました。縄文晩期の文様で、北海道・栄磯洞穴の出土です。日本海に面し、人々の生活の拠点となった遺跡の一つですが、カワウソも棲みやすい場所であったのでしょう。縄文人が大切にしていた土器の文様がそのままカワウソの骨にも刻まれていると云うことは、カワウソを大切にしている気持ちがあったからです。カワウソの力強い生活力に惹かれていたのでしょうか。 北海道 島牧村 1973



玉抱き三叉文と言って、縄文晩期大洞 B 式期、晩期初頭。ていねいに文様を彫刻している。骨だからと言

って省略していない。大切に扱っている証であり、唯一の例である。右上の下顎骨にも切断加工品がある。

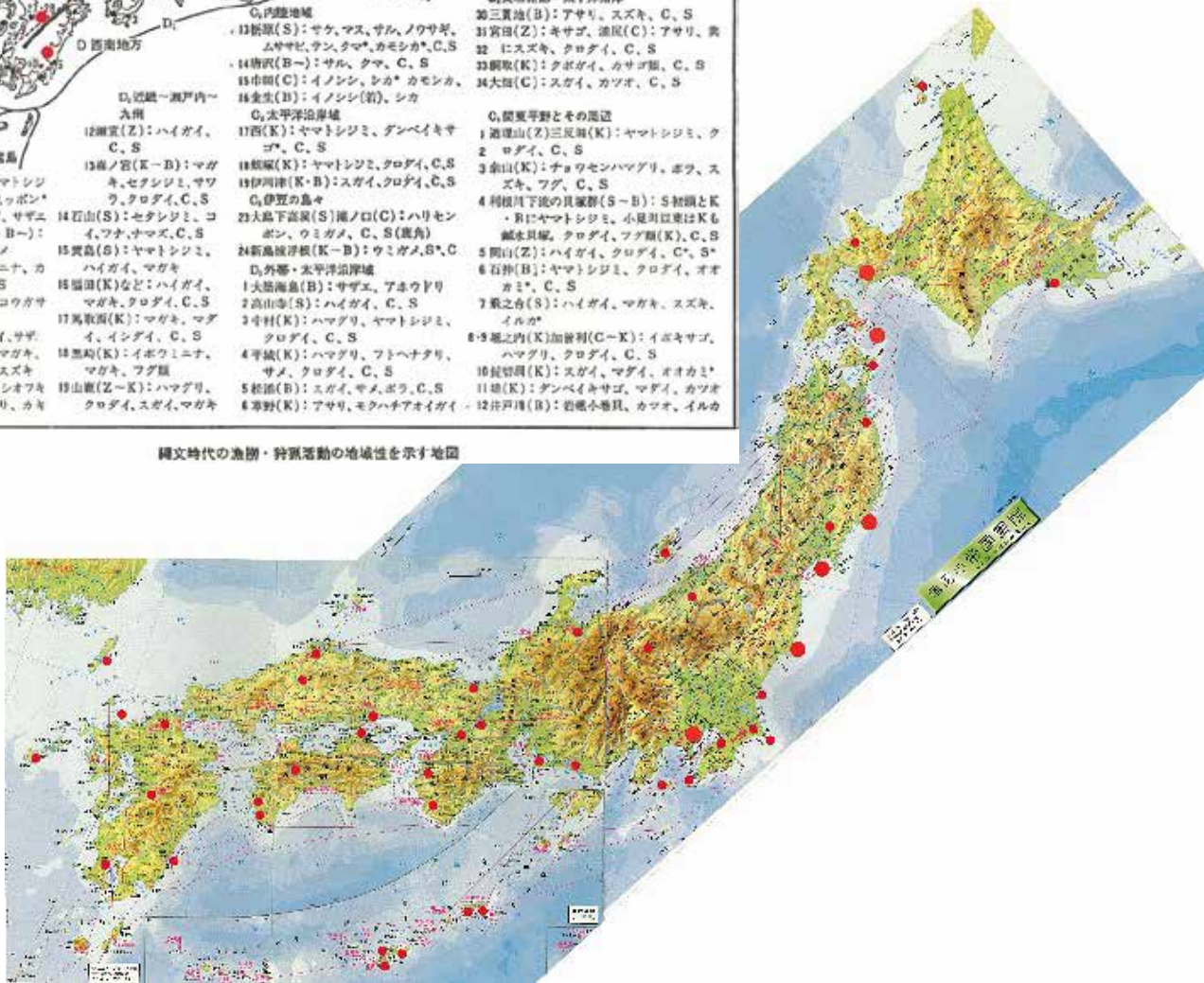
縄文時代 貝塚遺跡の分布図

それぞれの●印カ所が考古学的にどのようなことで著名なのかを簡単に述べました。原著論文にはさらに詳しい説明があります。

金子浩昌、西本豊弘、永浜真理子
狩猟・漁労対象動物の地域性
季刊 考古学 創刊号、1982



縄文時代の魚類・狩猟活動の地域性を示す地図



遺跡に立った思いで、また遺物を手に持った感で読んでいただきたいのです。

縄文人と動物たち

私がここで述べたいと思うことは、縄文人が動物たちを弓矢や槍で追い廻したり、落とし穴に誘い込む算段をどのように考えたかということではなく、縄文人たちと動物との関わり、動物たちをどのようにみていたか、そこから何かわかることがないかしら、という思いで、遺物(動物骨、骨角器などの)を報告書から選ん

で図示してみました。

縄文人は動物たちに教えられ、助けられたそのお陰で厳しい自然の中を生き抜くことができました。畏敬の念で見ていたはずです。縄文文化、骨角器文化の根底です。縄文文化を学ぶと云うことはどういうことだったのでしょ。

考古学的な資料からの考察

日本列島の各地に残された縄文時代の貝塚からは、当時の人々によって捕獲された動物—獣・鳥・魚類などの遺体が残っています。

さらにそれらの動物の骨格を素材として、つくられた道具をみることができます。

動物たちが縄文人の衣・食の支えになったことはもちろんですが、その骨角を素材として様々な道具がつけられ、動物を獲り、身を飾る装飾品の素材になりました。骨角器文化と呼ばれるものですが、これは世界の石器時代文化の中でも比類の無い優れたものです。その片鱗を御覧下さい。

まず、関東地方の後～晩期に形成された大規模貝塚でその獣類捕獲は、どのようだったのでしょうか。

イノシシ・シカは話題の中心になりますが、どの位個体数が残されていたのでしょうか。

市原市西広貝塚例はその個体数を推定した唯一の例です。時期差については、本文中に述べられています。

本州～四国～九州 - 縄文人と関係のあった獣たち

☆ニホンジカ・イノシシ

☆ツキノワグマ・ニホンカモシカ：山地

☆イルカ類・アシカ・オットセイ・アザラシ類・トド・ジュゴン(日本産クロアシカ、明治以降姿を消す)

☆タヌキ・キツネ・イタチ・テン・アナグマ・ニホンカワウソ・ラッコ・ムササビ

☆ホンドオオカミ・オオヤマネコ(狩猟獣ではなかったと考えています。)

ニホンジカとイノシシ - 最も普通にみる獣。縄文人の生活を支える。

○衣・食

○道具の素材として最重要の役割「骨角器」

獲り つくる 生産道具

身を整え 飾る 装身具

○骨角器の製作は各地に独自の文化をつくり出した。

素材の違い、製作法の工夫に専念したから。

日本海側の遺跡-富山県富山市オダケ(小竹)遺跡(呉羽町・県東部)

2009 年北陸新幹線(長野～金沢間)建設工事中に見られました。しかし、以前よりよく知られた遺跡でした。日本海側最大級の貝塚ですごい遺跡。何がすごいのか、これからの研究で更にわかってくるでしょう。

日本海側には貝塚が少ない。単調な海岸線だから。河口部(神通川、庄川の河口)に小入江ができるが、砂州が出来て、内側は潟湖(ラグーン)になる。ヤマトシジミが多産。

丘陵の縁に住居をつくり、シジミを採って食料とし

富山県富山市 小竹貝塚 骨製装身具 → 諸磯 A・B(浮島期)

潟湖と内陸の豊かな自然に支えられた生活がこの骨角器文化をつくり出した。遺物を実査する機会がなかったが、分類を試みた、報告書で充分であった。

金子浩昌:小竹貝塚出土の骨角装身具の分類-小田原市羽根尾貝塚出土の骨角製品研究の比較資料としての試み-神奈川を掘るⅡ、玉川文化財研究所 研究論集 2017

貝塚ができた。

漁労の活動

狩猟の活動 シカ 44% イノシシ 18%
イヌ 30%

- ・射水(いずみ)平野背後の丘陵は、狩猟に好条件であった。
 - ・呉羽丘陵
- 動物遺体の出土、クマ・オオカミ犬歯の副葬例がありました。



●印:同形態です。



←小田原市 羽根尾貝塚 関山Ⅱ式期

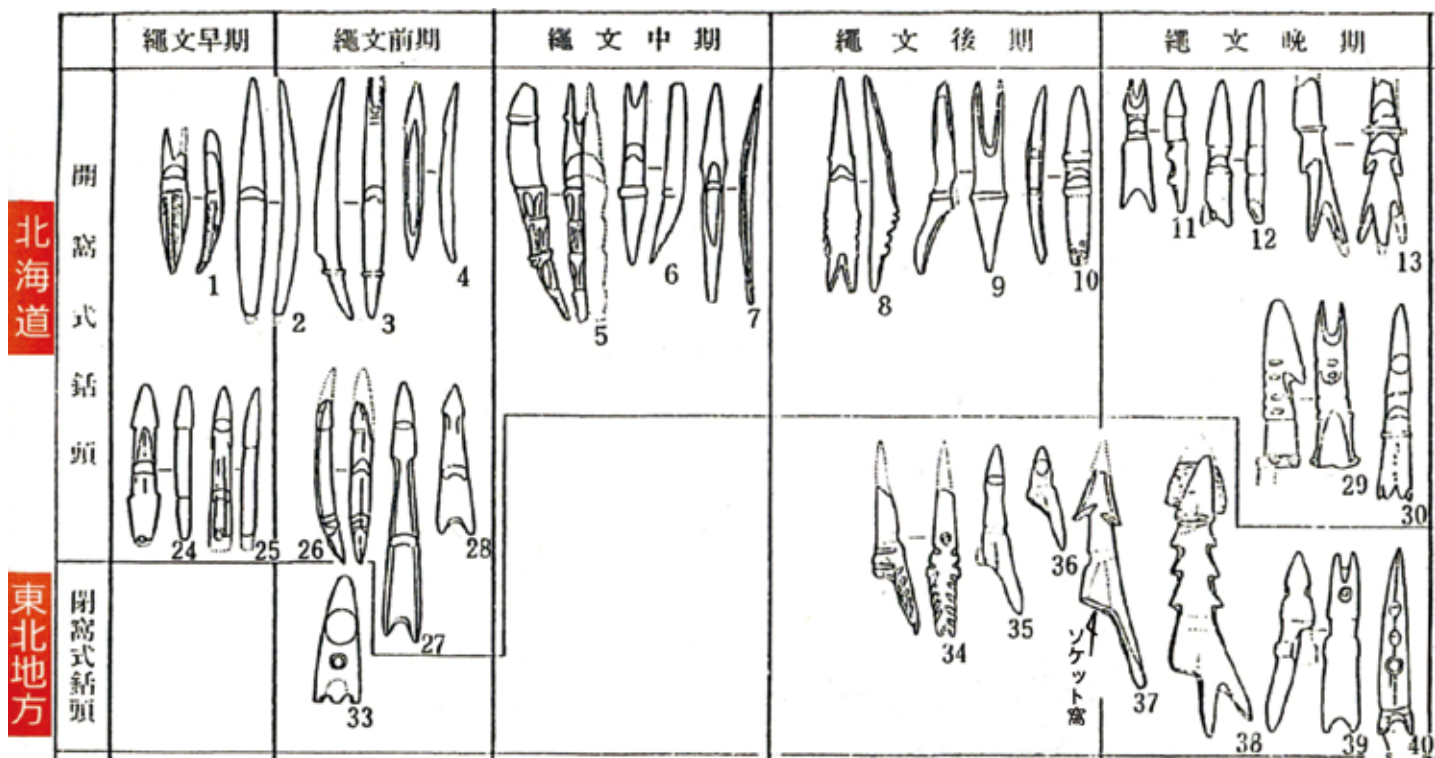
図にみるように多彩な骨角製品が出土した。その中に、上述の小竹貝塚製品に近似する垂飾品があった。遺跡間の交流があったことは間違いない。
戸田哲也ほか「神奈川県小田原市羽根尾貝塚 2003」

参考図 銚頭形態の一覧

文献:歴史公論 5. 1976. 1 金子浩昌 銚頭の変遷

縄文時代北海道・東北・関東地方における骨角製銚頭の形態変遷とその系譜 (紙幅の制約のために編年, 形態上の位直づけはかなり窮屈になった。(すべて約¼))

銚頭の変遷図 -各地、各時代の人々の努力の結晶です。



- 1・2: 釧路市東釧路, 3・4: 伊達町北黄金, 5・6・7・10・12: 島牧村栄磯
- 8: 戸井町戸井, 9: 礼文島船泊, 11: 乙部町三ツ谷,
- 13: 上磯町久根別, (以上北海道開窩式)
- 24・25: 八戸市長七谷地, 26: 北津軽郡オセドウ, 27・28: 八戸市一王寺,
- 29: 陸前高田市瀬沢, 30: 木造町亀ガ岡 (以上本州開窩式), 33: 宮城県七ヶ浜田大木囲,
- 34・35・36: 石巻市南境 37: 陸前高田市瀬沢 38 : 石巻市沼津,
- 39・40: いわき市寺脇

新石器時代(縄文時代)銚頭の多彩な発達です。開窩式の発達する北海道の遺物が見事です。
東北地方も閉窩式銚頭発達を中心となり、さらに有孔銚頭発達を中心とする。

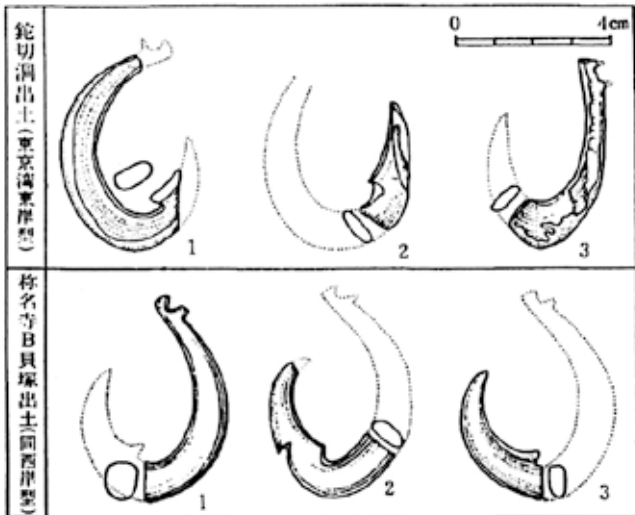
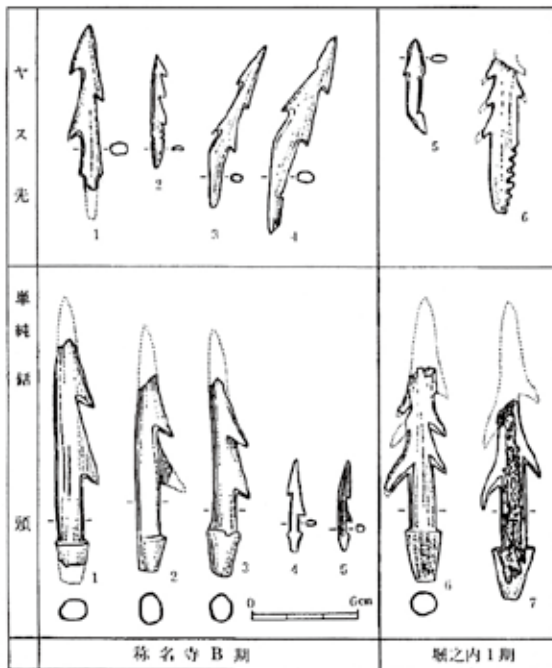


図:後期初頭の釣針(実際に使用された釣針は破損が著しい。点線は推測して復元したもの)
 上段 1~2 は曲軸系の釣針で、下段のものと同じつくり。
 3 は軸が曲がらない直軸系。下段 1~3 はすべて曲軸系。

鹿角製の釣針の中で最もていねいなつくりである。釣針の効果を考えてつくった。素材の扱い方から特徴がみられる。類品を見ることは少ない。

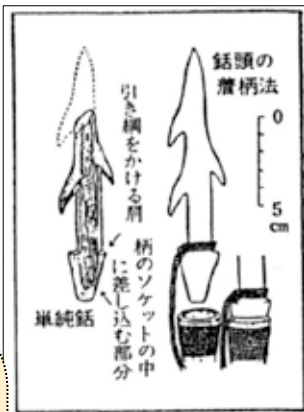
↓ 横浜市称名寺貝塚



関東地方ではこの単純鉤頭を中心として発達しました。

称名寺貝塚A・B貝塚、そして堀之内1期の貝塚例です。

東京湾湾口部地域です。



鉤頭の形態分類

- ①鉤頭：ソケットに柄の先を挿入する。
- ②単純鉤頭：ソケットはない。
 - (1)-鉤頭 a:開窩式鉤頭-ソケットは皮などを巻いてつくる。
 - b:閉窩式鉤頭
 - (2)-単純鉤頭 a:有肩式
 - b: 有孔式



福島県いわき市大畑C貝塚

鉤頭をつくるために、鹿角をどのように使ったか。これは大切な問題です。長い角ですが、どこでもという訳には行きません。逆鉤を長くとれるようにするには、場所が限られます。

この角の写真を良く見て下さい。表面の顆粒の発達の仕方が違います。それを心得てつくるのです。また枝の出方も違います。そして、内部のスポンジ質の在り方です。剥片石器が唯一の道具だったのでしょう。本当に大変な仕事でした。

←この鉤頭は、右端にある横浜市稲荷山の例にみるように、関東地方系の鉤頭です。いわき市で出土した唯一の資料です。称名寺系の単純鉤頭の北限です。これより北へは何故か、小さくなり形も変わりますが、それでも宮城県大船渡湾辺りまでみることができます。

北 海 道

貝塚の形式が少ないので動物骨からの調査が限定されます。

エゾシカ

遺物として遺されている陸獣の主体です。

ヒグマ

北海道を代表するけものですが、遺跡の出土は少ない。少ないというか、不明の状態。時代が新し

くなると頭蓋骨の集積例はある。
海獣類=アザラシ類、トド、アシカ、オットセイなどの鰭脚類・イルカ類、鯨類

海獣類を狙って海岸地帯に生活の拠点をつくりました。その遺跡を各地にみます。こうした動物たちの回遊域に当たっていました。

(例)噴火口沿岸域=オットセイの回遊域に当たっていました。

銚頭がつくられます。「開窩式銚頭」でつくりました。北海道独自の形態です

北海道の縄文時代狩猟

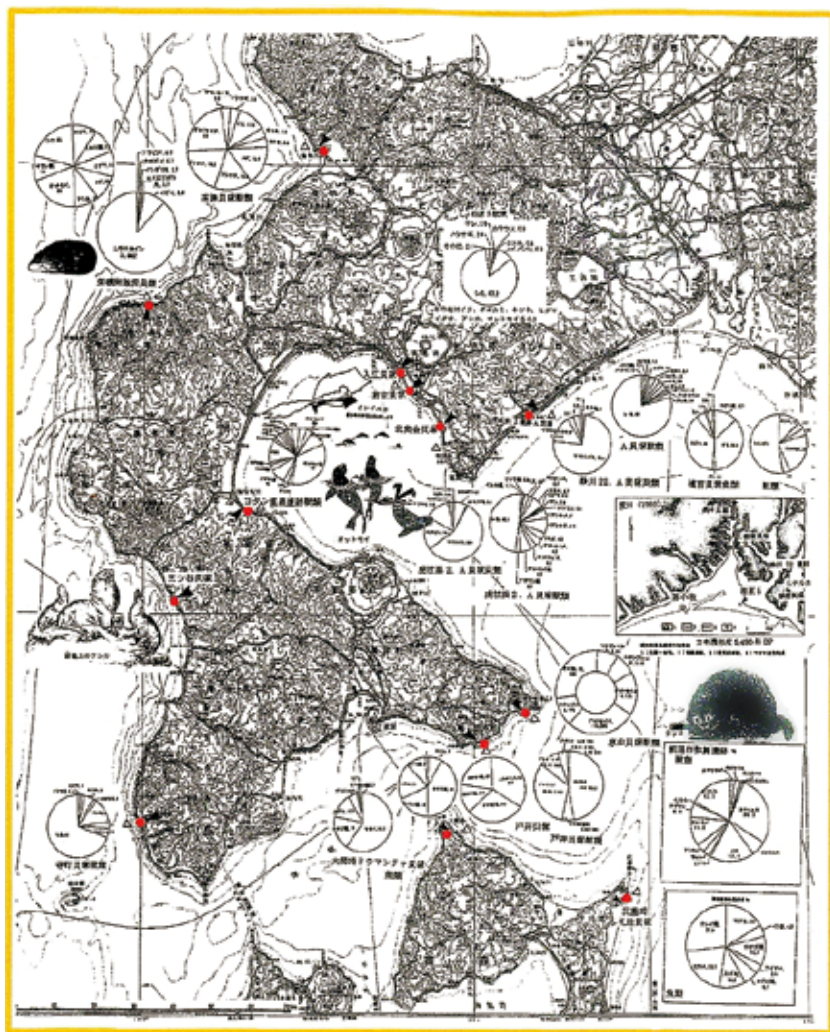
土肥研昌 2017 考古学ジャーナル 694
「北海道における縄文時代の動物遺体」より
ここでは「獣類」中心にしました。

北海道では縄文時代の貝塚遺跡は 79 地点が確認されている。

北海道を流れる大きな河川である石狩川、天塩川、十勝川河口域に分布がない事が読み取れる。

地形的にはむしろ丘陵が沿岸部に迫り中小の河川が複雑な谷を開析し、海進期に内湾が生じた場所に貝塚が残されている。もちろん大きな河川の支流域は縄文時代の遺跡多数が存在し、遺物包含層に焼骨が多量に含まれていることも少なくない。この場合、焼骨の大半はニホンジカで、縄文時代後、晩期にはこれらにイノシシが混じる。
北海道南西部の貝塚

津軽海峡地域の西部日本海側には中期末葉~後期初頭の貝塚がある。松前町寺町貝塚層は貝類が 8 割を占、哺乳類では 7 割がニホンジカで、鰭脚類アシカ、オットセイが 2 割を占める。津軽海峡東部には、中期末~後期初頭の戸井貝塚がある。哺乳類ではニホンジカが 5 割、鰭脚類



上図は、金子浩昌、先史時代北海道の狩猟漁労活動の歴史
北海道立埋蔵文化財センター、年報 7,2005

のオットセイを主に、アシカ、アザラシが 5 割を占める。

特集 食文化と考古学—縄文時代の動物遺体—

噴火湾沿岸地域

貝塚の分布は噴火湾東岸に集中し、西岸部は少ない。前期前葉~前期後葉にかけて、ハマグリ主体の貝塚がある。前期後葉にオットセイの雌、若獣、幼獣の出土量が多いことも指摘されている。

このほか、中期~後葉の八雲町コタン温泉遺跡の哺乳類では、オットセイが5割を占め、若獣、幼獣が多い。

積丹海岸地域

中期の余市町大谷地貝塚やフゴッペ貝塚、後期の泊村茶津洞窟遺跡、小樽市恵比寿神社遺跡がある。中期~後期の泊村茶津貝塚では、多種の貝類のほか、哺乳類の鰭脚類のオットセイ、アシカ、トドで8割近くを占め、ニホンジカは僅かに混じる程度である。

苫小牧低地帯地域

この地域の貝塚は前期の海進期の貝塚が主で、千歳市美々貝塚北遺跡、苫小牧市美沢4遺跡、植苗貝塚、柳館貝塚、静川22遺跡などがある。哺乳類は、ニホンジカがほとんどである。

縄文時代前期の白老町虎杖浜2遺跡がある。哺乳類ではニホンジカが約5割を占め、次いでオットセイ、アシカなど鰭脚類が3割を占める。

釧路・厚岸海岸地域

東釧路貝塚の哺乳類では、海獣類が多くイルカ類の頭骨を放射状に配列するなどの儀礼的な出土状況が見られる。晩期では釧路市弊舞遺跡の哺乳類では、ニホンジカ、イシイルカ3割、海獣類ではカマイルカ、イシイルカ3割、鰭脚類のオットセイ、アザラシなど約2割より多い。天寧1遺跡と両遺跡から、ラッコが少数出土し、イヌの出土量が多い共通の特徴がある。

道北の礼文島には、縄文時代後期の船泊遺跡がある。離島のためニホンジカはほとんどなく、海獣類がほとんどである。中でもアシカが9割を占める。

北海道の縄文時代の貝塚は、哺乳類ではニホンジカ

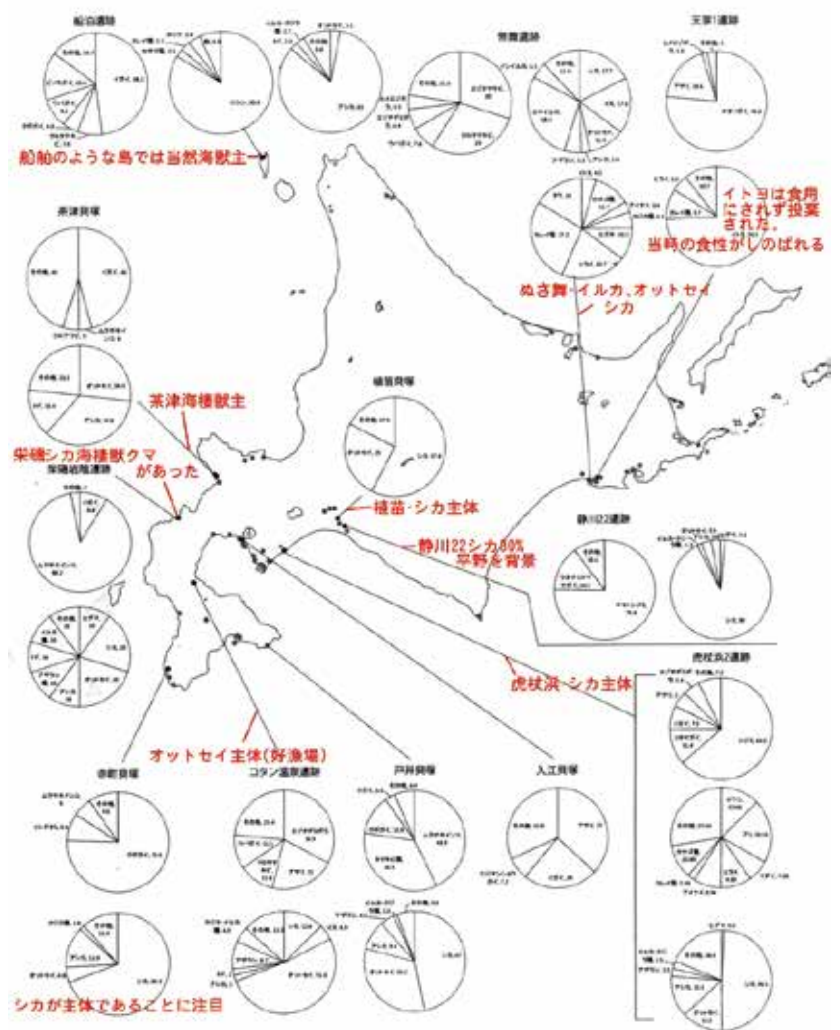
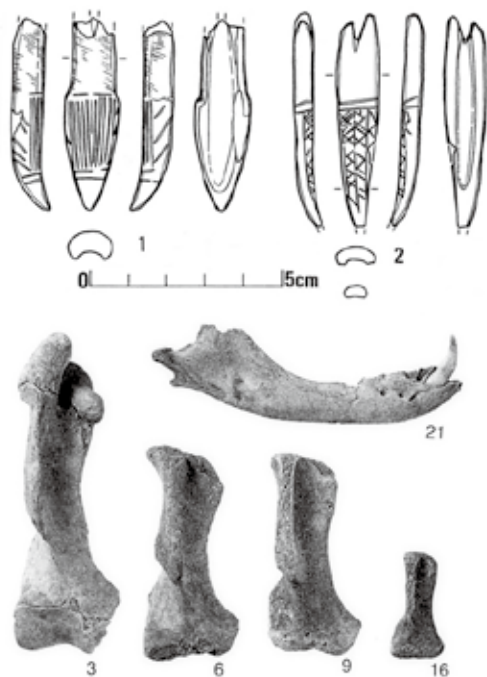


図1 北海道における縄文時代の貝塚分布と出土動物遺体

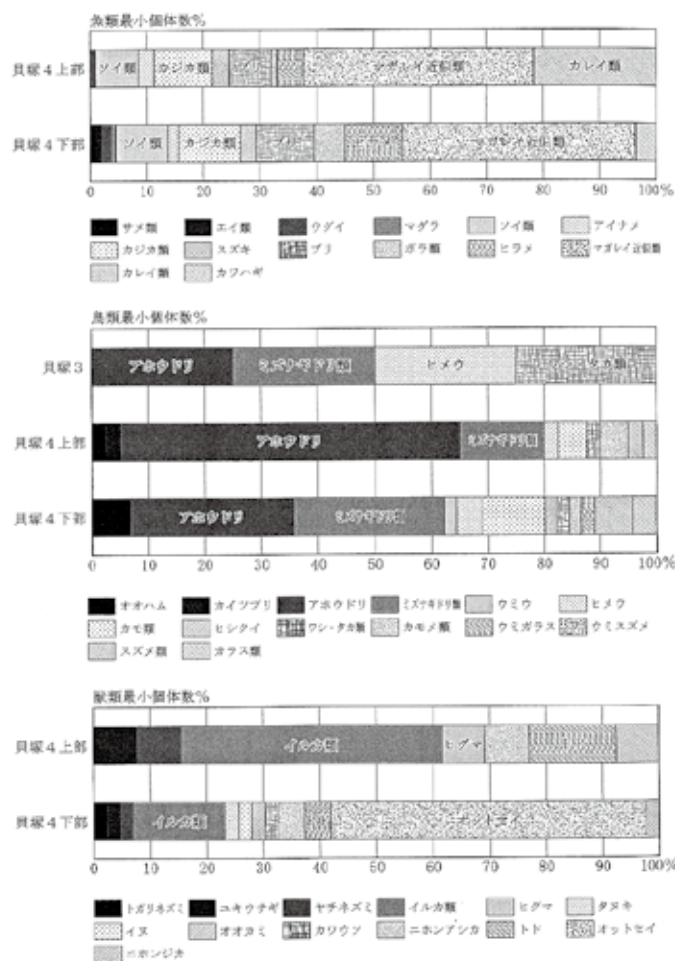
が全道の主要な種で、次いで太平洋岸ではオットセイが多く出土する。特に噴火湾岸では若獣・幼獣が多いが、これはオットセイの回遊習性に関係するものと見られ、日本海側北部では、アシカがオットセイよりも多く出土し、トド、アザラシは少ない。

晩期の弊舞遺跡や、天寧1遺跡ではイヌの出現頻度が高い。出土するイヌは若獣が多いことや解体痕があり、オホーツク文化につながる北方地域の影響が晩期後葉までさかのぼり、イヌを肉や毛皮採取目的に飼育している可能性があるとの指摘がある。天寧遺跡から検出された魚骨層から、数万個は含まれていると想定されるほど、イトヨの遺体が含まれていた。この時代の価値観が変化する時期なのか、イトヨは食用とされず廃棄していた可能性がある。

東釧路貝塚の魚・鳥・獣類遺体 2010
 ・東釧路貝塚調査報告書Ⅱ2010.3
 北海道釧路市埋蔵文化財調査センター



東釧路貝塚 魚・鳥・獣類%



上段:前記、開窩式銚頭、肋骨製(海獣類)、3・6♀ 9♂
 下段:オットセイ 21 右下顎骨♀、3~16 上腕骨、16 幼体 (1/2)

今回の調査によって得られた動物遺体は、魚、鳥、獣骨のいずれも多種、豊富で北方地域での在り方をよくみることができた。カレイ類は内湾の砂底に多産し主要な魚種であったが、夏期には大形のブリの回遊があり、ボラ、カジカ類も多産する年間を通じて豊かな魚類資源があった。鳥類もまた豊富であった。夏期ではあるが大形のアホウドリの来遊は資源として重要で、羽毛、肉資源としてすぐれ、骨格は針などに使われている。この鳥を目当てにした捕獲があったのであろう。海棲獣もまた重要な資源であったが、それらをすべて集めても、なおここに生活する人々の数、集落の規模は限られたものと思われる。狩猟の主体はオットセイにあった。捕獲が雌主体であることは回遊集団の構成とも関わるのであろう。オットセイ雌成体の体長は145cm、体重63kgという。貝塚産オットセイ雌の最小個体数22個体であるが、成体とそれに近い個体で12個体、若幼個体で10個体と推定した場合、その総体重は1,164kgで、可食肉量(1/3廃棄)776kgとなる。今、仮に5家族(一家族4人として)20名に、1人148g/日を分配すると、20人分で2,960g/日になり、262日分の肉量が確保されることになる(1人148g/日というのは有名な狩猟民南アフリカ、カラハリ砂漠に棲むブッシュマンの一日の平均肉量で、欧米人は300g/日という。ブッシュマンというのは唐突かも知れないが、摂取肉量は現代日本人より多い。彼等の主要食物はメロンなどの果実であるが、「肉」こそ最高の食べ物という信条があるという。縄文人も同じではなかったか)。トド、アシカ類はオットセイ雌個体よりもはるかに大きくなったが(トドみであれば10数倍、アシカで5倍)、遺骸の出土が限られた肢骨の一部のみであるので、分割されたようである。魚肉、鳥肉も考え合わせて1年分あまりが供給されていたのではないかとと思われる。

註 「エゾノウサギ」の和名は、門崎允昭『野生動物調査痕跡学図鑑』2009北海道出版企画センターによる。
 オットセイ、トド、アシカの体重は、西脇昌治『鯨類、鯨脚類』1965東大出版会による。さらに貝塚資料については、筆者の保管するオットセイ現生標本と比較して体長復元をおこなった。
 ブッシュマンについては、田中二郎『ブッシュマン』1971思索社による。

下北半島

下北半島における縄文時代の漁労活動

1967年(昭和42年)「下北半島における縄文時代の漁労活動 下北-自然・文化・社会-67030

① 札地貝塚(東通村尻屋、縄文時代晩期)下北半島北端の海岸砂丘上に立地した貝塚。

ここからはアシカ類の骨格を多数出土した。その他の獣骨はほとんど見る事がなかったのでアシカを主目的とした捕獲活動の場であった。捕獲の方法が単純な撲殺などの方法によったのであろうか。頭骨で残されている標本はなかった。

② ドウマンチャ貝塚(大間町大間平、縄文時代晩期)下北半島西北端にある貝塚。アホウドリ(多数)、陸獣は少なく、アシカ類は大型の個体はあったが少ない。

③ 最花貝塚(むつ市、縄文時代中期末)むつ市にあり、やや大きな規模、本州最北端の内湾系貝塚である。ヤマトシジミを主体としている。魚・鳥・獣類の遺骸も多く、この地方に生息するニホンザルの遺骸も含まれていた。また、ツキノワグマの吻端部をのこす標本が二点同じ場所から出土している。それはちょうどアイヌの人々がクマの吻端と耳の部分の毛皮を残してクマ祭に頭を使ったのと同じ状態であったかも知れない。縄文期におけるクマ遺骸の出土例は少なくないが、頭部が一部でも復元できるような出土例はこれまでにない。



図18 最花貝塚出土のツキノワグマ遺骸
1a・2a, 脚骨の一部分、bは前脚、ただし、1bは鼻骨や上顎骨の大部分を欠くので、目蓋の裏面のAが見えている。3a, b, 左側下顎骨、4、復元した全体の頭骨

宮城県

1968年昭和43年「縄文石器時代貝塚出土のアシカ科海獣類の遺骸について-宮城県大木圍貝塚の出土例を中心として-仙台湾周辺の考古学的研究 681211

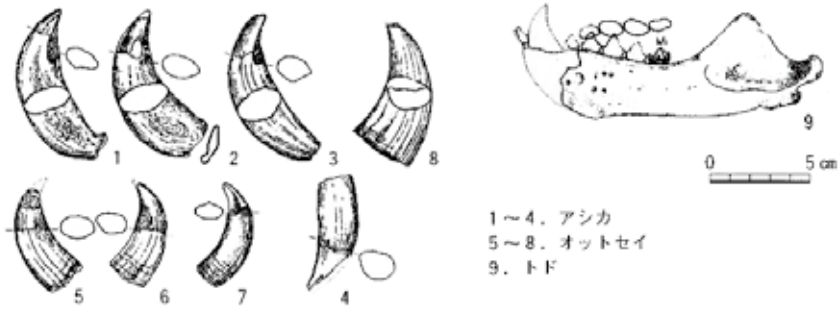
縄文石器時代貝塚出土のアシカ科海獣類の遺骸について

アシカ類遺骸については、北海道あるいは本州北部の貝塚からの出土例が知られていたが、大木圍貝塚にも多いことに注意していた。また、オットセイの遺骸もあり、この地域での鰭脚類猟の実態を示すものであった。

大木圍貝塚(縄文時代前期大木 5・6期)アシカ科海獣骨にはトド雄の若い

個体、雄の成獣、アシカ類の若、成獣、オットセイの雌の成獣と雌雄の若獣の個体が含まれていた。頭骨、

四肢骨は完存する標本はほとんどなかったが、下顎骨には若、成獣個体のものがよく残されていた。



アシカの下顎骨とアシカ・オットセイの大歯

関東地方における縄文時代の動物遺体—東京湾における大型貝塚の一樣相—

市原の貝塚

養老川の下流域を中心に40カ所ほど縄文時代の貝塚がある。西広貝塚は、養老川下流域右岸の標高42mの台地上に立地する。この台地は「国分寺台」と名付けられ、全国的にも著名な遺跡が存在する(図1)

動物遺体からみた西広貝塚の生業活動

西広貝塚から検出された動物遺体は、貝類・魚類・哺乳類・鳥類など100種類以上に及ぶ。(図3)

狩猟活動

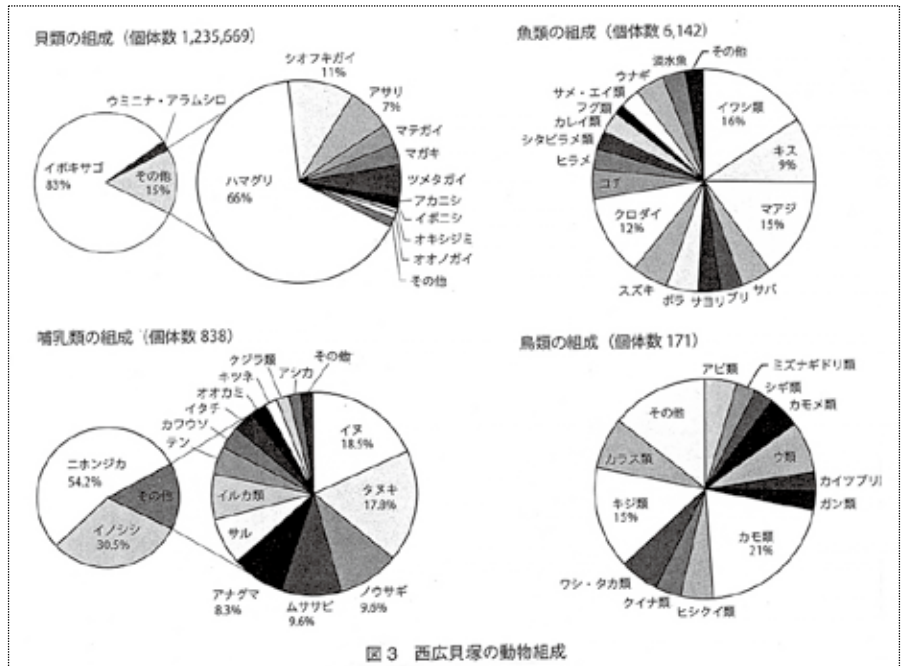
哺乳類は「各時期と共にシカとイノシシが多い。特に晩期層から大量に出土し、同定資料数のほぼ70%

を占める。シカは下顎歯の萌出段階からは、成獣の割合が、シカは後期 46%・晩期 62%で、若齢の個体が多く捕獲されている。同様の結果はイノシシの四肢骨端部がの融合状況でも認められることから、多産で繁殖力が高いイノシシの年齢構成を反映したものと捉えられる。また、後期後葉には生後間もないイノシシの埋葬が確認され、母イノシシとともに捕獲された個体が一時的に飼育された可能性がある。

(鶴岡英一「市原市埋蔵文化財調査センター」考古学ジャーナル 694,2017)



図1 西広貝塚の位置



西広貝塚

縄文人の蛋白質食料として、シカ、イノシシは余りにも少ない。魚肉を加えてもさして変わらない。それでは、貝類と小さなイボキサゴも集め、殻をこわして肉をていねいに食べた。破碎の貝層が積み上がった。それとて一粒が何と小さいことか。

植物質資源に注目していたことは当然で、出来る限り利用を考えていたはずである。採集加工の方法を考え調理したのであろう。もちろん、僅かであったが、魚・貝と併せて、主食ともなった。

イノシシ幼体の埋葬例

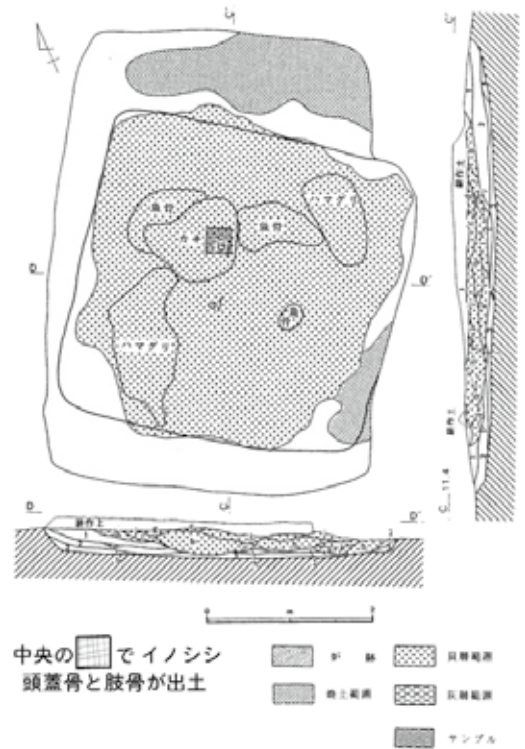
生後 3.5 ヶ月前後の幼体の埋葬例(乳歯 dm4 の萌出前後)をみることがある。おそらく解体されることはな

かったであろう。このような幼体を得る機会には雌成獣の捕獲の機会があれば、飼育を試みようとする気持ちがあったかも知れない。しかし、それが徒労に帰したとき、埋葬するか、食用にしたか、個々人によって違ったようである。多くの場合、飼養とまでは行かなかった。幼体骨の出土自体少ないからである。若い個体の骨が特に多いと云う例もない。別記した例を除いて(山梨県金生遺跡例は特に若齢個体の骨の一部を選んで行った祭礼的行為である。)

埼玉県さいたま市側ヶ谷戸貝塚で出土したイノシシ頭部(縄文前期関山式期)によせて

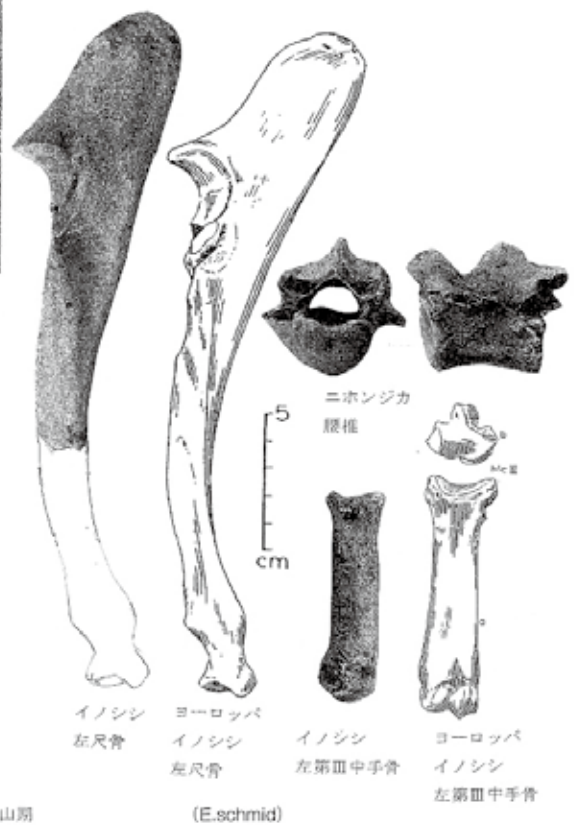
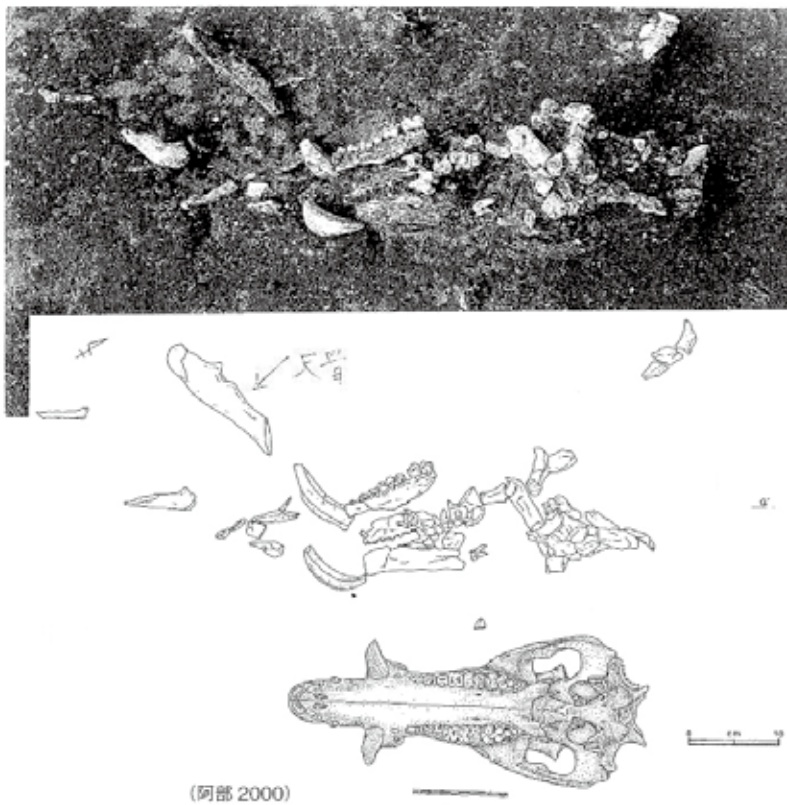
第4図の説明

縄文時代前期、奥東京湾内の大宮大地には、幾つかの前期貝塚のあることで知られています。それらの貝塚の発掘の資料を調査したことがあります。その一つさいたま市調査例に、イノシシ頭蓋骨が住居址中央から、幾つかの四肢骨と共に出土した例がありました。関山期の住居の中央で、イノシシの骨の出土は、そのみでした。その標本は現在、現状のまま取り上げられ、展示されています。仰向けの状態の頭蓋骨です。意図的にそのように置いたのです。口蓋の歯の見える面がイノシシであることをよく示すと考えたのでしょう。おしいたぐようにして、ここに置いたのかも知れません。頭蓋骨全長 36 cmになる大型のイノシシです。犬歯の付いたままで、これを抜くというようなことはしていません。他にはシカの捕獲もあり腰椎骨2点がありました。

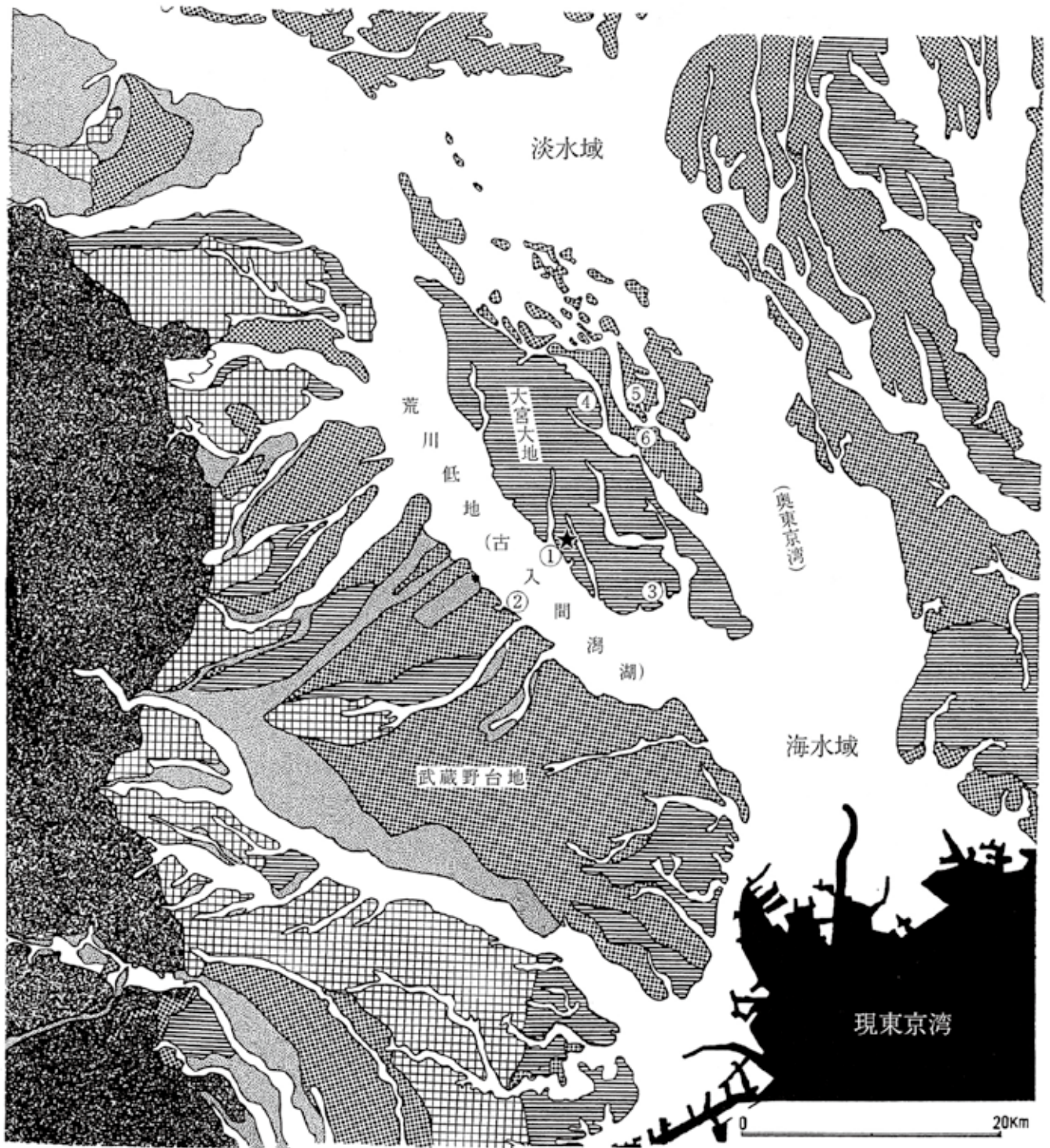


↓ 下図のような状態で頭蓋骨が置かれたが、崩れてしまいました。しかし、現状は十分に復元できます。この状態で保存されています。

側ヶ谷戸貝塚第4号住居跡貝層(大宮市遺跡調査会報告第58号集より)



大宮市側ヶ谷戸貝塚 前期 関山期
第4図 側ヶ谷戸貝塚第4号住(前期 関山期)出土状況



山地
 丘陵
 下末吉面
 武蔵野面
 立川面
 沖積面
 東京湾

★①側ヶ谷戸貝塚 ②水子 ③大谷場 ④関山 ⑤黒浜 ⑥花積

第1図 側ヶ谷戸貝塚の位置 (笹森ほか (1987) に支谷と遺跡名を記入)

このイノシシ1頭で一体何人の縄文人が過ごしたのでしょうか。そして、どのくらいの間。

縄文人は何と辛抱強く、仲良く暮らしたのでしょうか。それでも有り難く、頭の骨を住居の真ん中に埋めました。うり坊すら手に入らなかったのです(後書参照)。私はこの現場をみて涙がこぼれました。でも立派なイノシシが手にはいってよかった。それと比べれば、倉輪の縄文人はよかったけど、捕り尽くしてしまいました。他の島のイノシシも。



側ヶ谷戸貝塚 (イノシシ)前頁と同じ。

埼玉県花積貝塚出土の動物遺体

このようなイルカ頭蓋骨の出土は大変珍しいので、特に取り上げました。遺物は現在さいたま市にある埼玉県立歴史と民俗の博物館に保管されています。→

獣類: イノシシ、シカ、クジラ、アナグマ、タヌキ、イヌ、ネズミ

昭和 43 年資料

花積下層期

鳥、獣類: カモ類、イノシシ、ニホンジカ、が僅かにみられたのみであるが、黒浜、諸磯期の一般的な出土状況がさらに少ないことと比べれば、多い方であったと思われる。

縄文時代中期

獣類: イノシシ、シカ、の出土は縄文時代前期よりも増加し、バンドウイルカの頭骨がほぼ完存する状態で出土しているが、底部は壊されていた。イルカを祭ったのだと思います。



図27 花積貝塚のバンドウイルカ頭骨出土状況(歯が並んで出土している)

昭和 45 年・1970 年「花積貝塚出土の動物遺存体

花積貝塚発掘調査報告書

埼玉県遺跡調査会報告 第 15 集 700303

伊豆・八丈島の縄文時代イノシシ

倉輪遺跡出土のイノシシ遺体—倉輪遺跡:十三菩提~五領ヶ台式~勝坂式、前記末~中期中

文献:東京都八丈島倉輪遺跡、東京都八丈島町教育委員会 1987

金子浩昌・動物遺存体、骨・角・牙・製品

本遺跡における獣骨の主体を占めるものであって、その量もまたかなりの数が出土した。発掘の当初においては獣骨として出土するのはすべて焼けて細片化したもので、歯や骨格などでその形を留めるのは一つもなかったのである。ところが、第6次の調査において、堅穴状遺構にまで発掘が進展するに及び少なからぬ量の歯や骨が出土するに至ったのである。これはイノシシのみでなく他の魚骨などについても同様のことがいえ、ここには骨塚状のものもあったことが判明してきた。そしてこのような骨の保存が可能に

なったのは、遺構を埋める覆土中に多量の灰が混り、部分的には 灰層によって覆われるといった状態がみられたからと思われる。第1号堅穴状遺構においてそれが顕著であって、獣骨もそこに集中する形となった。ただ、残念なことに骨の保存を完全にする程には至らなかったためと、土圧による骨の破壊が強かったため、そして発掘との障害もあって、かなり破損した状態でしかとりあげられなかったのは残念であった。そのような事情がありながらもできる限り、標本の採集に当たった。

第12表 イノシシ出土量表

地点	cra 頭蓋骨 *1	md 下顎骨	vert 脊椎骨 肋骨*2	scap 肩甲骨 *3 p s d	hum 上腕骨 p s d	rad 腕骨 p s d	ul 尺骨 p s d	mc 中手骨 p s d	pel 寛骨 p s d	fe 大腿骨 p s d	tib 脛骨 p s d	fib 腓骨 p s d	ta 距骨	ca 踵骨	mt 中足骨 p s d	dig 指骨 I ④III
2号住	r						①		2					1	mc or mt II or V	
	l			1	1		①									
堅穴状遺構	r 乳突起															
	l		at 4	5	②1	1 1	1		1	1fr	1		4	2		基2 基(IV)
	r occ.								尺側手根							中節5
	l zygo, temp		椎体5		①5											
r								met 2								
l			C 3					lmet								
同5区	r 後頭頂		T 1	2	①	別	①			①						基節2 中末節3
	l		L 2		①	1							1			
	r temp		肋 9													
l ~occ.																
各区	r		T 1			1			1①				1			
	l zygo2		L 3		2	1		lv	2①1	1	1	1(ep 1は1枚)				
	r occ~		肋 7													
	l fro								1 2							
	r temp															
l ~occ.																
r																
l parie																

下顎骨は別表の歯牙表に示す。

*1 occ 後頭骨、par 頭頂骨、tem 側頭骨、fro 前頭骨、inc 切歯骨、zygo 頬骨、hyo 舌骨
*2 At 第1頸椎、Ax 第2頸椎、Cer 頸椎、T 胸椎、L 腰椎、S 仙椎、Cau 尾椎、R 肋骨

歯牙

多くの歯が出土している。それらの保存の状態は第15表に示す通りである。それにもみられるように第1号竪穴状遺構及びその周辺に分布している状態がよくわかる。上顎骨、下顎骨としてのこるものもあり、それら左右ののこされるものもある。左右がのこるのは、その場所に頭骨があったとみてよい。事実、竪穴状遺構上部の灰層中に仰転した形で頭蓋の埋存していたことが確かめられている（図版6-B）。なお、この頭骨の上顎の犬歯は抜かれていた。

上顎歯の標本の中で歯列長の計測できたのは次の通りである。

P2～ M3:102.0 (♂)、97.6(♂)

95.3(頭骨全長 338.0)、

99.0(頭骨全長 347.4)

P4～ M3: 74.8、 72.0(M3

の後端が完出していない)、

70.35(2>の標本を計測)

76.0、 75.0(現生)

硬口蓋左右幅

左右 P4 位置での幅

(歯冠部分で計測) :57.8

56.3 (近畿産現生標本)

左右 M3 位置での幅

(歯冠部分で計測) :67.6

64.0、67.3(")

倉輪遺跡出土のイノシシの頭蓋を本土産(房総半島での貝塚資料)のものと比較すると17～20%は小さい。また、M3の最大長の計測値では縄文具塚産(千葉県西広貝塚、後期)平均35.65(n=37)、倉輪遺跡31.25(n=43)あった。本土産のが変異幅が広いのに対して、倉輪産のは大きさのばらつきが少なく、本土のイノシシに対して小型のイノシシであったのである。

ところで、このようなイノシシが縄文時代の八丈島でどのような状況で人々と接するところとなっていたのか興味

ある問題であるが、この場合まず本遺跡で知られたような本土産のものと比べて小型のイノシシはすでに早期の平坂式期に属する大島下高洞A遺跡で知られることが注目される。そして、この時期と同時期の遺跡は八丈島でも確認されている。とすると八丈島でもこの時期に、大島におけるのと同様にイノシシがいたことも考えられ、その後裔が倉輪遺跡のイノシシである可能性もある。若し、そうでないとすると、この倉輪遺

1・2:肩甲骨左右 3・4:上腕骨左 5:橈骨左
6:尺骨左 7・8:寛骨右左 9・10:胫骨右左
11・12:距骨左右 13・14:踵骨左

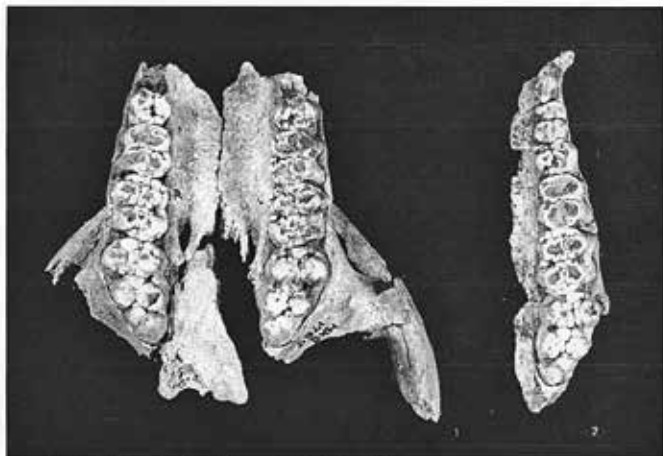


跡の時期になってはじめてイノシシがもたらされたわけであり、そのための供給地を考えなくてはならない。そのような供給地があったかどうか、例えば大島の鉄砲場岩陰遺跡のような倉輪遺跡と併行する時期の遺跡でイノシシの出土が確認されてはいるが、それ程の供給量が島の諸遺跡にあったかどうかは問題であろう。

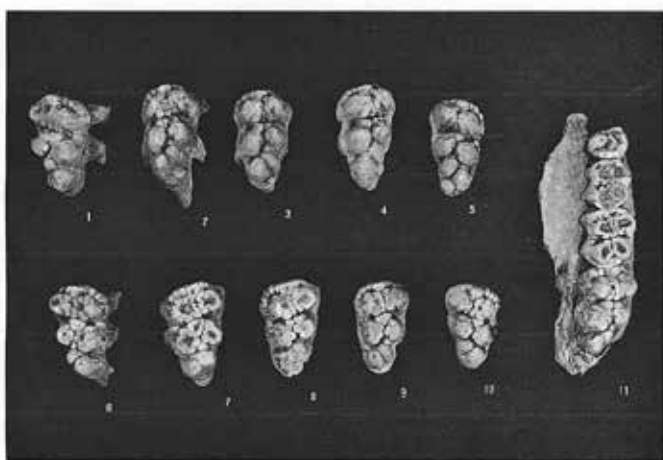
こうした問題と関連して、倉輪遺跡出土のイノシシの歯牙の咬耗状況から、その捕獲季節を推定したのが第15表である。これによると、満1才の年齢のものを除いて、2.5才までの個体のものは、季節による差が認められ、秋から冬、春にかけてが多く、夏に少ない。このような捕獲の状況は本土における一つの例、例えば愛知県田原町伊川津貝塚での調査結果と同じ傾向を示している。このことは、八丈島でも同じような狩猟活動のあったことを推測させるのである。ただ、1才の個体の少ないことは、あるいは

伊豆の島々は元からイノシシが生息していました。縄文人はそれを目当の一つとして渡りましたが、それを獲りつくしてしまったと云うことでしょうか。

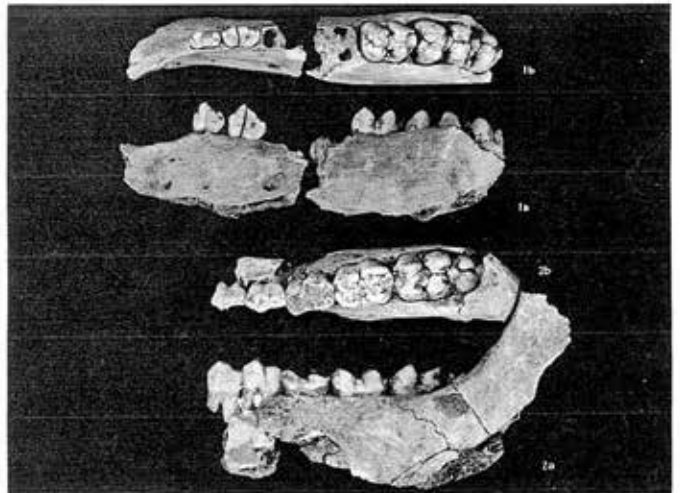
は島という条件を考えての資源保護のための配慮があったかもしれない。島での厳しい生活環境を充分認識していたからではないかと推測するのである。



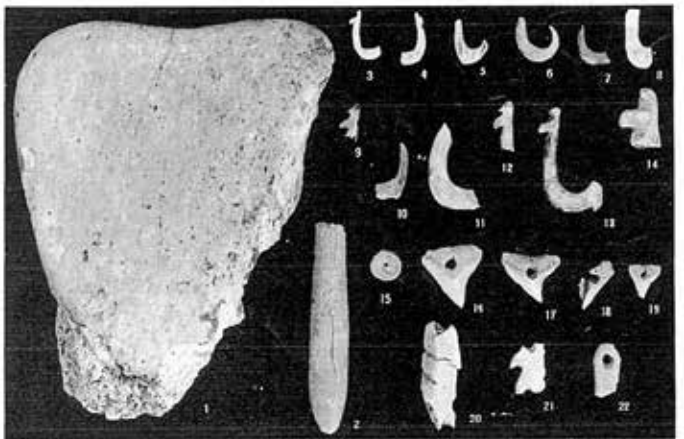
A. イノシシ上顎骨及び歯 (S=1/1) 1. 上顎骨 2. 左上顎骨



B. イノシシ顎骨及び歯 (S=1/1) 1・3・6・10, 5M 2・4・7・9, 5M 11. 左上顎骨



4. イノシシ下顎骨 (S=1/1) 1-2+3, 5M 4+5



5. 骨・歯・顎骨 (S=1/1) 1. 顎骨 2. 顎骨 3-14. 顎骨 15-18. 顎骨 19-22. 顎骨



金生遺跡の問題と並んで佐渡・伊豆のイノシシの問題があり、それは縄文人が連れて行った、そこで飼っていたという話になります。

私に言わせると島で飼ったのなら、本土でなぜ飼わないの。それで一生懸命飼育したイノシシを探そうと研究している研究者もいます。

倉輪遺跡はその問題の一つです。

第15表 イノシシ臼歯の萌出と咬耗状況による捕獲季節の推定と捕獲の最小個体数

咬耗の程度を示す 萌出の程度を示す	0.5才未満		0.5才	1才	1.5才	2才	2.5才	2.5才以上
	夏	秋-春	夏-秋	冬-春	初夏	秋		
<> 未萌出肉	a					{ L 1 R 0		
— 萌出途中 咬耗なし	b					{ L 3 R 6		
第1咬痕 + エナメル質 咬耗	c	L 2 R 6		{ L 4 R 2			{ L 5 R 5	
第1・2咬 + + エナメル質 咬耗	d			{ L 3 R 3			{ L 6 R 1	
+ + + M ¹ 第1咬 痕あり	e	L 2 R 4			{ L 8 R 2		{ L 4 (M ₂) R 2	
+ + + M ²	f			{ L 0 R 9			{ L 8 R 11	
+ + + + M ¹ — 穿孔が連続	g						{ L 7 R 4	
+ + + + M ²	h						{ L 1 R 1	
⊕、⊕ M ¹ — 全面穿	i							
⊕、⊕ M ² + + + + + M ¹ a-dはM ¹ , M ² の 咬耗状況 e-hはM ¹ , M ² を示す。	j						{ L 0 R 1	
計	L 2 R 6	L 2 R 4	L 4 R 2	L 11 R 14	L 4 R 6	L 15 R 8	L 16 R 17	
伊川津貝塚例*	5	27	10	18	13	28	44	

歯の磨耗状況

<> : 未萌出
+ : エナメル質咬耗
++ : 小窩状立
+++ : 同連結
⊕ : 全面穿

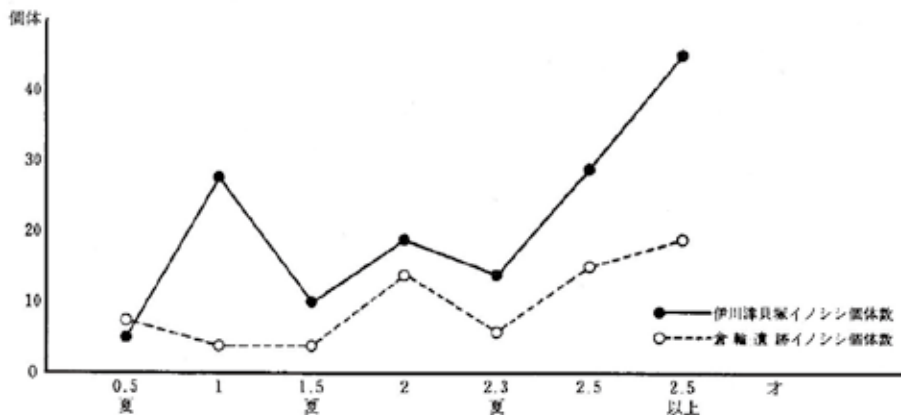
M₁, M₂の場合

a : <>
b : —, —
c : +, —
d : ++, +
e : ++, ++
f : ++, ++
g : ++, ++
h : ++, ++
i : ⊕, ++
j : ⊕, ⊕

M₂の場合

a : <>
b : —, —, —
c : +, —, —
d : ++, —, —
e : ++, ++, +
f : ++, ++, +
g : ++, ++, +
h : ++, ++, ++
i : ++, ++, ++
j : ++, ++, ++
k : ++, ++, ++, ++
l : ⊕, ++, ++, ++
m : ⊕, ⊕, ++, ++
n : ⊕, ⊕, ⊕

*新美倫子氏(東京大学文学部大学院)、西本豊弘氏(国立歴史民俗博物館)による。



3. 獣類

イノシシはかなりの量の歯牙骨格が出土した。本土における同時期の遺跡で、これ程の量を出土した例はないであろう。獣骨を多く出土した地点が、種々の遺物の集められた集石状遺構ではないかと考えられており、獣骨の多いのもそうした特殊な遺構と関連があるらしい。イノシシは歯の数が四肢骨よりもはるかに多く、頭蓋や下顎骨が集積していた可能性がある。ここから出土したイノシシの歯は本土の貝塚から出土

するものより小さく、上顎 M3でその長さが倉輪産平均31.25 (n=43)、房総半島の後期貝塚例(中期資料が多くないので)平均35.65 (n=37)、そして本土産のは大・小のばらつきが大きい、倉輪産には小さい型のもがよく揃うという特徴がある。このようなイノシシは本土から直接はこぼれたものではなく、大島や八丈島にのみいた集団であろう。なお、シカの歯は無く、骨角は加工品以外は全く見られなかった。

金生遺跡出土の獣骨 金子浩昌

山梨県北杜市(旧北巨摩郡大泉村)大泉町谷戸寺金生
1977年調査・縄文時代後・晩期を主とした集落址
金生遺跡の獣骨は稀有な例で、縄文時代のイノシシ
飼養の問題でよく話題にされますが、慎重に扱いた
いと思います。

1.はじめに

イノシシ焼骨の発見

金生遺跡の一つA遺跡と呼称された地域で多量の
獣骨が出土したと云う知らせを受けたのは、この地
域の発掘調査も最終の段階に至っていた昭和53年11
月25日のことであった。資料の確認と今後の対応の
ために牛沢百合子君が現地に向ったのはその直後で
ある。そして、それらが大部分イノシシのものであ
ること、しかもそのすべてが強い火で焼かれている
ものであったと云うことが確認された。さらに、そ

れらが若い個体のもので、かつ下顎骨のみという特
定の部位を集めたものであることも牛沢君によって
直ちに確認されていたのである。

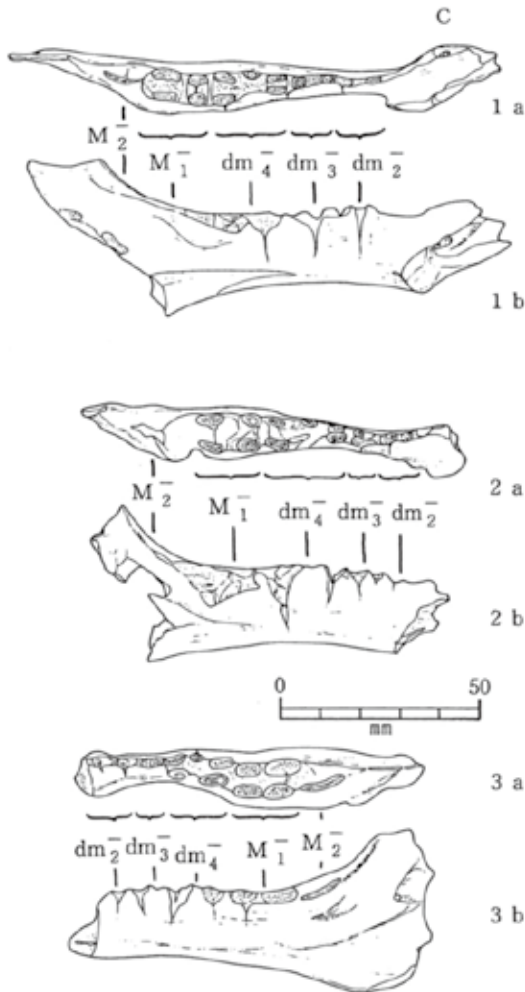
このような骨の在り方は、筆者らがこれまで、日本
の各地でみて来た骨の様相とは大変異なるもので
あった。またもちろん山梨県下でこれに類した骨の
検出はこれまでにかつてなく、調査関係者の間でも
少なからぬ驚きの気持をもって注目されたのである。

本遺跡で検出された獣骨は下記の4種である。今そ
れらの記載に当って、獣骨の顕著な出土をみた、三
つの地点、つまり8号土壌、石組及び一般包含層、
30号住居址内のそれぞれに分けて標本の在り方、形
質の概要を記述していきたいと思う。

3. 獣類の焼骨

1. 8号土壌の獣骨 イノシシ *Sus scrofa*

8号土壌からは最も多くのイノシシの骨を出土し
ている。そして、その大部分は下顎骨であったが、本遺
跡のイノシシの特徴は年令別の構成が明瞭にみられ
る点であって、大量の当才の個体と、それよりも数の
少ない2~3才以上の個体の下顎骨であった。以下、
これらの標本を年令グルー プに分けて説明する。



第153図 イノシシ下顎骨歯槽による歯の位置と名称
これらの下顎骨は犬歯の歯槽部分が調べられないので
雌雄不明。但し、雌の可能性が大きい。
cは乳犬歯、dm 乳歯、Mは臼歯
M₂は歯槽部に幅の狭い切れ目が出来た程度である。

検出された獣類種名表

脊椎動物門	Phylum VERTEBRATE
哺乳綱	Class Mammalia
食肉目	Order Carnivora
クマ科	Family Ursidae
ツキノワグマ	<i>Selenarctos thibetanus</i>
偶蹄目	Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>
ウシ科	Family Bovidae
ニホンカモシカ	<i>Capricornis crispus</i>

A. 当才の下顎骨群

当才の下顎骨は全標本の 83%を占めるもので、その出土量は最も多かった。しかし、標本自体は破損するものが多く、骨体を良くのこす標本はごく一部であった。これは、若い個体の場合は、骨質が十分に骨化せず、骨壁も薄いために、強い火を受けるとその損傷はひどく、ひび割れ、変形し、その破損を著しくするからである。特に歯牙の部分の損傷はひどく、年令の唯一の決め手になる歯の欠損は個体毎の微妙な違いを見出すことを不可能にした。そのために、歯の萌出状況、大きさがその目安となり、それを歯槽の形態から判断した。

この顎骨群は、乳歯 dm4 までと、永久歯 M1 までが萌出し、M2 は未萌出、ただし、M2 の歯槽をおおう骨に幅 5~6 mm位までのき裂が生ずる位の段階までのものである。

標本

下顎骨の左右が連合(左右の顎骨関節は骨化接合する)する状態にある標本が最も多いが、これには、a) 連合部分のみの採本。b) 骨体がある程度のこる標本(dm4 の歯槽のあたりで折れる)。c) 左右が分離している標本。これは稀で、犬歯歯槽部近域で折れるものが多い。上記 a)に接合するものなのであろう。d)骨体と枝骨部分のをこす標本でこれは極く稀である。e)下顎骨、枝骨部分のみの破片。関節突起、筋突起などが破片となって検出されている。

以上 a) と c)、あるいは e) には同一個体のものがあるはずであるが、それらの接合関係を見る作業は充分に行われていない。標本が小さいことと、犬歯歯槽部の破損であるために、殆んど原型を失なっていると考えられるからである。

以下 a)~e)について若干の説明を追記する。

a) 左右下顎骨の連合部であるので骨質も丈夫で、よくのこるのであろう。ただし、その最先端(i1 歯槽の上縁)までのこる標本は稀で、多くの標本はその部分を欠く。その割れ口は新しい面をみせていることが多いので、埋没時にはさらに骨体がつづいたものであったと考えられる。

b) 骨体が dm4 位までのこる標本。左右がほぼ同程度にのこる例は稀で、左右いずれか一方が dm4~M2

位までのこり、片側は犬歯部位で折れている標本が多い。その場合の割れ口には、新しいのと古いのがあり、埋存時にすでに左右のいずれかが、分離していた下顎骨もあったはずである。おそらく、強い力のために割れたものなのであろう。

c) ほとんどdm4のみの部分の小片と、M1・M2の歯槽ののこる標本など、大・小様々であるが、M2の歯槽までのこる標本は少ない。恐らくこれは下顎枝の破損する際に、この部分に近接するM2 の歯槽部が破損し、原形を留めなくなっていることによるのであろう。

d) 下顎枝までのこす標本であるから、これはほぼ完存に近いものになるはずであるが、実際は左・右の揃うもの、連合部から連続してのこる標本はない。ただし、これについても修復の作業の進展によって接合資料の出来る可能性はある。

e) 下顎枝部の標本であるが、その折損部は大部分が下顎骨、筋、関節の突起部に近い部分である。これはその部分が薄い板状を呈しているために、折れ易くなっているからであらう。

これらの標本は、すべて同じ程度に火を受けており、灰白色に変色し、骨体に亀裂を生じていた。亀裂は歯槽上而から骨体の軸に直交するように生じているのが典型で、この亀裂は骨体を分断するように骨体の中央近くまでのび、かなりはっきりとしたV状のひび割れをつくる。おそらくこのひび割れが元で、下顎骨体がいくつかに分断されるのであろう。この骨体に対する縦方向のひびに対して、骨体に付して横位のひび割れもはいる。このひび割れは普通短かく切れ々に入るが、かなり長い場合もあって、骨体に長い裂け目が生じたり、それによって骨体が縦長に分断するようなことも生じている。これらのひび割れが下顎骨を小さく割るような結果になったのである。

歯槽

下顎骨には乳切歯から乳犬歯、乳臼歯、永久歯 M 1、M 2 までの歯槽が認められ、埋没する犬歯の他に、歯根を歯槽内にのこす例は少なくない。埋没時には、どの下顎骨にも歯が残っていたと思われる。このうち、犬歯については雌雄の判定に役立ち、乳臼歯、永久歯

の区別によって、年令を推測する。

臼歯のうち、dm4(第4乳臼歯)は他の乳臼歯と異なっていて、前後に各2、その中間の頰側中央に1、計5本あくので他と区別することができる。M1はそれより前の乳歯と比べて一段と大きく、歯根は4本である。

dm4の次がM1で4本の歯根、その次がM2である。M2は完存する場合は、歯槽の開口なく、幅の狭い亀裂が見えるだけである。中に未萌出の臼歯がある。しかし、この部分で破損する標本が多いが、開口しない歯槽の形を部分的にも観取することができる。

雌雄の区別

雌雄の区別は未萌出の犬歯と犬歯歯槽の大きさ、形状等を観察あるいはX線を使って調べた。犬歯自体については、永久歯で未萌出歯が歯槽内にあるのを直接観察することのできた標本もあり、歯が脱落している場合には歯槽の大きさや形状で確認できた。こうして多くの標本の雌雄が確認されている。これができなかったのは、犬歯部分が失われた標本のみである。

イノシシの場合、雌雄の永久歯の犬歯はその大きさに大差があり、未萌出のごく小さい歯があっても、その差は明瞭である。不幸中の幸いなことであったが、本標本はその殆んどが破損部をもつもので、特に犬歯付近の破損が多く、そこから犬歯の歯槽を観察できた。

雄の犬歯歯槽の幅は8.0～9.0mmが観察され、歯槽の下縁は下顎骨の骨壁すれすれのところまで広がる。従って、犬歯歯槽を直接観察できなくても、顎骨の髓腔を通してこうした形を観察することができる。また雄の下顎骨はこうした大型の犬歯歯槽をもつので、全体に体高が高くなる特徴をもつ。

雌の犬歯は4.0～5.0mmの歯槽幅で、かつこの程度の生育(M1萌出時)であると全高8.8mm位である。これは雄の20.0mmになるのと比べて半分である。従って、犬歯歯槽と下顎骨との間には歯髓腔が大きく開く、これもよく観察できる部分である。このように犬歯の小さいことから、下骨骨体は雄に比べて細目である。

集計

かなり破損の激しかった下顎骨標本から、その個数を算えるために、それらを下顎骨の部位別にすべて表中に示した。標本は左右の下顎骨が連合部で合わさ

った状態にあるものが多かったので、それを中心に調べ、さらに左右分隣し、かつ近心端(吻端)をのこすものをそれに加えた。

♂獣下顎骨集計

dm4M1<M2>*までの歯牙萌出で近心端をもつ

標本：39+5**

左右分離している標本でいずれか多い側 10(右)

計 54

♀獣下顎骨集計

dm4M1<M2>での歯牙萌出で

近心端をもつ標本：49

左右分離している標本で、いずれか多い側 :12

計 61

雄獣 54、雌獣 61、計 115 個体である。

B. 1才以上の下顎骨

既述した当才もしくは1才までの下顎骨を除くと、他は2～3才以上のものになる。歯冠部が欠損しているので詳細は不明であるが、どの顎骨もM3まで完全萌出していることは歯槽形成の状況からみても明らかである。M3の完全に萌出するのが3才以上とされているから、これらの標本はそれ以上の個体とみることが可能であろう。

大型の下顎骨がよくのこされ、下顎枝の破損を除けば、ほぼ全体がのこるという標本もあり、また左右の顎骨が、それぞれM2あるいはM3の位置までのこる標本もある。現在は下顎枝が破損するが、これらはおそらく完存する形で埋存していたのであろう。このような状況は先にのべた当才イノシシの場合と同様ではなかったかと思う。ただ、大型の標本の方が逆に破損し易い状態となっていたことも考えられる。

雄獣

雄獣の下顎骨の方が修復される標本が多かったようである。骨が大きいのでやり易いこともあったと思う。しかし、下顎連合部などで接合できずに残されている標本がいくつもあり、それらが犬歯の歯槽部から折れているところを見ると、その部分の弱かったことがわかる。おそらく犬歯歯槽内に歯は当初から無かったのであろう。

*:<>は未萌出
**:<>はやや成育の良い恒体(萌出時は同じ)

成獣個体下顎骨においても歯牙は歯根を除いて全く形を留めてはいなかった。しかし、歯根の残欠は歯槽内に認めたので、おそらく歯は当初すべてあったことは確かである。切歯及び臼歯についてはそうした状況であるが、犬歯は歯槽内に残欠する部分が全くないことからみて、当初から無かったものと思われる。つまり、犬歯は抜きとられていたのである。このことは大変興味深いことであって、犬歯が道具の素材として価値高いものであることを承知していた故に、それを早くに抜きとることをしているわけである。なお、下顎骨体も骨髓食のために打ち割るということを貝塚の資料にみるが、本遺跡の場合には標本の破損が人為的か自然を確かめることが難しく、骨髓食のための骨体の破損は明らかにし得なかった。

雌獣

雄の下顎骨とほぼ同じ保存の状況と云える。下顎骨の連合部を残して、P4～M1あたりで折れている標本が多いが、別にある骨体部の標本と接合修復できた例は何故か殆んど無かった。骨がややきしゃしゃであるために、骨の破損率が高かったのではないかと考えている。

歯牙は歯根をのこしてすべて失われているが、犬歯は歯槽部が破損していない限り歯槽内にその残欠がみられた。つまり雌の犬歯は雄とは違って抜かれることが無かったとみてよいであろう。

集計

永久歯を萌出した標本も、左右の下顎骨の骨化した近心端をのこすものと、その部分がこわれた骨体部のみをのこすものの二つに大別できる。これらの標本が若し焼けることがなければ、標本の接合や大きさ、歯牙咬耗などによって、詳しく個体関係をみることも出来たのであるが、金生遺跡の場合には、それがほとんど出来ない状態、あるいは危険を伴うと考えたので、左右の連合状態にある標本のみに限って数を算えることにした。

♂	の下顎骨連合部をのこす標本	14
♀	〃	9
	計	23

結局、この土壌内にあった下顎骨の個数、つまり左

右を揃えるものとして本来埋存していたと考えられる数は、当才のもの 115、

3才以上の個体 23、総計 138 個体である。

2. 各グリッド、住居(30号を除く)、配石遺構出土の焼獣骨

a) 各グリッド出土

すべて破片となっているもので、鹿角を除いてその部位を確認できた骨は少なかった。

イノシシ

当才位の下顎骨連合部 1,D-12-1

これは既述したピット内出土の若獣下顎骨と同じ程度の成育のものである。上述した土壌内のイノシシの下顎骨特に当才個体の多いことは特筆されたが、なお一部はピット以外にもあったことを本資料は示している。

成獣雄の下顎骨 1,D-10

下顎骨の連合部と一部骨体、関節突起、下顎角部があり、もともと一個の下顎骨があった可能性もある。以上の他に断片的であるが肢骨の一部が出土しており、骨の焼かれることが上述した土壌以外の場所でもあったことを推測させるのである。

ツキノワグマ

Selenarctos thibetonus

左大腿骨遠位端部

唯一つのクマの骨である。おそらく成獣の個体であろう。

カモシカ

Copricornis crispus

左尺骨片 D-10-2

近位部分の小片である。断片的であるので、他の部位で確認できればと思い、極力その検出に当たったが、他にカモシカの骨を得ていない。

ニホンジカ

Cervus nippon

角片は多く検出している。これは他の骨と区別し易いからである。全体としてシカの骨がどの程度含まれていたかを推測するのはかなり難しいことだと思われる。

b) 配石・石組内の焼骨

断片的なイノシシ、シカの多いなかで、2号石組のシカの中足骨は遠位部の破片であるが骨としての残りは最も良い。

c) 住居内での焼骨 (30号以外)

焼骨の出土は散在的である。しかし、17号住居でツキノワグマを得ている。

3. 30号住居址内の獣骨

一つの住居址内から大量の出土量をみたが、それらの大部分は鹿角であった。この鹿角片の修復に当たったが破損が著しく、思うように進めることができなかった。特に角幹部の破損が著しく、修復が困難であった。第一尖から角幹にのびる形を復原したが、大部分は片面のみのものである。これに接合できなかったが、鹿角分岐部の破片2個と角坐部分があるが、これが同一角であろうと思われる。この角の第一尖の基部現存径32.24×21.67mm、焼けて縮小していることを考えると、かなり大きな角である。角坐の下に角坐骨があるので、これは捕獲した個体のものである。

鹿角は他に、枝の部分の破片が5~6点あり、おそらく上述の角とは別の角があったと考えている。それも枝角の太さからかなり大きい角であったと思われる。なお、ここからは、鹿角以外にシカの距骨片一点が出土している。

4. ヒトの焼骨

ヒトの焼けた骨が1号配石の石棺状石組中より一括して出土している。しかし、その量はごく極られたもので、一部があるにすぎない。また、この場所で焼かれたわけではない。こうした骨の選別、搬入はどのように行われたのであろうか。

検出部位

頭骨

前頭骨、左右の頭頂骨の三つの大片があったが、接合できる。別図版に示したように冠状縫合と矢状縫合の接する部分で、前頭骨は右半分の一部がのこり、左右の頭頂骨は、頭頂に近い部分をのこすのみである。前頭、頭頂の各骨は強い火を受けてひび割れ、亀裂が

はいり、たわむ。別の場所で焼かれたはずであるから、この三つの骨は意識的に持って来たものであろう。

四肢骨

橈骨

左右が確認されたが、いずれも骨体部分をのこすのみのものであり、かつ、その亀裂、破損は著しかった。骨片は大部分接合したが、なお接合できない骨片がのこった。ただし、それらの破片も同一の個体の骨片とみてよいであろう。

寛骨片・坐骨

寛骨臼の一部と坐骨をほぼのこす。これにも破片が若干あるが、これに近い部位のものである。

大腿骨片

骨体の後面部分のみである。多少変形するが、橈骨程ではない。筋肉粗面と大腿骨稜がよく発達する。縄文人の形質をもつ骨である。

一括して採集された人骨はほぼ以上のものであって、他に骨片と称するものは殆んど無い。

5. 収束

以上金生遺跡の幾つかの遺構、地点で出土した焼骨について、それぞれの遺構・地点毎に説明してきた。それらは各節内において、動物種の内容、量差等について詳しくのべておいた。それらを今要約すると以下のようなになる。

1. 8号土壌中の焼獣骨

最も多量に出土したもので、その在り方もまた特徴的であった。

① イノシシの下顎骨の総数は断片は別にして176個に達した。それらを個体数とすると138個体となる。そのうち115個は永久歯M1の萌出する段階のもので、当才、その死亡推定季節は秋である。これには雄・雌ともに含まれた。

その他の下顎骨はM3が萌出した段階のみのものであって3才以上、これにも雄・雌の両性のものが含まれた。

これらの下顎骨に穿孔その他の特別の加工はみられず、おそらくすべて完全な形で当初はあったのではないかと思われる。ただし、既にのべたが、成獣雄の犬

歯のみは全て抜去されていたと思われる。雌の犬歯はそのままである。

②特定の骨を選んで一定場所で焼くか、或いは焼かれた骨を埋納する例は、縄文あるいはそれ以降を通じて知られていない。本例は真に特殊な例である。しかし、こうした例は今後必ずや他にも検出されることと思われ、その際には、今回不確実であった埋納の状況のより完全な把握に務めなければならないであろう。

③焼骨の意義

動物の捕獲を祈念して、その一部を保存、保持する習俗は、古今、世界に共通する。イノシシの場合、その大型の犬歯、下顎骨はそれをするのに最も容易である。しかし、普通そうした骨や歯は大切に扱われ、傷つけることをいみきらう。それは、その動物を傷つき痛めることにつながるからである。まして、火中に入れたり、落したりすることは避けられるべきことであったと思う。

それが、火中で焼かれるということは、動物に対する信仰と火に対する信仰とが相い合体し、さらに次元を高めた縄文人の世界観なり宇宙観を、火と積石という祭壇によって演出しようとした意図があったからなのであろう。従って、今日知られる狩猟民社会のそれとはかなり異なる様相があったのではなかろうか。これが日本列島の特殊な自然環境の中で育ったものなのであろう。

火が縄文人の中でどのような意義をもつものであったか知り難いが、これを若し自然の中でみるとすると火は一切を焼きつくすと同時に、そこから新たな木々の芽生える新生の大地の始まりをもたらすものでもある。そして、イノシシは、シカよりも多くの仔を育む、豊かさの象徴ではなかったかと思う。特に当才獣はその数も多く、捕獲する機会も多かったに違いない。そして稀に捕れる大型成獣も含めて、その豊かなことを願うとき、火とイノシシは容易に結びつき、祈りの場で欠かせないものとなったのであろう。

石組・住居内の焼獣骨

①石組・住居内の焼獣骨は上述の土壌のものとは異なり、イノシシとシカの四肢骨と頭骨を主とするもので

あった。そして、下顎骨は若獣(当才)と成獣が各1点あったに留まった。

若し、この石組・住居内の焼獣骨が上述のピットのものと同時期とすれば、下顎骨の大部分はそのピット内で処理され、他の部位が別の場所で処理されたことになる。その別の場所がここであったのかも知れない。

②ここでは、イノシシとシカの全身骨が対象となっていて、先に述べた歯牙の場合とはまた意味合いが変ることが予想される。つまり、ここではイノシシ、シカその他の獣も含めた獣全体に対する呪術的な焼骨の行為があったことになる。この場合の焼骨は金生遺跡に限らず縄文遺跡において広くみられるもので、特に中部地方以東に知られることは各地の報告にみる通りである。おそらくこの場合にも、基本的には先に述べた獣を育む森林と、それを育てる大地の新生を司る火の役割が呪術的な行為の元で一体化していった過程を、この焼骨は示すのではないかと思われる。前者イノシシの下顎骨を扱うのが主の場であるとすれば、その他の場合は副の場であることになろう。

③クマとカモシカについて

クマとカモシカの焼骨が僅かであるが出土した。このことはこの地域の狩猟の対象にクマとカモシカの確かな例を加え得たことで意義があったと思っている。焼骨中からクマやカモシカを検出できる例は決して多くない。特に平地部の例では殆んどみることができない。しかし、八ヶ岳の山々をのぞむこの地域であれば、クマやカモシカが捕獲されることはあったはずである。ただ、それにしてもあまりに僅かな断片的な破片である。この点については、特にクマにみる骨の扱い方が注意される。それはクマの四肢骨が指趾骨に至るまで種々の加工が行われ、交易の品として平野帯に運ばれているのである。平野部の遺跡で知られるクマの犬歯穿孔品や骨の加工品との関係でみなければならないであろう。

④焼人骨の検出

焼けた骨の中で注目されるのは人骨の焼けた部位があったことである。その数は極めて少ないのであるが、頭蓋、骨盤、下肢と骨の揃っているところをみると同一個体の可能性があると考えられるのである。ただ

一個体にしては余りに骨が少ない。骨の焼かれた場所が別にあるので、そこから骨の一部が選ばれここに埋められたのであろう。人は頭蓋と四肢が一つの組合せとなって埋納されている点、イノシシその他の獣骨とは異なる。人の場合は、あくまで一個の人間が考えられていたと思われる。しかし、究極的には豊かな自然の中の生物として動物たちと同じ役割を荷負うものであったのであろう。

参考文献（紙幅の都合で 1980 年以後のものに限った）

宮崎重雄：群馬県桐生市千網谷戸遺跡星野昭司宅内 1 号住居跡の獣骨『千網谷戸遺跡調査報告 1973』1980

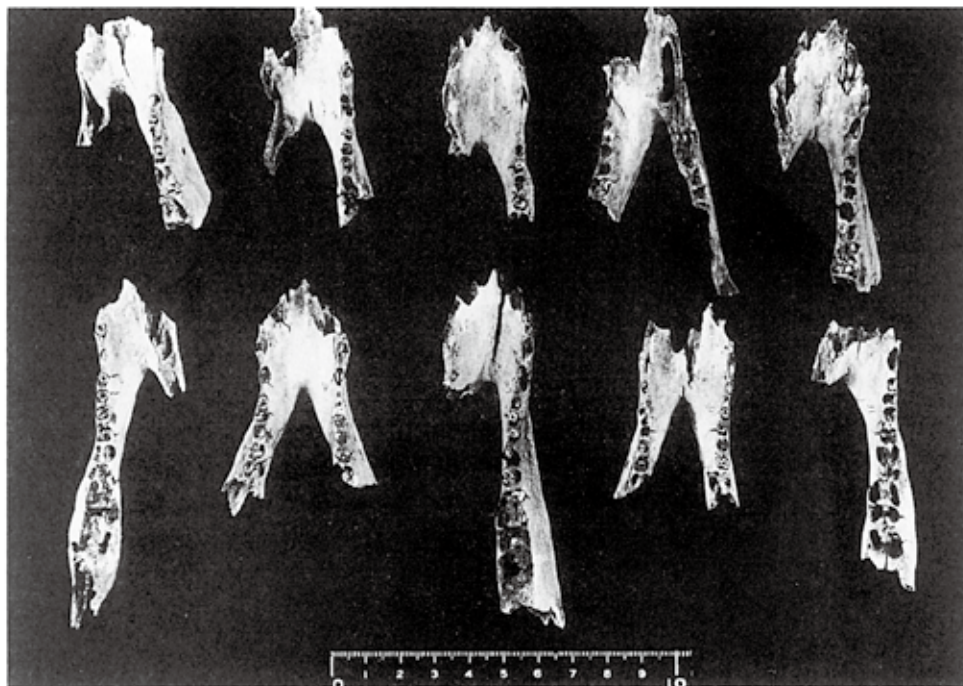
金子浩昌：第三次調査出土の獣骨について、田部井功編『後谷遺跡』桶川市文化財調査報告嘗第 14 集、1982

金子浩昌：動物遺存体『なすな原遺跡第 1 地区』1984

新津 健：縄文時代後晩期における焼けた獣骨について『日本史の黎明』六興出版、1985

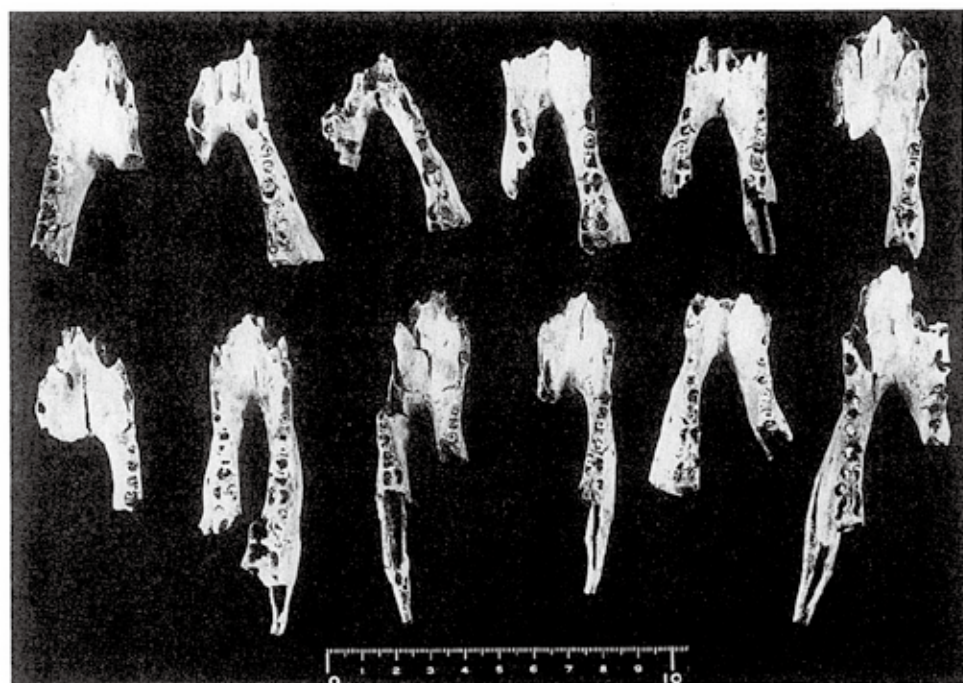
金子浩昌：正網遺跡出土の獣骨と骨の加工品、鈴木加津子・鈴木正博・荒井幹夫『正網遺跡一荒川右岸における縄文式後晩期遺跡の研究一、所収、富士見市造跡調査会研究紀要、No.5、1989

この標本については、イノシシ飼養の資料として述べられていることがある。しかし、当才児を主体としているなど、年齢の個体が片寄り、飼養の説明にはそ



①上

雄 イノシシ下顎骨 咬合面
(dm₄・M₁萌出段階)



①下

雌 イノシシ下顎骨 咬合面
(dm₄・M₁萌出段階)

ぐわなことが気になる。飼養といった問題を論ずるには、各地イノシシ骨の出土例についてのていねいな観察、考察が必要と考える。

長野県上高井郡高山村 湯倉洞穴 クマ・カモシカ・サル

クマ・カモシカ・サルが洞穴にまとめられています。カモシカの中手、中足骨は折られていません。しかし、クマの大腿骨は割っています。骨はこの場所にまとめておいたのでしょうか。狭い洞内ですが、そうした場所があり、頭は別であったのでしょうか。

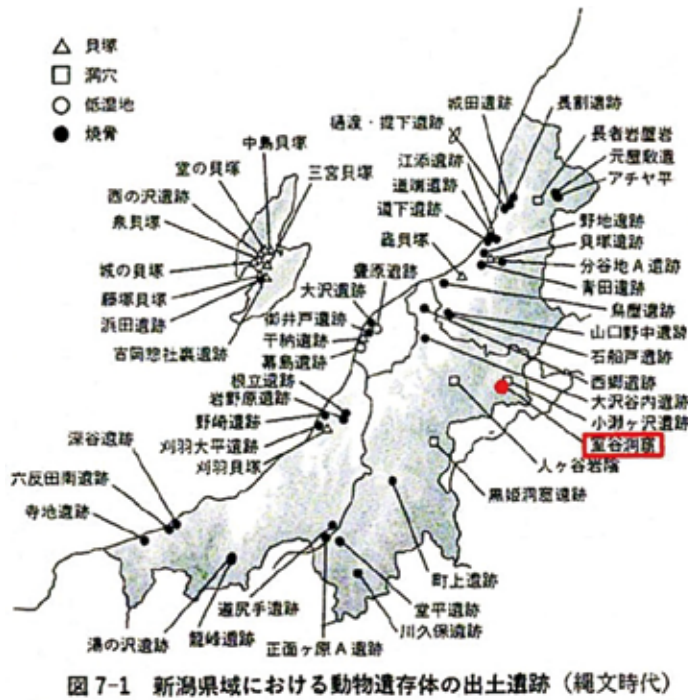
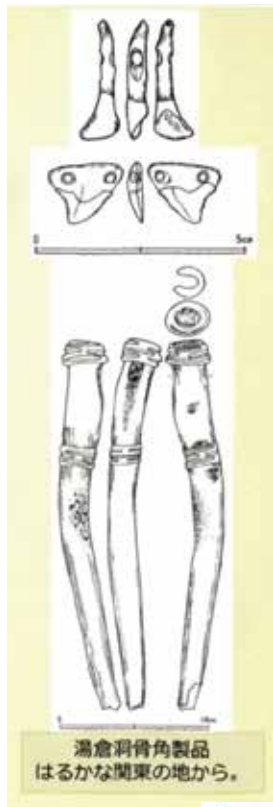
洞穴の壁ぎわです。骨を置いたところは、踏みつけたりはしないのでしょうか。その扱い方がわかります。

中手、中足骨では指骨部分が写っていません。外れたのかも知れません。筋を利用するためか。

貝塚の獣骨の知識—人と動物のかかわり—考古学シリーズ 口絵写真より 金子浩昌著



ツキノワグマ・カモシカ・ニホンザルの顎骨や四肢骨出土状況(長野県上高井戸郡高山村湯倉洞穴) 縄文後期の包含層出土の獣骨群です。①中央にクマの肩甲骨、②ツキノワグマの大腿骨③ツキノワグマの上腕骨④カモシカ中手骨⑤カモシカ中足骨⑥ニホンザル下顎骨が見えます。

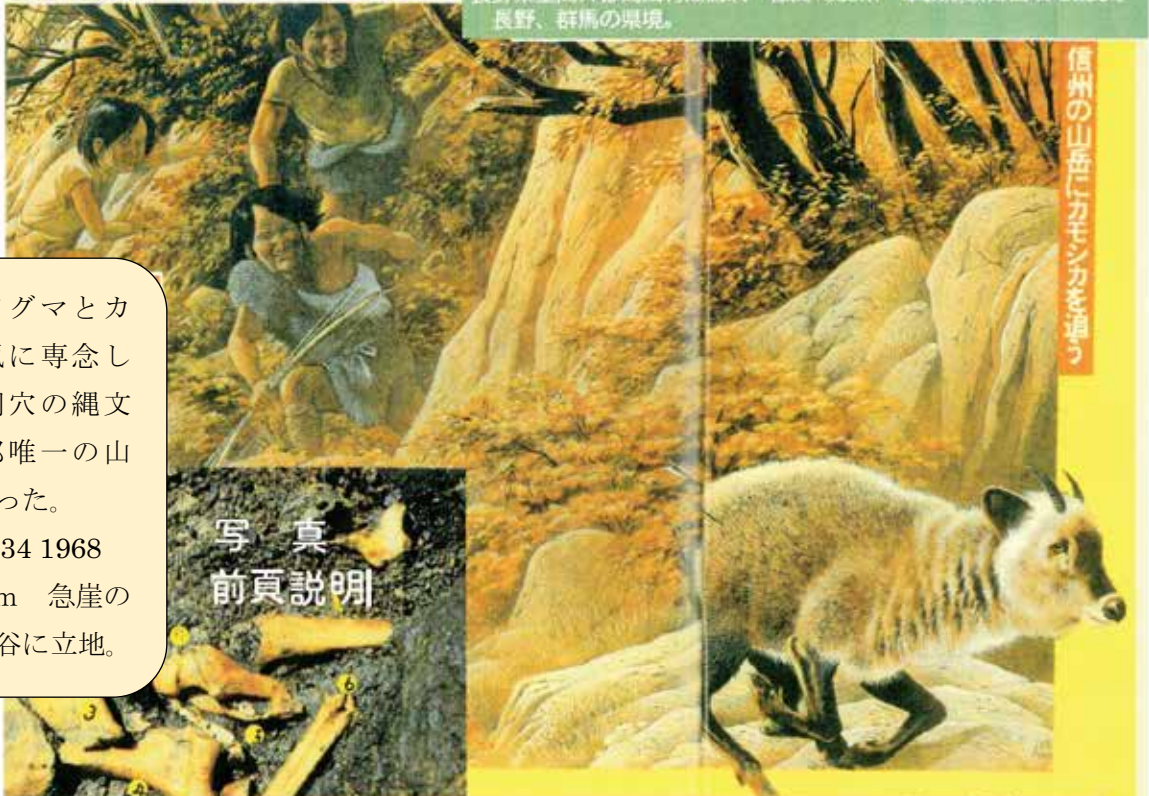


室谷洞窟はカモシカとツキノワグマを主とする唯一の洞穴遺跡ですが、動物遺体については未刊です。

私がずっと昔、書いたものです。こんな表示は恥ずかしいのですが、手元に遺物がなく、また誰も調べる人もなく今日に至っています。

湯倉洞/室谷洞

新潟県東蒲郡上川村室谷洞穴 標高250m 早期期～早期
カモシカ(早期23個体)ツキノワグマ(同25個体)主体。
長野県上高井郡高山村湯倉洞 標高1500m 草創期以降古墳に及ぶ、
長野、群馬の県境。



ツキノワグマとカモシカ猟に専念した室谷洞穴の縄文人は本邦唯一の山岳猟人だった。
上代文化 34 1968
標高 250m 急崖の続く深い谷に立地。

クマ、カモシカ、サルの骨が重なるように出土するなんて、洞穴の遺跡でも珍しいし、貝塚では絶対にみられません。

私は夢中でカメラのシャッターを押しました。

湯倉遺跡の現場に行く途中で、カモシカに出会うことがあったのです。さすがと思いました。道の真中にぼつんと立っているのです。

室谷洞窟の動物遺存体 昭和 39 年 1964 年 「室谷洞窟の動物遺存体 上代文化 第 31 輯 641209」

昭和 36 年(1961)新潟県 長岡市に在住されていた中村孝三郎氏から室谷洞窟調査への参加要請を受け、その年の夏現地に入り洞穴内から出土する動物遺骸の状況を観察する機会をもった。

このとき新潟大学の小片保先生と知り合い帰途新潟に立ち寄った。そして先生のお宅に一泊した。私が発掘した人骨を先生が調査されるようになったのもこのときの縁からである。

昭和 37 年(1962)1月に長岡を訪れた。断片的なデータのとれる骨を区別し、種別部位別するので調査期間は終わり、後は東京で詳細調査をする事となった。

室谷洞窟の動物遺体の調査は、私にとって本格的な洞穴遺跡動物についての最初の経験であった。そして、またこれだけまとまった遺物の調査が積極的に行われたのも最初ではなかったかと思われる。調査の結果、この洞穴の主体となった獣がカモシカとツキノワグマであることがわかった。この動物については、これまでに洞穴遺跡では知られていたものの、普通はあくまでもニホンジカもしくはイノシシが主体で、これにカモシカ、ツキノワグマの遺骸が混在するというものであった。しかし、ここでは完全にこの二種が大型獣類の主体となっていることが、特に洞穴の下層においてみられたのである。当然このことは室谷洞窟をとり囲む地形的な環境と深く関わることであって、標高こそ 250m であるが、急崖をなす山容と深い谷は、カモシカやクマの生息にもっとも適した環境であったのであろう。

室谷洞窟の動物遺体調査と前後して、日本考古学協会の洞穴遺跡特別調査委員会による洞穴の調査資料及びその他各地に行われた洞穴遺跡において出土した動物遺体を広くみる機会をもった。しかし、この室谷洞窟と同じ動物相をもつ例を他にみることはできなかった。室谷洞窟をとりまく環境はかなり特殊

動物種名	地 積 各 層									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
《軟体動物 Mollusca》										
腹足類 Gastropoda										
1. アワビ		*								
Haliotis sp.		*	*							
2. カワニナ										
Semislutospira bensosii(Philippi)										
斧足類 Pelecypoda										
1. ヤマトシジミ		**	**							
Corbicula japonica Prime				*						
2. スマガイ				*						
Anadonta laute v. Martens				*						
3. イシガイ				*						
Unio douglasiae nipponensis v. Martens				*						
陸産貝類										
1. ナミギセル		*	*	*	*					
Stereophaedusa japonica(Crosse)				*						
2. マイマイ類				*						
Euhadra sp.										
《節足動物 Arthropoda》										
甲殻類 Crustacea										
モクズガニ?				*						
Eriocheir japonicus de Haan										
《脊椎動物 Vertebrata》										
両棲類 Amphibia										
ヒキガエル			*		*	*				
Bufo sp.										
鳥 類 Aves										
キジ			**	***		*		*		
Phasianus sp.										
カモ					**					
Anas sp.										
哺乳類 Mammalia										
1. ニホンジカ			**	*	*					
Cervus nippon nippon Temnick										
2. カモシカ	***	***	***	***	***	*	*	*	*	*
Capricornis crispus crispus Temnick				*	*					
3. イノシシ				*	*					
Sus scrofa leucomystax Temnick										
4. アナグマ				***	***	**	*			
Meles meles anaxuma Temnick										
5. テン				**	***	*				
Martes melampus melampus Wagner										
6. イタチ	*			*	*					
Mustela sibirica itatsi Temnick										
7. ツキノワグマ	****	**	*****	*****	*****	*				
Ursus thibetanus japonicus Schlegel				*						
8. キツネ				*						
Vulpes vulpes japonica Gray										
9. タヌキ				**	***	*				
Nyctereutes procyonoides viverrinus Temnick										
10. ノウサギ		*	*****	*****	*****	*			*	*
Lepus brachyurus brachyurus Temnick				**	***					
11. ニッコウムササビ				**	***					
Petaurista leucogenys nikkonis Thomas				*	*	*				
12. ニホンザル		*	*	*						
Macaca fuscata fuscata Blyth										

注 記 * : 断片的なものでも出土例があればこの記号を付けた
 ** : 哺乳類の場合、顎骨の出土例があればこの記号を付けた
 *** : 頸骨・四肢骨等比較的多し、鳥骨等は上腕骨等による。
 **** : いずれも出土例極めて多い場合に付ける
 以上のような目安で出土量を表示したが、もちろん記号は便宜的なものにすぎない。

図12 室谷洞窟出土動物遺存体

なものであったのである。そして、これこそ山岳狩猟者たちの生活環境ではないかと考えたのである。ところでこの山岳狩猟者たちの生活文化の特殊性を指摘することは可能であるが、これと同じ性格の遺跡が現在までに知られていないとなると、動物相に対する考えを今少し幅を広げ、カモシカ、クマとシカ、イノシシなどの混在の仕方に注意して、幾つかのタイプ分けができるのではないかと考えている。例えば昭和46年(1972)以降発掘調査が行われてきた長野県高山村湯倉洞窟にみる高地性洞穴、室谷洞窟の峡谷山地性、高原性立地などに分けるのである。これについては、別の機会に詳しく述べたいと思う。

南海のジュゴンと蝶形骨器

新石器時代に入り、沖縄では、蝶形骨器がジュゴンと共にこつ然と現れる。沖縄の島とイノー(礁湖)の贈り物である。沖縄の縄文人は、蝶の美しさを歌い、その思いを刻みました。ていねいに蝶の形を写したのです。縄文文化の中で、蝶の姿を写した製品は他にありません。

その考古学的研究は島袋春美氏によって復元され、体系付けられました。私は文様の中に昆虫としての羽の文様が生かされていることを少し付け加えました。

縄文人は丈夫なジュゴンの骨を素材として蝶の形をつくりました。胴と前羽、後羽を組み合わせ、それに文様を刻みました。羽には孔をあけて紐を通しつなげたのです。ただ現在では長い年月の間に破損しました

が、それをていねいに復元して、往時の姿に戻したのです。中にはあることが予想されても、見つけることの出来ない部品もあります。それは予想してみると云うことも大切です。縄文人は、全体を考えてつくっていた筈です。自然の蝶を見てつくっていた筈ですから、不自然な蝶をつくる筈がありません。

私たちは考古学的な研究を生かして幾千年か前の姿を復元したいと考えています。

蝶形骨器を素材であるジュゴンの肩甲骨に割り付けた推定図、肩甲骨の形状と製作されている骨器の形状と一致する部分から推定しています。当然、どの製品についてもこのような素材の推定図をつくる事が出来るのです。

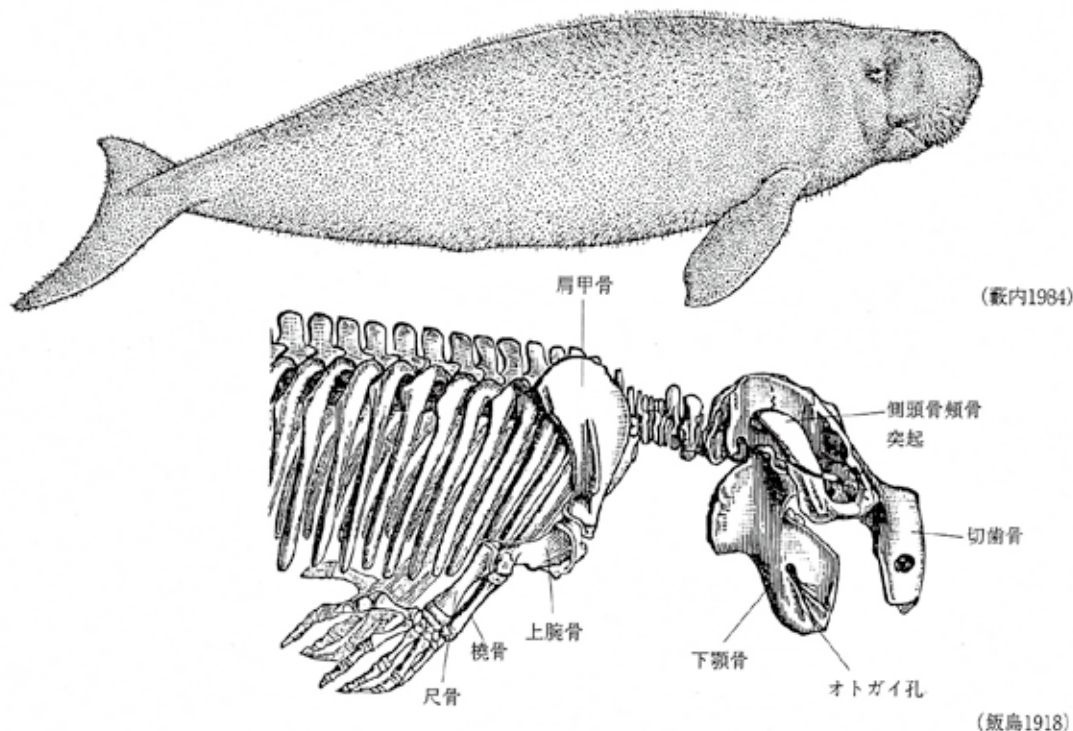


図9 ジュゴン生態図および骨格図(骨格図は一部のみ) ジュゴン体長:2.5~3.2m

ジュゴンは沖縄の人々にとってチョウと同じニライカナイ(楽土)の使者として尊ばれていたが、食物として珍重される風が強まり乱獲されるようになった。今改めてジュゴンのことを考えるとき、今日、沖縄近海に生息するジュゴンは「たった三頭」という現状がある。沖縄の海がジュゴンの生息を脅かすことのない豊かな自然の海に戻ることを心から願うものである。



1. ジュゴン右肩甲骨骨利用例 吹出原遺跡出土品より(金子1999)

中央上: 幼体の後羽で、推定した形。
図 11 参照

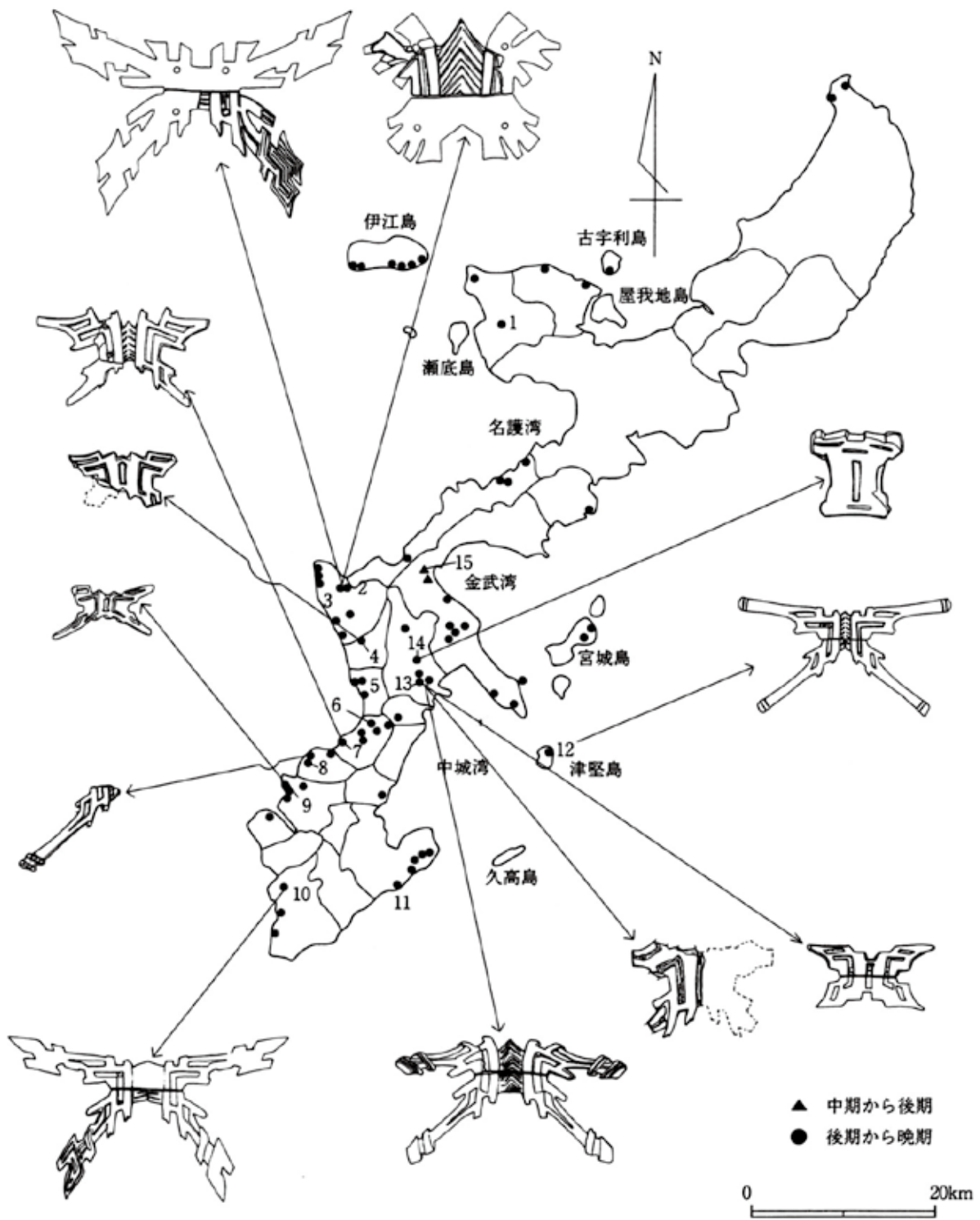


2. ジュゴン右下顎骨利用例 真志喜安座間原第1遺跡出土品より(金子2000)

このオトガイ孔にひもを横に通して、垂げたと考える。

	中期 古我地原式期	後期 萩堂式期	後期 萩堂式期から室川式期	晩期 室川式期から宇佐浜式期
複合式		<p>2</p>	<p>4</p>	<p>5</p>
単一式	<p>1</p>	<p>7</p>	<p>11</p>	<p>6</p>
		<p>8</p>	<p>10</p>	
		<p>9</p>		

図 11 蝶形骨製品の変遷



- | | | |
|-------------|----------------|------------|
| 1. 屋比久原遺跡 | 6. 喜友名山川第5遺跡 | 11. 百名第2貝塚 |
| 2. 長浜貝塚 | 7. 真志喜安座間原第1遺跡 | 12. キガ浜貝塚 |
| 3. 吹出原遺跡 | 8. 城間古墓群 | 13. 室川貝塚 |
| 4. 嘉手納貝塚 | 9. 崎樋川貝塚 | 14. 八重島貝塚 |
| 5. クマヤー洞穴遺跡 | 10. 兼城貝塚 | 15. 古我地原貝塚 |

図3 沖縄縄文時代の蝶形製品出土遺跡分布図

岩手県一関市花泉町貝鳥貝塚にみる骨角器文化(縄文後期中葉から晩期)

縄文人と動物たちとの関わりを骨角器にみます。

—岩手県最北の淡水貝塚、しかし山を越え海にも活躍の場をひろげた縄文人です。—1969年調査の成果より

1956年千葉県館山市郊外の鉾切洞穴の調査と報告を終えた私は、機会あってこの内陸奥深くにある貝塚の調査となった。しかし、北上川流域周辺の遺跡には関心を持ち踏査をしていました。

一関市 貝鳥貝塚の骨角器類



左より

- ・オオカミの彫刻付角棒全長 43.5 cm(晩)
- ・カエル彫刻高さ 4 cm鹿角製(後末)
- ・アオザメ歯
- ・ツキノワグマ下顎左犬歯
- ・オオカミ下顎左犬歯
- ・オオカミ左下顎骨(後の頁に垂下法の推定図)

推定図

- ・オオカミ左脛骨遠位端(穿孔に注目)

下段・左より

- ・銚頭(燕形)
- ・以下刺突具各種

いずれも晩期

「古代史発掘」の図版です。



図2 仙台平野における主要貝塚の分布図

- | | | |
|-------------|------------|-------------|
| 1.塩釜市大木田貝塚 | 7.不動堂町栗山貝塚 | 13.石越町神明下貝塚 |
| 2. 〃 宮戸島貝塚 | 8.涌谷町長根貝塚 | 14. 〃 富崎貝塚 |
| 3.石巻市沼津貝塚 | 9.南方町青島貝塚 | 15.花泉町白浜貝塚 |
| 4. 〃 南境貝塚 | 10.中田町浅部貝塚 | 16. 〃 貝島貝塚 |
| 5.矢本町平田原貝塚 | 11.栗館町嘉倉貝塚 | |
| 6.大松沢村大松沢貝塚 | 12.迫町糠塚貝塚 | |

一関市
貝島貝塚



図1 貝島貝塚付近の地図（五万分の一地形図による）

- | | | | | |
|----------|--------|--------|--------|---------|
| ● 1 貝島貝塚 | 2 白浜貝塚 | 3 富崎貝塚 | 4 巻味貝塚 | 5 逸木崎貝塚 |
| 6 糠塚貝塚 | 7 地船貝塚 | 8 八森貝塚 | 9 青島貝塚 | 10 平貝塚 |

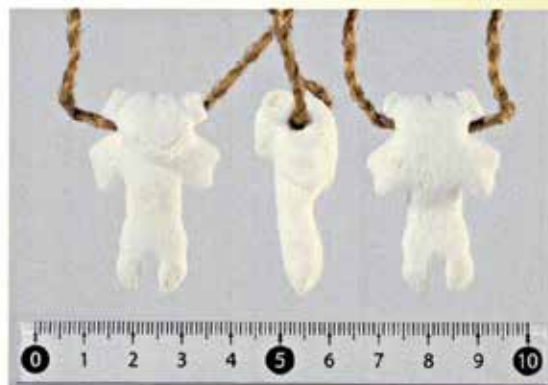


カエルを表現した彫像：40.2mm - 鹿角製・縄文時代晩期 - 貝島貝塚

カエル像は、貝島貝塚を囲む自然の表徴とも云える作品です。カエルの表現をしています但し人物像の表現です。つまりカエルも同じ仲間です。一つの自然の下で。

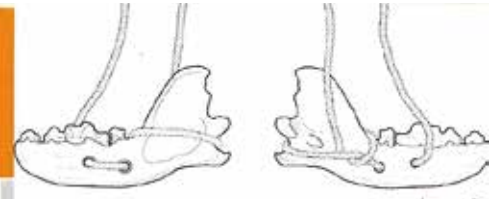
ですから誰の首にも下げられるように孔があいています。キョトンとした顔つきで「同じ仲間さ」と云いたげです。

数ある動物像の中で、唯一のもの、垂飾の加工のある点は、利用、使い方を示します。とても重要です。



岩手県一関市花泉・貝鳥貝塚

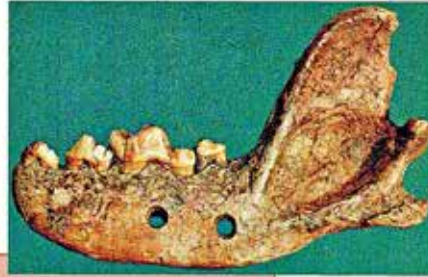
縄文人の湖沼、山、そして海に広がる漁・猟の活動
 —その多彩な文化をみま—



- 1.アオザメ 南日本産、鋭い歯が特徴
- 2.3オオカミ犬歯
- 2はツキノワグマ。歯根部を丸く削る。

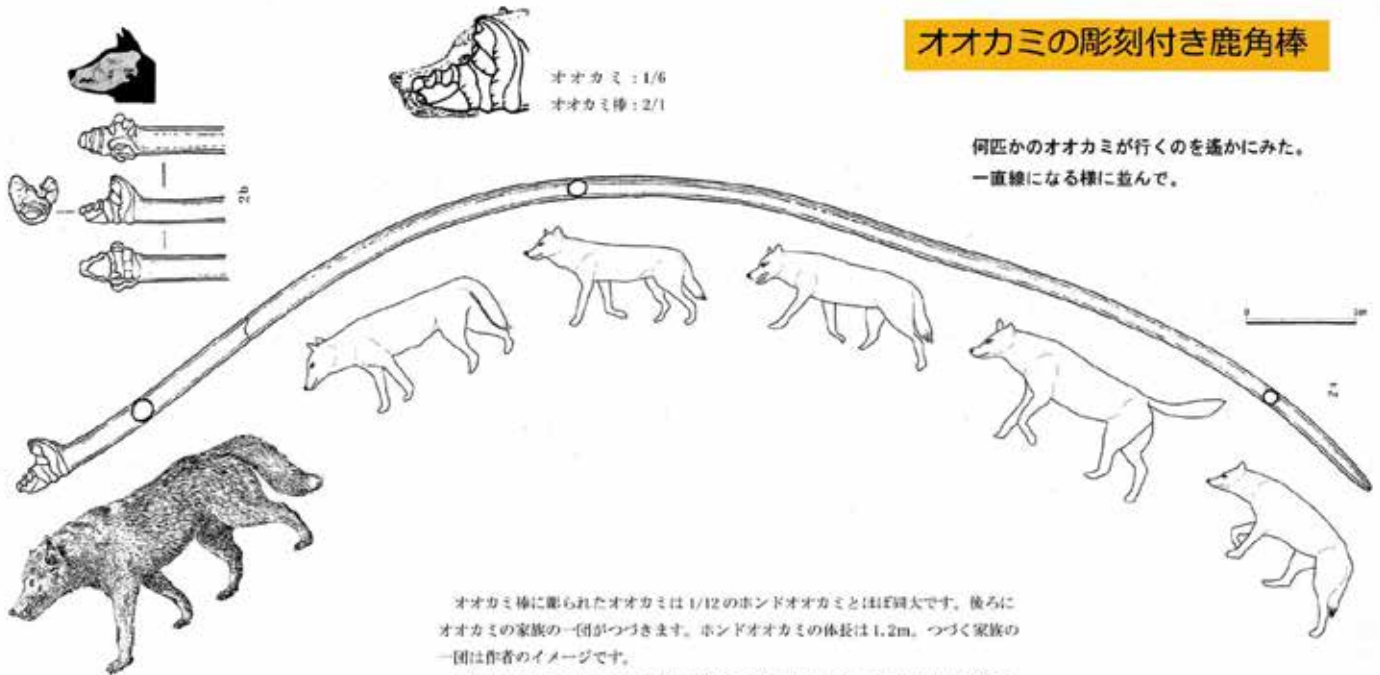
犬歯の元を削っているのは、バランスよく下げられることを考えているのです。孔を安全に穿孔出来ることを考えています。

この下顎骨をみた縄文人は、遙かに見たオオカミを思い浮かべました。押し頂き、胸に下げ、山が豊かでありますよう祈りました。大きく立派な元の部分を残し、先の部分は犬歯を外すために切り取り、中心に孔を開け紐を通して吊します。紐の片側を下顎枝に巻けば綺麗に吊すことができます。



この骨は縦に二孔が並んでいます。筒型だから横に開けた方が簡単なのに。縄文人はこの骨がオオカミの脛骨であること、それなら縦にしないでとは云うことを知っていたのです。おそらく下の孔から通して、上の孔から裏に入れて結べば縦位置にしっかり止まります。縄文人は大したものです。

オオカミの彫刻付き鹿角棒



何匹かのオオカミが行くのを遙かにみた。一直線になる様に並んで。

オオカミ棒に彫られたオオカミは1/12のホンデオオカミとはほぼ同大です。後ろにオオカミの家族の一団がつづきます。ホンデオオカミの体長は1.2m。つづく家族の一団は作者のイメージです。

左端のオオカミ図は今泉吉典先生の著書から引用しました。口元や耳の大きさから、縄文人が鹿角に彫刻したオオカミのサイズが思い浮かびます。

(今泉吉典『日本哺乳動物図説』昭和25年)

体長60cmになる大鯛(マダイ)の前頭骨の穿孔垂飾品

湾最奥淡水域でマダイの垂飾品の出土した唯一の例。丁寧に加工しています。どのようにして手に入れたのでしょうか。貝島貝塚縄文人の広くて鋭い観察力に驚くのです。

マダイ前頭骨穿孔品

村からは、はるかに遠い海でみたマダイの美しく力強い姿を何とか見せたいと思いました。仙台湾側の村人には考え及ばないことでした。

マダイ頭部

前頭骨

マダイ頭部骨格図(写真)

骨角・牙飾

燕形鈎・刺突具

釣針

有尾形刺突具

狩猟具と一緒に、漁労に使った骨角器がたくさん出土しました。

縄文時代 魚、猟の拠点 三陸・仙台湾岸域そして仙台平野が広がります。

縄文中～後期、宮城県広田湾でのマグロ漁(陸前高田市大洋台貝塚)
この調査は三陸沖地震の災害で亡くなられた私の友人と共同の仕事でした。おそらく本邦初の詳細調査です。ご冥福をお祈りします。

広田湾

マグロの外観(上)、骨格(中)、と背骨(下)

○漁師として捕らされたものの一部を、武器を打して造した。骨角の垂飾品。

○また魚骨の骨髄、魚骨を製成した見込みの部分を示した。骨角の垂飾品。

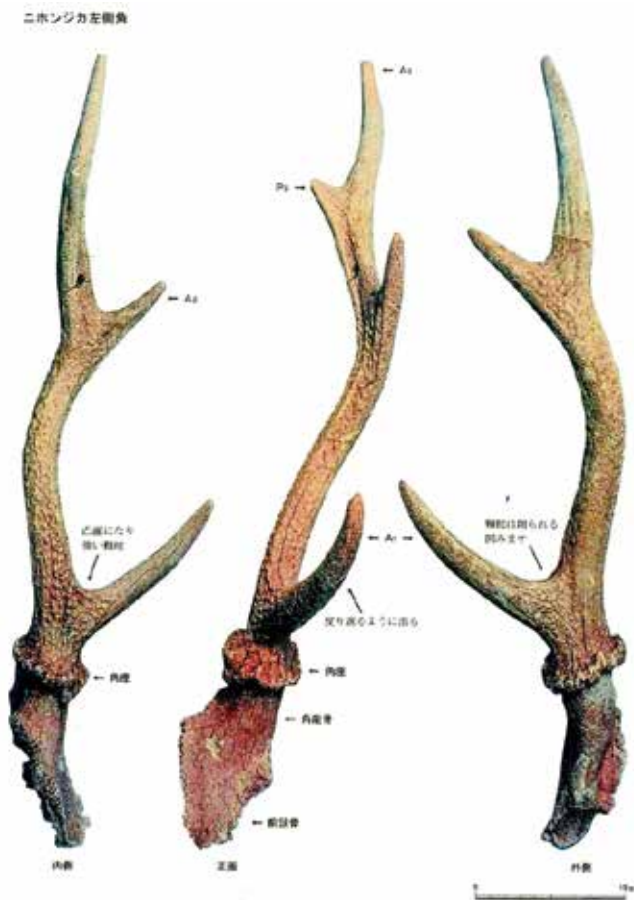
○「骨角」(BONE AND HORN) 質、強度は高く、よく、刃物と刃物等による刃物等の刃物に用いられる。

マグロの骨 1 陸前高田市 3 陸前高田市 3 陸前高田市

骨角器—I

「鹿角」を題材として、縄文人のつくった道具の一つ「銚頭」について述べてみます。シカとのつながりの強い一面でしょう。

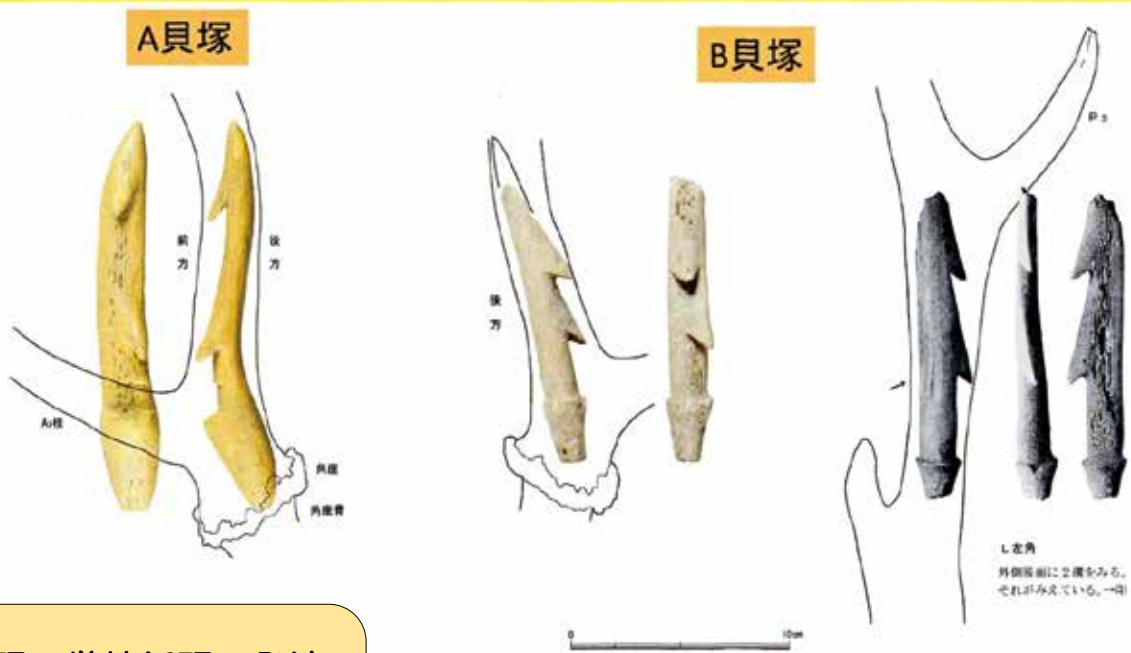
ニホンジカ左側枝角



ていねいに角を見ていた筈です。

横浜市

称名寺貝塚出土の銚頭にみる鹿角の利用法



後期初頭の単純銚頭の発達

骨角器論—Ⅱ

僅かな骨角器の出土例です。でも、縄文人の気持、生活環境をよく現した製品です。オオヤマネコの尺骨を、何とみごとに使ったことか。縄文人の面目躍如たるものがあります。(考古学ジャーナル 694・2017 より)

単独で使われた骨角製品とセットとしてみる骨角製品。いずれ使われる場合には、単独で使われたのであろうが、一つの遺跡から出土品としてみると、セットとしての意義もある。

千葉県富津市富士見台貝塚の動物遺体と骨製品

縄文後期中葉、漁撈活動の新たな展開の様相を東京湾口部東岸の貝塚にみる。

後期初頭東京湾口部東岸の洞穴(館山市鉈切洞)に、外洋を目指した人たちの小さな拠点があったが、中葉期加曾利 B2 式期の貝塚が、北寄り富津市富士見台で知られた。小さな入江にあった。ここで知られた鹿角製の銚頭や釣針、ヤス状刺突具類は、上述の鉈切洞の製品に伝統を引きながら、形態的には大きく変わり、新しい工夫が試みられた。

この貝塚の主体種はスガイ 60%で、食料の資源の有効に欠けたが、房総丘陵が背後にあり、シカ、イノシシが積極的に行われ、獣骨の出土は多く、漁撈も積極的であったことは、漁具類の多彩であることからわかる。

さらに装身具類にもその様相をみる(図 2)。小貝塚であるが、オオカミ犬歯 1 点が(2)があった。最大のウミガメであるオサカメ肢骨の穿孔品 2 点(3)、巧みに潜水して魚を捕らえるウミウの大腿骨穿孔品(1)はこの地に生活した人々の積極的な漁猟の活動とともに、自然への畏敬の思いから作られた製品である。

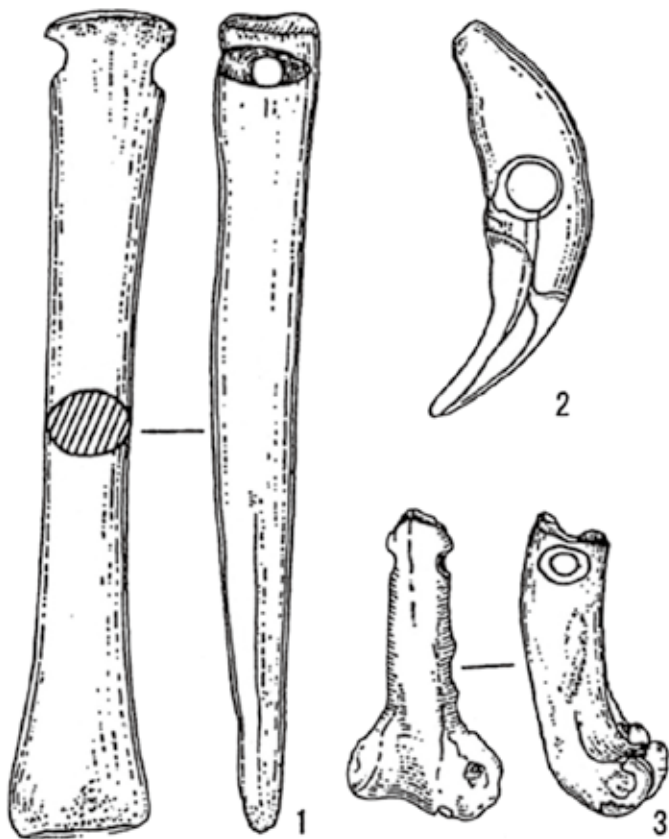


図2 千葉県富津市富士見台貝塚の骨牙製品
左端全長10.9cm

千葉県立富津海洋資料館報告 富士見台貝塚
縄文文化後期漁撈と骨角器文化の一型 1964 千葉県教育委員会

2. オオヤマネコの垂飾品とその素材

西ヶ原の縄文人が、この骨を手にしたときその形がイヌやタヌキとは違うことに気づいたと思う。真っ直ぐにのびる幅広い骨体と深く切り込む近位の関節部分の形が特徴的である。ただ、この動物（オオヤマネコ）についてどの程度の知識をもっていたかは不明であるが、骨の利用に関心をもっていた縄人はこれを素材として身につけたいと思ったのではなかろうか。そして直ぐに思いついたのが鉤形に曲がる勾玉状の垂飾品(図 1)であった。石製とはまた違う稀少性、複雑な形に縄文人は心引かれたのではないか。朱彩していっそう目立たせたのも、この製品が気に入った証である。

オオヤマネコは縄文時代に北海道、本州、おそらく九州の各地に生息していたことが確認されているが、その遺骸を遺跡から検出することは稀である。

犬歯、下顎骨の穿孔例、未加工の上顎骨、下顎第一大臼歯、四肢骨片が出土しているが、10例に満たないであろう。そうした中で本例は骨格の形と、彩色に優美さがあり縄文人の思いを込めた製品ではないかと思う。

オオヤマネコは、更新世に大陸から渡来したものと考えられるが明確ではなく、早期以降は生息していたと思われるが後期以降にはみられない。陸棲の大型獣では最も早く列島から姿を消した。なお、ユーラシア大陸には現在もオオヤマネコは生息している。

骨の形を利用して垂飾品としている例をよく見る。指骨などは良く素材にされている。キツネ、タヌキなどの肢骨の骨端の丸い形を使うのである。

それらと比べるとこのオオヤマネコの尺骨は大型である。しかし、その近位骨端の滑らかな「滑車切痕」を上手に使って垂飾品としている。縄文人ならでは出来ない製品である。ちなみに、尺骨を使う例も他にない。

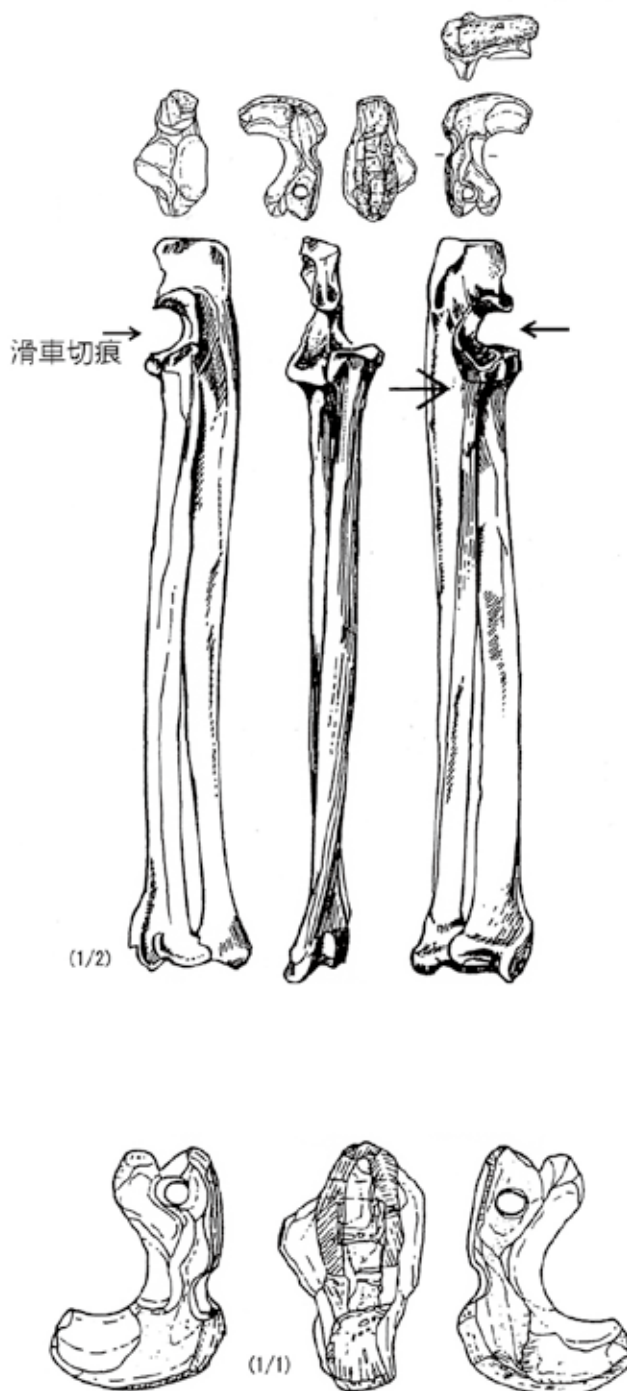


図1 オオヤマネコの左尺骨と東京都西ヶ原
貝塚出土尺骨穿孔品（矢印は穿孔の位置）
月刊 考古学ジャーナル No.694, 2017

イノシシの犬歯と骨角器 横浜市称名寺貝塚出土の鈎形製品の複製品

東京湾口での
イルカ漁

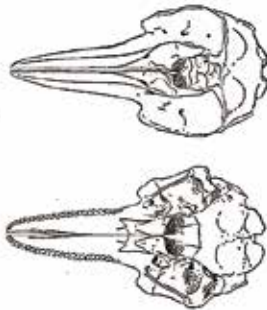


図1 東京湾口、相模湾沿岸、伊豆半島における外海系貝塚とその関連遺跡の分布図（イルカ類その他の海洋哺乳類の目立った遺跡あるいは記録などの出土した遺跡）
 1. 一宮町一宮貝塚(前期) 2. 平加茂遺跡(中・前期) 3. 相山町中野田(前期)
 4. 相山町福原貝塚(前期) 5. 宮津町五十貝貝塚(後期) 6. 宮津町大野遺跡(前期)
 7. 横濱市称名貝塚(前期) 8. 横濱市称名貝塚(後期) 9. 横濱市菅が谷貝塚(中・後期)
 10. 茅ヶ崎市福原(後期) 11. 茅ヶ崎市古塚貝塚(中期) 12. 大磯町平遺跡(前期)
 13. 伊豆市丹波川遺跡(後期) 14. 東京湾隅ノ口遺跡(中期) 15. 東京湾伊豆渡(後期)
 16. 横濱市相模湾(後期)



Turssiops gilli
Turssiops gilli Dana, 1813
 バンドウイルカ
 英名: GI's Bottle-nosed Dolphin

バンドウイルカ

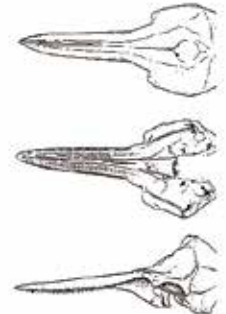


頭骨上面(上)と下面(下)



Delphinus delphis
 マイルカ
 英名: Common Dolphin

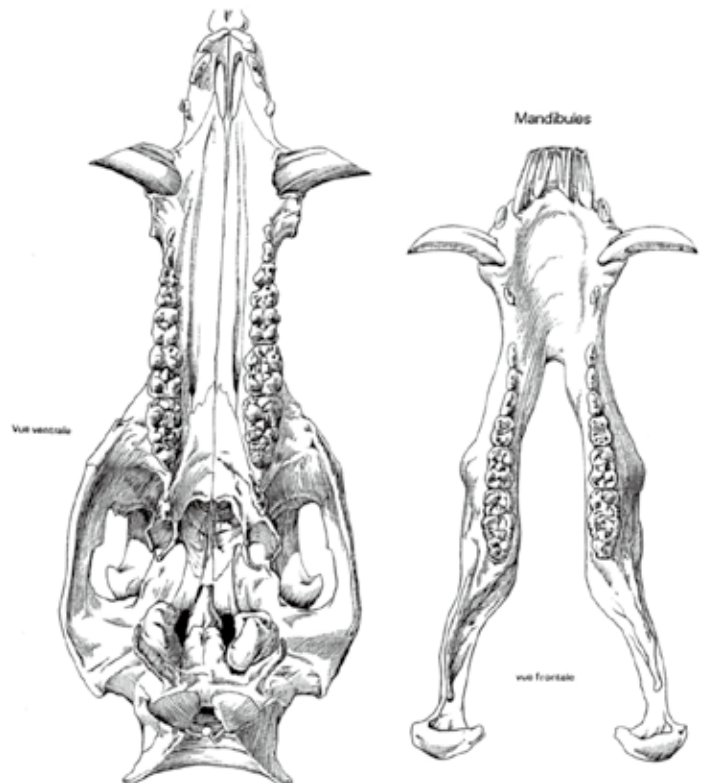
マイルカ



顎骨
 (上より上面、下面、左側面)

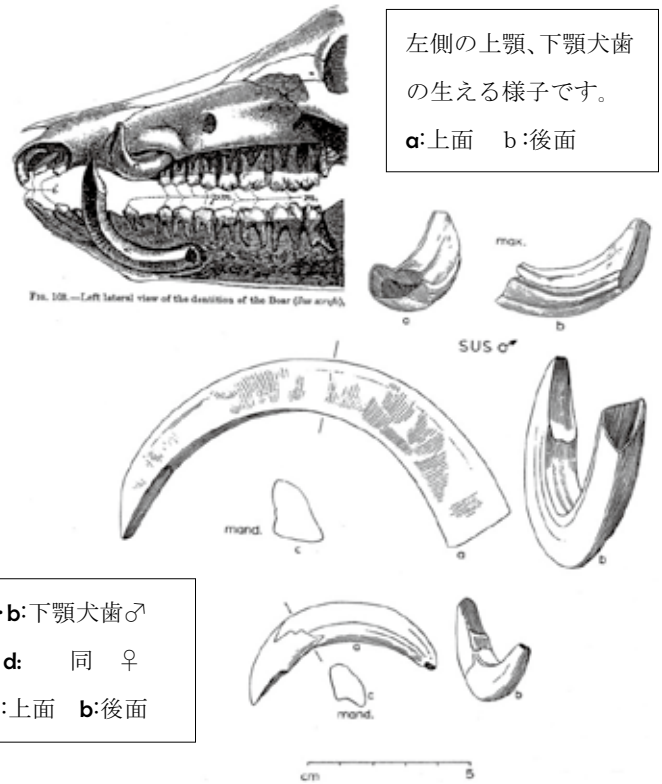
次に、「イノシシ」との骨角器を通じてのつながりです。

称名寺貝塚(横浜市)出土の鈎形製品を例にとりましょう。この貝塚をつくった縄文人が、力を尽くしたイルカの捕獲のために考えた道具の一つです。これには、田村正義氏製作の模型が、縄文人のイルカへの思いを語ります。



イノシシの大きな下顎犬歯(雄)

縄文人にはどのように見えたか、この犬歯に様々な手を加え、これを使いあるいは身に付けようとした製品は数多い。その腕曲は美しい。下犬歯全体を使っている穿孔垂飾品(茨城県上高津「後」)もある。近年知られた横浜市称名寺 D3 貝塚の出土品は、全体を縦に半裁しエナメル質面を鉤形の道具としている。注目されるのは薄い歯根部分を鉤先としている。鋭利なのであろう。これにイルカ類の肋骨を半裁した柄を付ける。長い柄がさらに付けられ、飛翔するイルカに引っ付けたのであろう。



左側の上顎、下顎犬歯の生える様子です。

a:上面 b:後面

a・b:下顎犬歯♂

c・d: 同 ♀

a:上面 b:後面

厚みのある近心端部分に刻みのあるのは、止めひもをかけるための加工である。

製品の複製模型:田村正義氏作

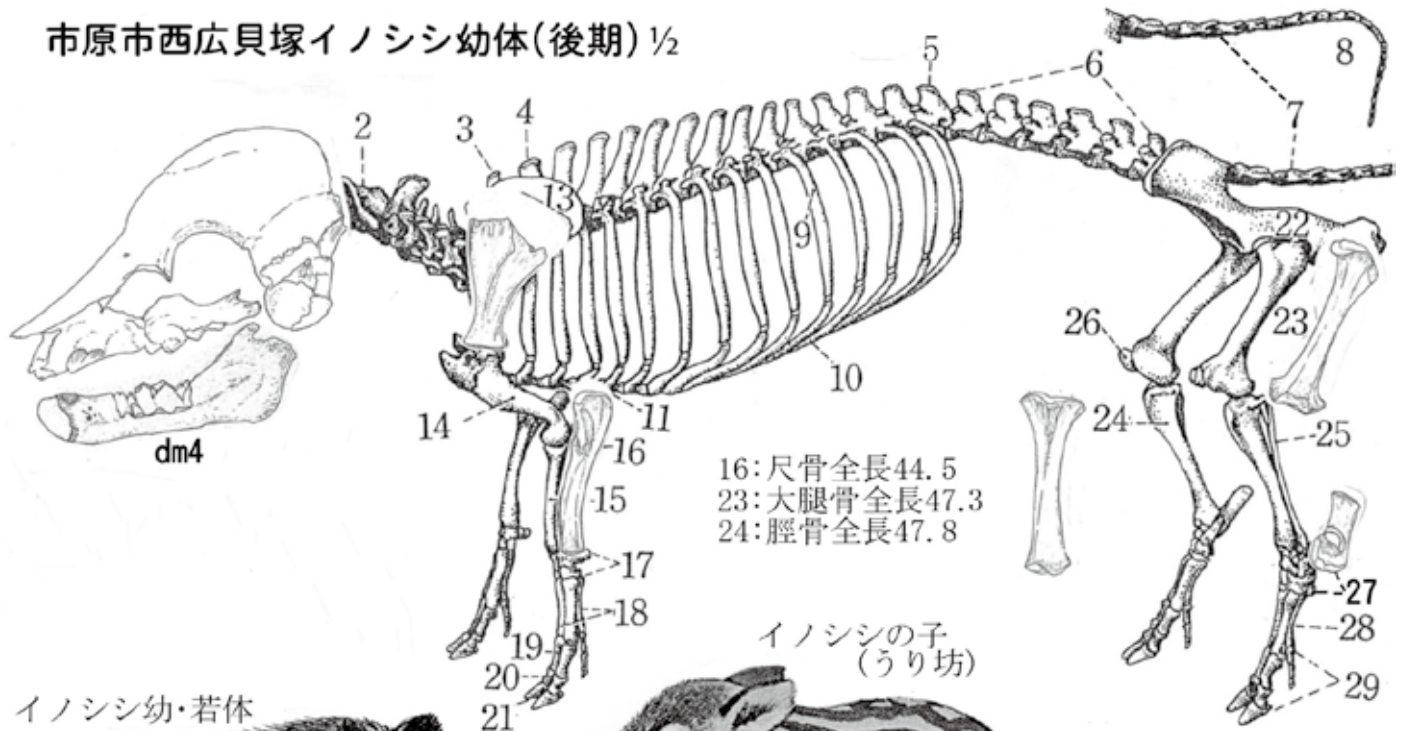


表面

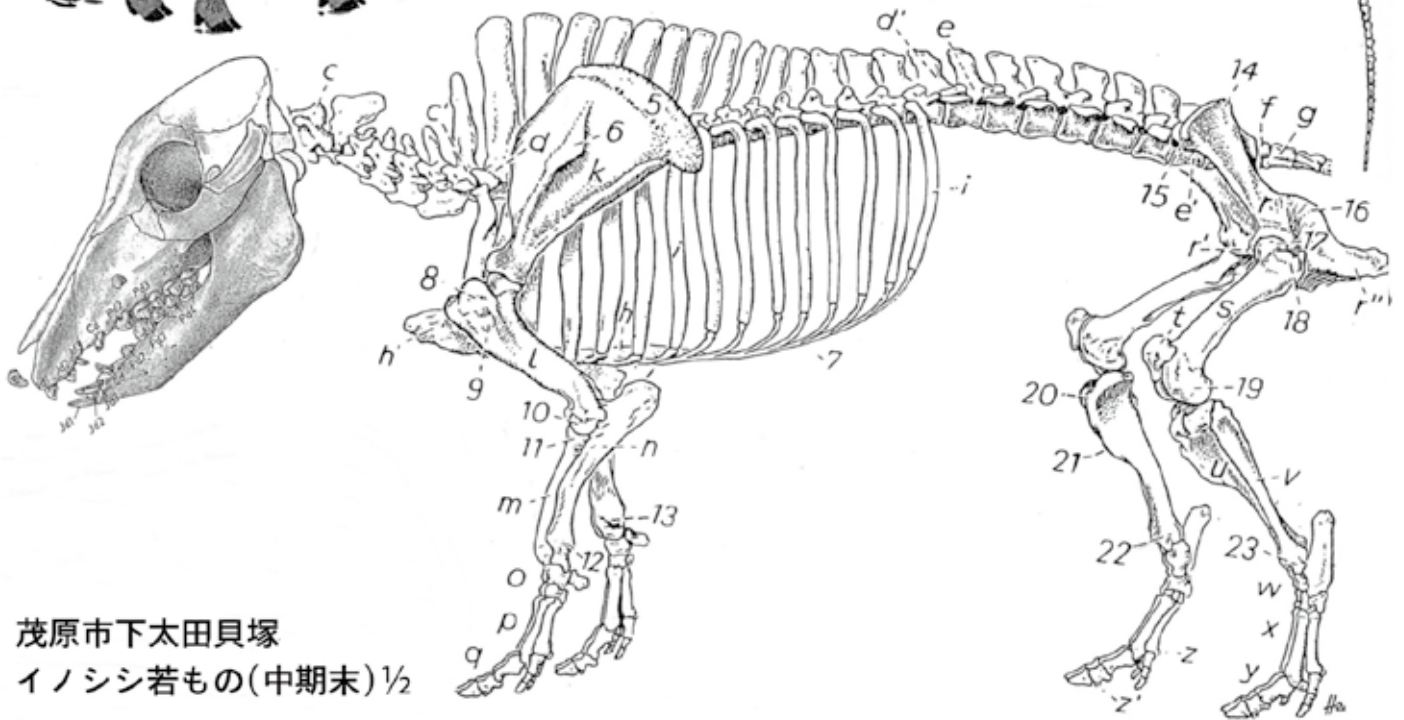
裏面

イノシシ幼若体への縄文人の思い

市原市西広貝塚イノシシ幼体(後期) 1/2



イノシシ幼・若体



茂原市下太田貝塚
イノシシ若もの(中期末) 1/2

“縄文人と動物たち”と題して書きましたが、縄文人の活動、動物たちの多様さのことを考えれば、まだまだ書き足りないことばかりです。読者の方から”あれもあるよ”というお言葉をいただければ、返って私としてはうれしい限りです。

骨角器についても同様に、貴重な装身具類、各種の道具の類がまだまだあります。北海道埋蔵文化センターの福井淳一さんのように膨大な資料をまとめられた研究もあり、これについては本州縄文文化における骨角器との比較という視野で述べるつもりでしたが、何とも余裕がありませんでした。その後も貴重なご意見を頂くことができ有り難うございました。

本稿を終えるに当たり、かわいいイノシシの幼体に登場してもらいます。

西広の幼体イノシシは dm4 のほんの僅かな萌出であるが、下顎骨体は dm4 完出に近いサイズであり、四肢骨もそれに近く成育している。つまり、下図に近い体つきになっていた。背中の縞はまだ消えていない。生後 3 ヶ月、母子ははなれていただろう。dm4 が完出することによって上顎骨も発達し、長い鼻面になる。

イノシシ幼・若体の骨格図がないので、やむを得ずブタ図 2 種(邦産とドイツ版)に合わせて復元図を作りました。西広貝塚例では、四肢骨も並べてみました。このように並べて見ると、縄文イノシシは大きい事がわかります。

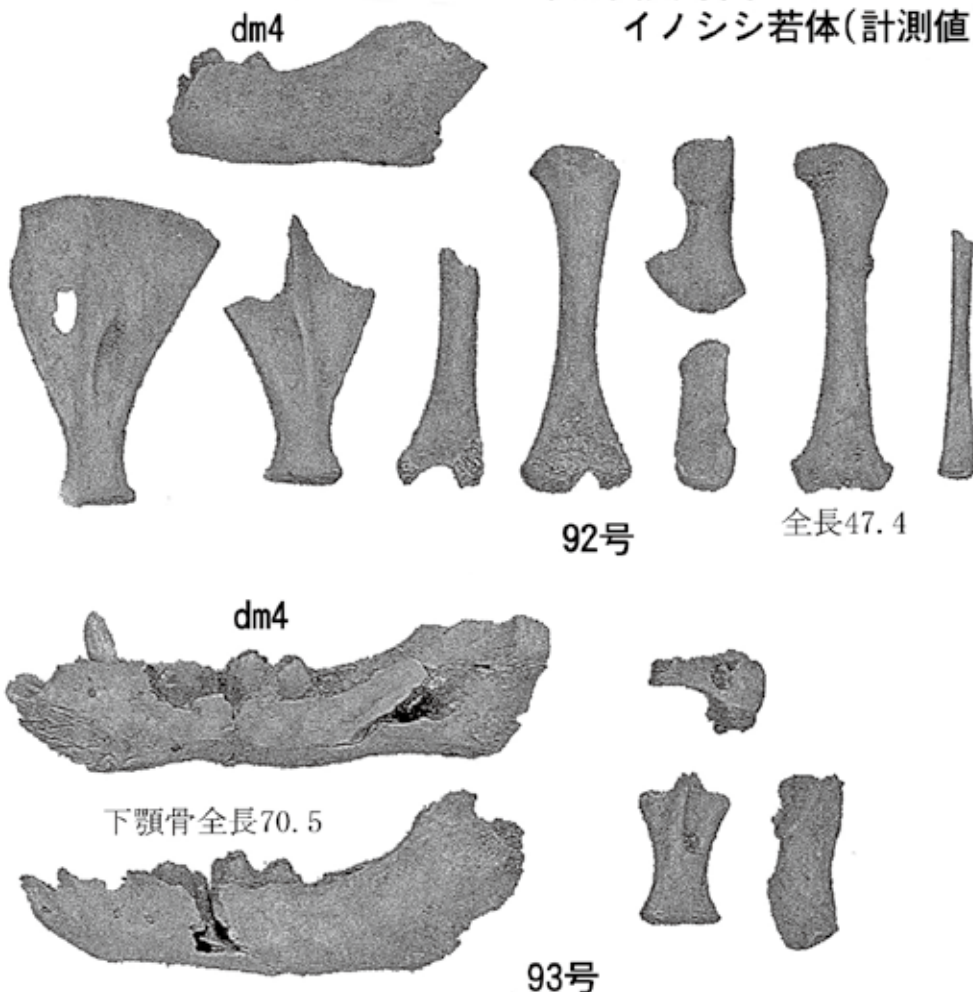
イノシシ、シカを主体とする本州から九州に至る縄文具塚では、イノシシの幼体、若い個の遺体がしばしば出土します。イノシシの出産個体数の多いことも反映しているのでしょうか。また

まった出土の場合には、報告書に写真が掲載され、記載されるのですが、部分的な骨になると表中で記載されるのみのこともあります。

本来こうした動物たち(家畜であるイヌの場合を除いて)の遺体は、皮革、骨角、髄に至るまで利用するわけですから、解体しているのですが幼体の中には埋葬されている例、解体後再びまとめられた例、特定の部位のみが集められた例が知られていません。

つまり、その動物たちとの関わりは多様であったと云うことが出来ます。その中では、若い個体に対する扱いが注目されます。縄文人との関わりを知る資料になります。縄文人の意思を探ることが出来るかもしれません。

下太田貝塚出土の
イノシシ若体(計測値)



1) 千葉県茂原市下太田貝塚

千葉県太平洋岸域、多数の人骨の埋葬址の出土した遺跡で知られていますが、その中に混じってイノシシの一括した出土がありました。

(西本豊弘他、総南文化財センター、2001)

92号イノシシ

加曽利 EIII~IV式期に帰属する幼児の墓域に隣接して埋葬されていた3体のうち一体である。ほぼ全身が揃っていた。

乳歯の萌出状態は、第4乳臼歯 dm4/4 は歯槽内に留まるか萌出を開始した状態である。生後1~2週間と考えられる。まだ母子の結びつきが強く、母子は無理に離されたのであろう。体の縞はまだ消えていなかっただろう。

93号イノシシ

下顎骨写真でみる限り、92号よりもやや大きい、歯の萌出状況は大きくは変わらないようである。

2例とも生後3~4ヶ月で力つきたのではないか。

縄文人にとって肉は最高のごちそうであるが、いつでも手に入るものではない。有り難くいただいた。分け合えば、ほんの僅かな量であったが。そして、その後この若い個体を祭ることを忘れなかった。骨も食べられそうな柔らかさだったが、食べずに一まとめにして埋めた。可愛がったイヌの遺体を葬るのと同じように。気仙沼市田柄貝塚の例は、それがいっそう良く分かる埋葬であった。

ただ、こうした例は決して多くない。飼育、飼養を目的としたものではないと思う。偶然に手に入ったのである。だから普段のイノシシに対して持っていた畏敬の気持ちが現れた。成獣であるイノシシの頭蓋骨を畏敬の気持ちで扱った側ヶ谷戸貝塚(浦和市)の例とも共通する、と思う。

2) 千葉県市原市西広貝塚出土のイノシシ幼体

下太田93号イノシシと同じ生育状態である。特に、頭蓋骨の保存が良好で、うり坊の姿を彷彿させる。骨格のサイズも同じである。生後2ヶ月、母のもとにいた。養ってみたい気持ちがあったが、数週間以上は続かなかった。頭などはこわさず(推定である)、四肢も肉だけ

は外して埋納した。四肢には150g位肉があったかも知れない。

後記・縄文人と動物との関わりは、ただ捕ったり、食べたりするのではなく、動物たちを愛おしむ気持ちもあったのです。イノシシの幼・若体に対する扱い方に見ます。たまたま手に入れた幼体を飼って食べようと云うのではなく、何とか育てられないかと考えたが、2~3ヶ月或いは半年がせいぜいでした。遺体は当然食べたので、後は特別に穴を掘って埋めています。

骨角器が入念につくられていることも、動物への深い関心があったからですが、道具と装身具が相俟って発達していることとも指摘できます。ただ数多くつくり、飾れば良いと云うのではありません。狩猟に大切なイヌの犬歯を垂飾にしている例は非常に少ないのです。余程飼い主だった人と深い関係が生前にあったからと思います。

現代のニューギニアの住民が、変形させたブタの犬歯を飾りにし、何十ものイヌの犬歯を吊り垂げた飾りをつくっていますが、どれだけの数のイヌが無体で屠殺されたのでしょうか。その実態すら記されていません。

縄文人の心の中には動物への畏敬の思いが常にあり、ていねいで美しい骨角器の出来たのもその思いがあったからです。骨角器の発達は、自然の美しさを学び、それを伝えたいという気持ちの現れでしょう。

骨角器をつくる基本は、その素材にあります。素材の形態を確認し、それを加工する技術を工夫したのです。それを復元することは、再現し、確認するのです。単なる羅列では、骨角器製作の意図つまり文化を知る事は出来ません。

おわりに

本書の刊行に当たっては、縄文柴犬研究センターの五味靖嘉氏に一方ならぬお世話、ご教示をいただきました。このような機会を与えていただき真に有り難うございました。厚く御礼を申し上げます。

また、いつもながら玉川文化財研究所の方々にお世話になりました。特に、赤間和重様、田村正義様には図版、模型の製作に当たっていただきました。厚く御礼を申し上げます。(2020.04.24)

「日本のイヌの歴史」

京都大学名誉教授 茂原信生

1、はじめに

日本のイヌの歴史を考えるうえで、イヌの飼育者、あるいは共同生活者の日本列島人の歴史をみておく必要があります。イヌは、ヒトとともに移動するようになったと思われるからです。日本在来犬のルーツも日本列島人のルーツと深く関わるテーマです。

日本列島人の歴史は、沖縄県の白保竿根田遺跡などから新たな旧石器時代の人骨が発見されて歴史が書き改められています。今のところ、最古の日本列島人は4万年前頃に日本にやって来た人びとということになっています。しかし、その起源地に関してはいまだに分からない点が多いのです。以前は、縄文時代人は南方起源で、日本全体に形態的にほぼ様な人びとが生活していたということになっていました。しかし、ここ20~30年で古人骨の資料も多くなり研究方法も多様化し、さらに遺伝子の研究が飛躍的に発展して、今までの日本列島人のなりたちについての考えを根本的に改めなければならなくなっています。縄文時代人にはかなりの多様性、特に遺伝的な多様性があることが明らかにされてきたのです。縄文時代人が比較的均一だと思われたのは、弥生時代に大陸から渡来した人びとと比べると均一にみえたということに過ぎなかったのです。

縄文時代人がいた日本列島に、大陸からいわゆる渡来系の人びとが移動してきたのが弥生時代ですが、

この海外からの移動はこれ以降もずっと続き古墳時代くらいまで続いてようやく現代日本人の基礎が出来たということになります。日本列島人はいまだに両者の混血が進行中です。平均的な現代日本人はおおよそ縄文時代人の遺伝子を10~20%ほど引き継いでいるといわれます(篠田2019)。もちろん混血の進行にともなう地理的な変異があり、その地方変異は混血の進行の度合いを示しているものです。

日本列島人の起源についての考えが変化すると当然のこととはいえ日本在来犬の祖先に対する考え方も変わってきました。古代犬でもヒトの場合と同様に遺伝子の研究が大きく進み、さらにイヌの発掘例が増加してきたこともイヌの研究が進む大きな要素になりました。しかし、発掘される数が多くなれば個体間の変異は大きくなり、多様性がまして形だけでは祖先を追跡することがむづかしくなってきました。もちろん、多様性があるといっても狩猟採集生活をしていた縄文犬としてのある程度の共通した特徴があるのも事実です。以前からいわれていた縄文犬の特徴を大きく離れるものではありません。それを明らかにしていくことが私たちの目標になりました。

2、各時代のイヌ

A. 縄文時代のイヌ (写真1,2)

狩猟採集を主とした縄文時代は、今から約1万5千年前から約3千年前までの、1万年以上にわたって続いていた。3千年程前に稲作の技術が日本に持ち込まれて縄文時代は終わり、農耕を主とした弥生時代が始まったということになります。

縄文時代には数多くの遺跡から多数のイヌが出土しています。この中で、最も古いイヌは、神奈川県縄文時代早期の夏島貝塚のもので9500年前ということになっていました。この年代はこの遺跡から出た他の動物骨から年代測定されたもので、出土したイヌの骨そのものの年代測定ではありません。イヌそのものから年代測定されたものでは、愛媛県の上黒岩岩陰遺跡から出土した縄文時代早期(約7400年前～約7300年前)の層から発掘された埋葬犬がもっとも古いこととなります(Gakuhari 他 2015)。縄文時代早期の遺跡からでたものは他にもあり、例えば佐賀県の東名遺跡から出土した約7000年前のイヌがあります。

それらよりも古いものはありませんから、日本のイヌは日本列島以外から持ち込まれたということになります。現在その祖先さがしが遺伝子の研究で行われていますが、まだ十分に解明されていません。イヌはつながれて飼われていないことが多く、交雑も比較的自由なので遺伝子の研究はその多様性、というか特徴のなさのゆえになかなか実態をつかめないうです。

縄文時代のイヌは、全国的に見ても形態的にかなり小さいものが一般的で、大きいイヌはごくまれです。例えば、渥美半島周辺の遺跡からは頭蓋最大長が♂155mm、♀143mmという♂♀ともに小級のものが出土しています。古代犬の大きさ区分ではよく用い

写真1：縄文犬の特徴。現代のシバイヌとは大きくプロポーシオンが異なる。縄文犬は頭蓋骨の横幅が相対的に小さく、吻が短い。プロポーシオンの違いがわかりやすいように両種の最大長を同じ大きさに合わせてあります。シバイヌの頭蓋骨の形態も多様なので必ずしもこのようなタイプばかりではないが、典型的なものを示しました。



縄文犬

シバイヌ

られる長谷部言人(1952)の型区分でいえば小級で、現生のシバイヌよりも小さいイヌです。

縄文時代のイヌは、かつて私自身もそう思っていました。形から見るとほとんど一系統のように思われてきました。現在では発掘報告が増加した結果、多様性が指摘されていますが、大きく見ると形態ではやはり比較的均一な特徴があります。それをまとめると以下ようになります。

- ①ストップ(頭蓋骨の前頭部から鼻先にかけての凹み：額段)が小さいこと。これは、オオカミに近く、より原始的な形質と考えていいでしょう。
- ②顔が細いこと(吻が長く、頬骨弓の幅が狭い)。
- ③四肢骨が全体に頑丈なこと。
- ④歯の磨耗が顕著で、歯が折れるなどの損傷が多いこと。

縄文時代のイヌの役割は、番犬としての役割の他に、狩猟に用いられたと考えるのが一般的です。縄文時代の生活はおもに狩猟採集によっていたからです。縄文犬の顔が細みだったり、ストップが小さかったりするのは、咀嚼器官がよく発達していて吻が長かったからです。これと関連して縄文時代のイヌの歯には後代のイヌにはみられないような激しい損傷が多く見られます。例えば犬歯が折れていたり、裂肉歯（上顎の第4小臼歯）が割れていたり、など数多くの例が見られます（写真3）。現代のイノシシ猟に用いられるイヌにも同じような歯の損傷が見られるといいます。もちろん骨折などもあります。縄文犬が現代のシバイヌよりも四肢骨が頑丈なのは、このような使われ方が影響していると思われる。

このような役割を担ったイヌは、当然のことながら縄文時代人にとって重要な存在であったと思われます。埋葬されている数が多いことがそれを示しています。縄文時代の遺跡から出土する食用であった他のイノシシやシカ

ニホンオオカミ



縄文犬



中世犬



シバイヌ



写真 2: ニホンオオカミ、縄文犬、中世犬、現生シバイヌの側面観。

縄文犬は鼻先から額にかけての凹み(額段:ストップ)が小さく、オオカミに近い原始的な形をしています。シバイヌのストップが大きいのは咀嚼力の低下による変化と思われる。ストップは中世犬では大きくなり、シバイヌでは顕著です。

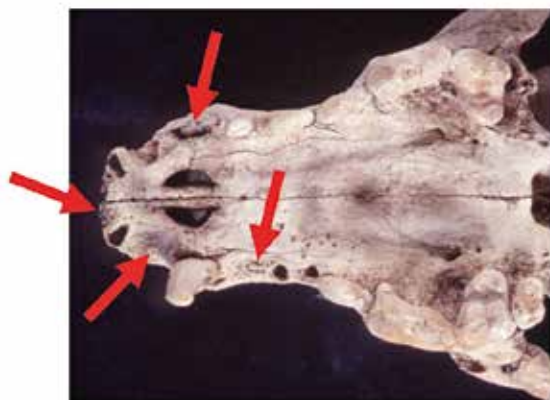


写真 3: 縄文犬に見られる著しい歯の損傷の例。

いずれも田柄貝塚から出土したイヌ。上の写真では右の裂肉歯が半分に割れています。下の写真は、左の犬歯が折れてなくなり切歯部(左右の中切歯、右の第3切歯)や第1小臼歯も脱落しています。

などの動物には解体痕が見られます。しかし、イヌには解体痕がほとんどみられません、皆無というわけではありません。例えば、千葉県の下遺跡から出土したイヌには切痕がみられるという袁・加藤（1993）らの報告があります。埋葬されたイヌがみられると記しましたが、それ以外にも多くのイヌはバラバラの状態に出ているのです。この状態になった理由はなかなか説明がむずかしいですが、これらは食用にされたのではなく、埋葬された後に攪乱などによりバラバラになったと考えた方がいいでしょう。食用にしていたとするには余りに出土するイヌの個体数が少ないからです（金子1989）。解体痕は全国的に見て少数例で、イヌが積極的に食べられていた証拠はありません。弥生時代以降のイヌが多くはバラバラに出土しており解体痕も見られるのは明らかに扱いが異なっていたと思われます。

イヌの扱いが他の動物と異なっていたことを示す

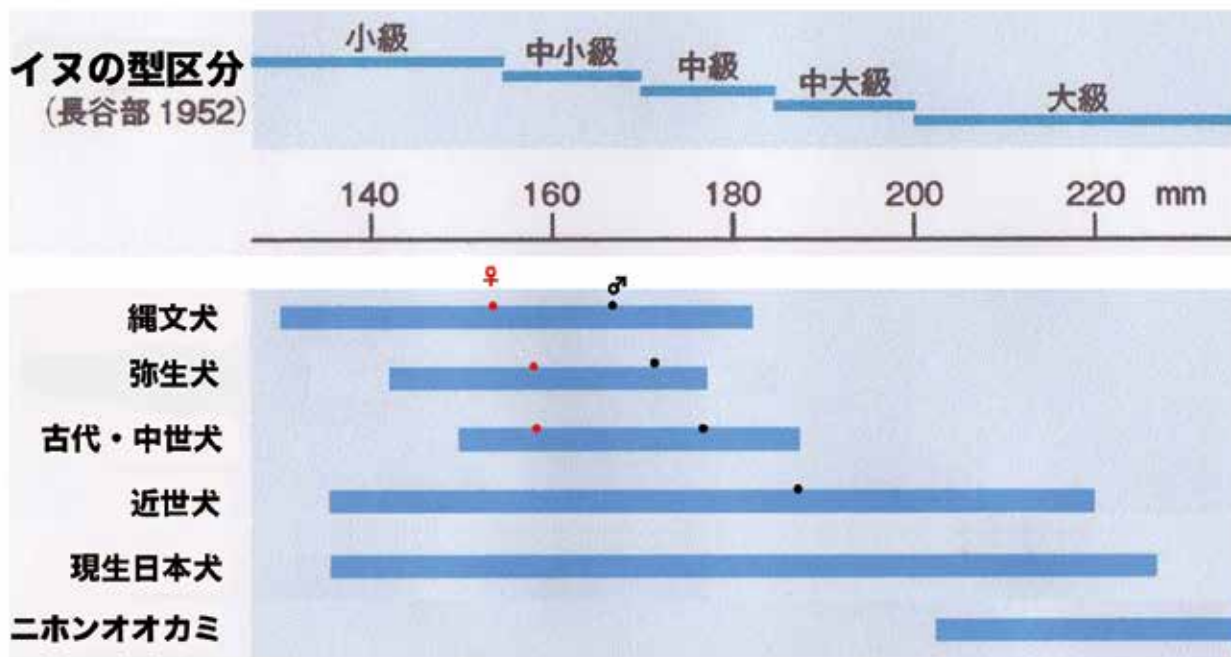
ものとして、イヌとヒトの合葬が報告されています。しかし、合葬の例は少なく、ヒトとイヌの墓域が共通することはあっても同時に埋葬されたかどうかは不明なことが多いのです。最近では岩手県の近内中村遺跡から出土した縄文時代後期後半の合葬例が報告されています（鎌田1998）。また、吉胡貝塚でもヒトとイヌの近接した埋葬例があります（山崎・茂原2007）。山田（1997）や山崎（1985）によるイヌの埋葬についての論考もあります。ヒトとイヌの合葬についてはこれからまだまだ研究が必要でしょう。

B、弥生時代のイヌ

弥生時代に大陸から稲作の技術がもたらされ西日本から次第に東日本に拡大していくにともない、日本列島人の生活は狩猟採集生活から平野部の農耕生活へと変化していきました。農産物が蓄積されることによって集団同士のたたかいなども多く発生するようになり、ヒトの骨にも切断痕など争いの痕跡が

図1：日本の古代犬の頭蓋骨最大長の大きさの時代的変異。

それぞれの時代の頭蓋最大長の変異幅を示しています。黒い点はオスのおよその平均値、赤い点はメスのおよその平均値です。発掘例が増加し、単純な変化ではなくなったが、時代を経るにしたがって次第に大きくなっているのがわかります。縄文時代の中に大きいものが含まれるが大きなものはまれです。



みられるようになってきます。農業は人類に飛躍的な文化的発展をもたらすとともに争いも持ち込んだこととなります。縄文時代と弥生時代は人と人との関係に本当に大きな違いがあります。

狩猟採集生活から農耕生活になったことで狩猟に対する価値が相対的に減退し、それに伴ってイヌの猟犬としての価値も減じたのだと思います。弥生時代のイヌはどんなものだったのでしょうか。主に西日本から出土している弥生時代犬では、縄文犬よりもやや大きいものが多くみられます(図1・図3)。埋葬されて出土するものはごく少なく、多くが散乱状態で出土しています。明らかに縄文時代とはイヌに対する扱いが異なっています。例えば、大阪の亀井遺跡から出土したイヌは埋葬されておらず、溝のようなところからバラバラで出土していました(宮崎:1982)。大陸から渡来系の人びとによって新たに持ち込まれた食習慣と食用のイヌの存在が考えられます。後述の遺伝子の研究でも縄文時代にはなかった遺伝子の型がみられるようになります。

西本(1997)は西日本の弥生時代の動物質食料の中で、イヌは埋葬されたものがほとんどなくバラバラに出土していると記しています。食用のイヌはシカに匹敵するほどかなりの比重であったと述べています。鳥取県の青谷上寺地遺跡から出土したイヌは、多くはやはりバラバラで出土していますが、なかには埋葬されたものもいたといいます。イヌの扱いで言えば縄文時代と弥生時代の混在する文化的な要素が垣間見られる遺跡です。

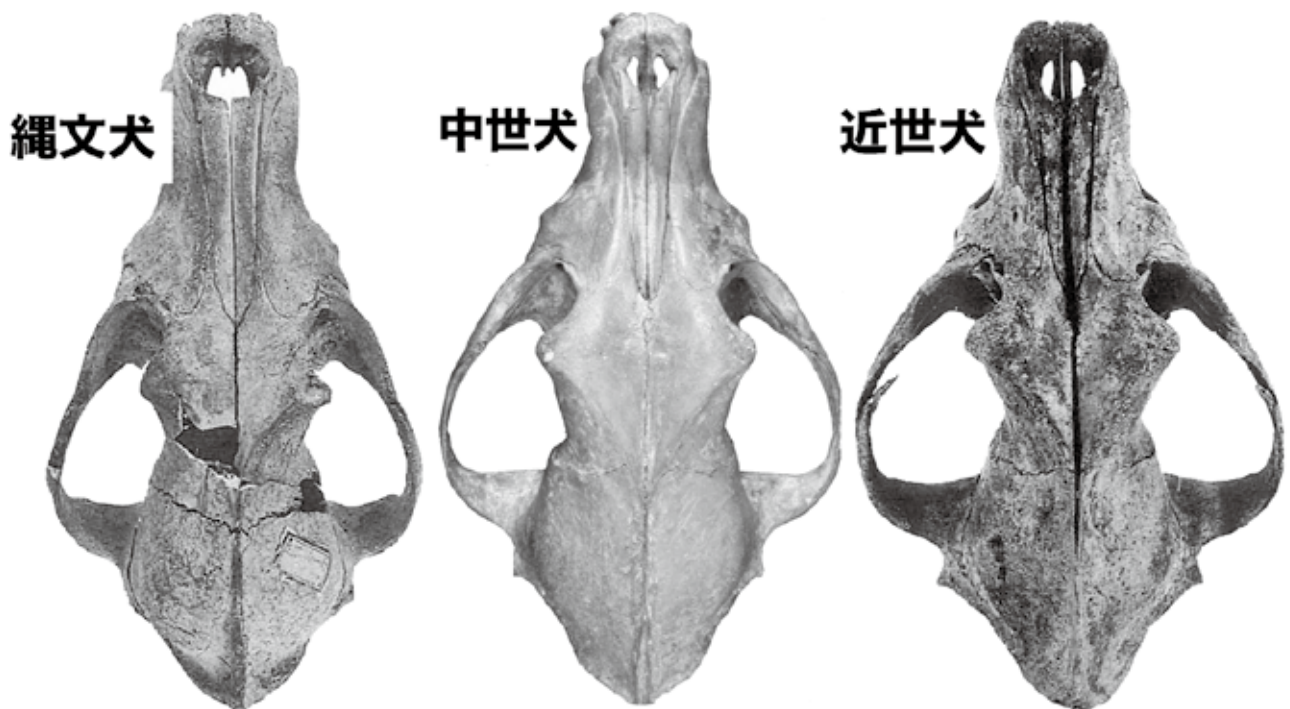
C、古代～中世のイヌ

古代～中世は、イヌの多様性が増し、かなり大型のイヌもみられるようになっていますが、遺跡から出土する数はずっと少なくなります。日本へ大陸からイヌが献上されたことは日本書紀などにも記されています。しかし、一般的なものではなく朝廷への献上品として持ち込まれたものですから、一般的なイヌへの影響は微々たるものであったらうと思われれます。

稲作が定着するようになるとイヌの役割も多様化

写真4：縄文犬と後代のイヌのプロポーシヨンの違い。

縄文犬の顔の幅(頬骨弓の幅)が相対的に小さいことがわかります。プロポーシヨンの違いをわかりやすくするためそれぞれの最大長を同じ大きさに合わせてあります。



してきます。平安時代の終わりころからイヌを狩猟の練習として用いる「犬追物」などが行われるようになりました（金子 2000）。さらに、鷹狩用のタカのえさとして使われる例もあったようです。例えば、愛知県の豊明市沓掛城址（16 世紀中頃）から出土した大きめのイヌの頭蓋骨には頸を切断した痕跡や頭の筋肉をていねいにはぎとった痕跡が残っていました（茂原 1985）。広島県の草戸千軒遺跡ではイヌが食用に売られていたと考えられています（松井；1999）。一方で、神奈川県鎌倉時代の千葉地東遺跡から出土したイヌは、幼犬では埋葬されていたものもありましたが、成犬での埋葬例はなく、バラバラの出土が多くなっています。しかし、解体痕のつく例はまれで、積極的に食べていたという証拠はあまりないといえます（金子 1986）。

頭蓋骨の計測では、頭の長さに比べて幅（両側に張り出した頬骨弓）が大きくなっています（写真 4）。比率では頭の横幅が大きくなっていることを示しています。これはおもに咬むために使われている咀嚼筋や歯への負荷が減少して、歯列を含む吻部が前後に短くなってきていることによる影響が大きいと思われる。

東北地方では、古墳時代から平安時代にかけての遺跡である市川橋遺跡（宮城県）から出土したイヌは、縄文犬に比べて大型で、やはり頭蓋骨は顔の広いプロポーションでした（菅原 2001）。形態も変異に富んでいます。解体痕が見られるものもあるようです。

北方のサハリンのオホーツク文化期の古代遺跡から出土した鈴谷貝塚のイヌは、バラバラに出土しており、解体されていたらしいことがわかっています。イノシシのいない北方では食料としてイヌが利用されていた可能性があります（内山 2014）。

D. 近世のイヌ

江戸時代には、外国から大きなイヌがもたらされていることは文献にも残されています（茂原 1991、磯野・内田 1992）。この時代には明らかに外国のイヌの影響を受けたと思われる大型のイヌが出土しています。仙台市の仙台城三ノ丸遺跡から頭蓋最大長が

176 mmほどの中級犬が、また江戸の淡路町からは頭蓋最大長が 183 mmほどの中級犬が、さらには東京芝神明町屋跡遺跡からは頭蓋最大長が 203 mmの大きなイヌが出土しています。東京の仙台坂遺跡から出土のイヌ頭蓋骨最大長は約 220 mmで、シェパードよりも大きいほどです。長谷部の型区分ではイヌとしては最も大きな大級に相当する大きさです。これらのイヌには縄文犬に見られるような顕著な歯の損傷はありません。使われ方が異なっていたのでしょうか。

日本のイヌは、強いもの、あるいは大きいものが好まれるといったことはあったとは思われますが、品種改良の対象にはならなかった可能性があります。弥生時代から中世まで、次第に大きなものが増えていく傾向はうかがえます（図 1）が、ブルドッグやダックスフントに見られるような形の変化はありません。ヨーロッパや中東では、古い時代からすでに人の要求するいろいろな機能により形や大きさが変わったイヌが産出されていたようです（Bokonyi:1974）。イヌは役に立つ道具と考えられていたのでしょうか。日本ではっきりとした品種改良の結果が見られるのは江戸時代になってからです。東京の汐留遺跡からも 4 品種以上のイヌが発掘されているといえます（西本他；2003）。これらが日本で産出されたものかどうかは不明です。中国からもたらされた小型のイヌが改良されてジャパニーズチンになったのも江戸時代から明治時代にかけてのこの時期です。

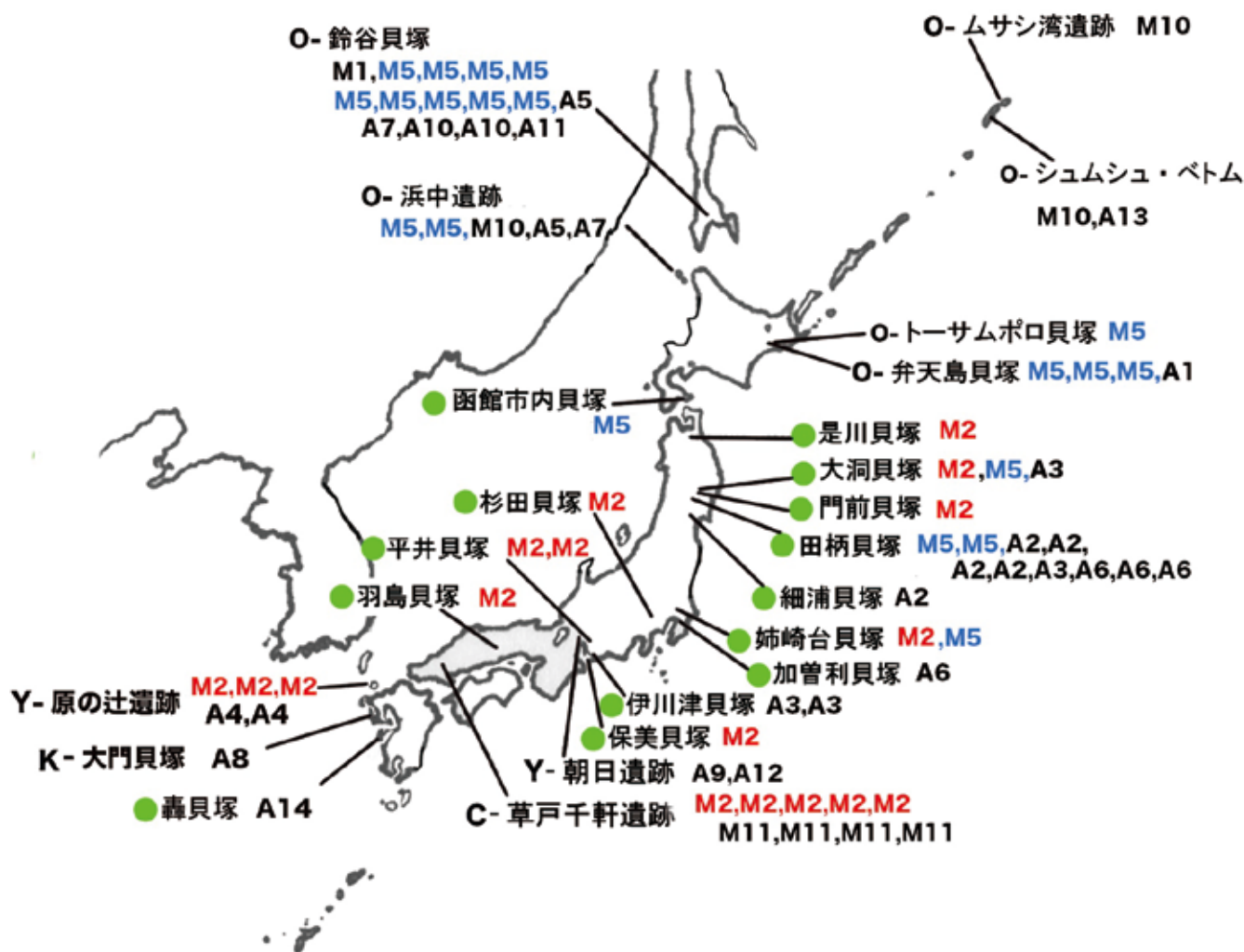
3、イヌの遺伝子の研究

イヌの遺伝子の研究はここ数十年で大きく進展しました。石黒（2003）のミトコンドリア DNA の研究によると、縄文時代のイヌにはかなりの遺伝的な多様性があることが明らかになってきました。その結果をまとめたものが古い時代の各地の遺跡から出土したイヌのミトコンドリア DNA のハプロタイプの分布状態です（図 2）。同じ遺跡のイヌでも DNA のハプロタイプが違うイヌが含まれています。田柄貝塚のイヌのハプロタイプの種類は多いがそれぞれはお互いに

図 2：古代日本犬のミトコンドリア DNA のハプロタイプ M2 の分布。

石黒（2003）の原図に、色をつけてわかりやすくした。日本犬の基層と考えられるハプロタイプ M2（赤字）が縄文犬に多くみられます。南に多い M2（赤字）と北に多い M5（青字）の分布の違いがあります。

緑色の●は縄文時代の遺跡を示しています。Y は弥生時代、K は古墳時代、C は中世、O はオホーツク



近い関係にあり、遺伝的にはかなりに通った集団であるといえます。

石黒の分析によれば日本の縄文時代のイヌには基本的にミトコンドリア DNA のタイプが南に多い M2 型と北に多い M5 型の 2 系統が存在していたといえます。その後の時代のイヌの分析では出土数が縄文時代と違って少ないのではっきりしたことは言えないが、日本以外から持ち込まれたと考えられるハプロタイプが各地で見ついています。しかし、M2 型は縄文時代以来現代に至るまでずっと日本のイヌに認

められる型なので、M2 が日本在来犬の基層をつくったものです。この型は東北地方や関東地方、東海地方、中国地方、九州地方などいろいろの遺跡から見ついています。そのうち、大陸から別の遺伝子をもったイヌが持ち込まれて混血してできあがったのが現在の多様な日本在来犬です（写真 6）。北の影響を大きく受けているかと思われる北海道犬にはハプロタイプ M5 が見つかっていないので、弥生時代以降に大陸から移入されたイヌの影響があるようだと思います（石黒 2003）。

写真 5：復元された日本の旧石器オオカミ（葛生オオカミ）と縄文犬。

国立歴史民俗博物館の展示物として復元されたものです。葛生オオカミの大きさがわかります。

旧石器オオカミ（葛生オオカミ）



遺伝子の研究でもイヌの複雑さが証明されたようなもので、系統をはっきり追うことはなかなかむずかしいようです。現在のところこれらのハプロタイプと形態との関係は研究されておらず、まだわからないことが多い状態です。いろいろな視点を持って研究していきたいものです。形態はその生活を反映するものであり、形と機能の解析が必要です。それによって明らかになることも多いと思われま



4、日本にいたオオカミ

イヌの起源がオオカミであるという考え方が一般的になってきました。日本には小型のニホンオオカミがいたのでそれが家畜化されたのではないかという説は以前からありました。しかし、遺伝的な研究から、そのような考え方は認められ

図 3：各時代のイヌ及びオオカミの大きさの比較。

石黒（2012）の原図をもとに中世犬も加えてわかりやすいように着色しました。各イヌやオオカミの大きさはあくまでおおよそのものです。縄文犬は小さく、図 1 でもわかるように、日本の在来犬は弥生時代から次第に大きくなる傾向があります。日本には 2 種類のオオカミがいましたが、旧石器オオカミの陸封型がニホンオオカミである可能性が高いと思われま

写真6：現生の日本在来犬のいろいろな犬種の頭蓋骨。
北海道犬は♀のものだが他は♂のものです。大きさも
形も多様です。

ませんでした。やはりニホンオオカミはタイリクオオカミやチョウセンオオカミの方に近いことが明らかにされています。(石黒 2012)。ニホンオオカミは遺伝的な多様性が小さいので、日本に渡ってきたのは小さな集団であったと推測されています。ニホンオオカミはタイリクオオカミより一回り小さく(図 3)、明治時代まで日本に生存していました。北海道にはやはり明治時代まで、ニホンオオカミより大きなエゾオオカミが生息していました。

これとは別に、日本の旧石器時代には大きなオオカミがいました。葛生オオカミとして知られていますが、現在のタイリクオオカミのように大きなオオカミが日本列島にいたことがわかっています(直良 1965)(写真 5)。このオオカミは、絶滅したニホンオオカミよりもかなり大きなオオカミで、エゾオオカミと同じくらいの大きさです。

ニホンオオカミと日本在来犬の交雑があったことを示す明確な遺伝的な証拠はないといえます(石黒 2012)。今後の遺伝子での研究が待たれます。

5、おわりに

古代のイヌの研究史で初期に議論を展開したのは齊藤弘吉や長谷部言人です。齊藤(1940-1941)は古代犬についても報告しています。そのなかでも 1963年にイヌの詳細な計測方法を説明する冊子を残しており、その後の日本在来犬の形態研究の基礎をつくりました。長谷部(1952)は古代日本在来犬についての報告を多く残していますが、1952年には吉胡貝塚のイヌについての報告の中で古代犬の大きさの基準について述べています(図 1)。その後の古代犬の報告ではその基準が用いられるようになりました(長谷部は大級、中大級、中級、中小級、小級と区分していますが、大型、中型、小型としている人もいます。一般的に用いられる大型とか小型とか混同

シバイヌ♂



甲斐犬♂



四国犬♂



北海道犬♀



紀州犬♂



秋田犬♂



5 cm

しやすいので報告では「級」を使うことを推奨します)。その後、金子はその豊富な経験と情報量を駆使して日本の古代のイヌに多くの発掘例や総説を報告しています(1976、1989、2000など)。

現在、日本在来犬はペットとして飼われることが多くなりましたが、ペットとしてだけではなく姿、形、性格を求める人々もいます。そのような人々によって日本在来犬の伝統は受け継がれており、どのように展開していくか興味深いものがあります。

謝辞： 使わせて頂いた日本在来犬の写真のそれぞれの所在はここに記しませんが、これらを集められた方の努力に敬意を表します。石黒直隆氏には遺伝に関する多くの教えをいただいています。心から感謝いたします。金子浩昌先生には昔からイヌに関するいろいろな情報を丁寧に教えていただきました。厚く御礼申し上げます。

この文章をまとめる機会を与えてくださった縄文柴犬研究センターの皆さん、土井鐵徳さん、また原稿を丁寧に読んで貴重な意見をくださり、イヌ関係の文献をまとめる機会をつくって下さった五味靖嘉さんに心から感謝いたします。(2020.06.15)

参考文献

- Bokonyi, S. (1974) : History of Domestic Mammals in Central and Eastern Europe. Akademiai Kiado, Budapest, 313 - 333.
- Gakuhari, T. Komiya, H., Sawada, J., Anezaki, TY., Sato, T., Kobayashi, K., Itoh, S., Kobayashi, K., Matsuzaki, H., Yoshida, K. & Yoneda, M. (2015) : Radiocarbon dating of one human and two dog burials from the Kamikuroiwa rock shelter site, Ehime Prefecture. *Anthrop. Sci.*, 123(2), 87 - 94.
- 長谷部言人 (1952) : 犬骨。埋蔵文化財発掘調査報告第一号「吉胡貝塚」,文化財保護委員会, 146 - 150。
- 石黒直隆 (2003) : 古 DNA 分析で探る縄文犬の系統。考古学ジャーナル, 501, 11 - 15。
- 石黒直隆 (2012) : 絶滅した日本のオオカミの遺伝的系統。日本獣医師会雑誌, 65(3), 225 - 231。
- 磯野直秀・内田康夫 (1992) : 舶来鳥獣図誌---唐蘭船持渡鳥獣之図と外国産鳥之図。八坂書房。
- Jing Yuan & S. Kato (袁靖 & 加藤晋平) (1993) : On the cut marks on small-sized animal bones excavated from the Oshita Shellmound, Ibaraki Prefecture, Japan. *Bull. Nat. Hist. Mus. & Inst.*, Chiba, 2 (2), 37 - 43.
- 鎌田祐二 (1998) : 縄文時代のヒトとイヌの合葬墓---岩手県宮古市近内中村遺跡。動物考古学, 11, 75 - 87。
- 金子浩昌 (1976, 1978) : 縄文遺跡出土の動物遺存体 (1, (2)。考古学ノート, 6, 1 - 19, 7, 1 - 20。
- 金子浩昌 (1986) : 千葉地東遺跡の動物遺体。神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告, 10「千葉地東遺跡」, 神奈川県立埋蔵文化財センター, 579 - 588 図版 103 - 110。
- 金子浩昌 (1989) : 縄文時代のイヌ---人とのかわりの中から。考古学ジャーナル, 303, 6 - 14。
- 金子浩昌 (2000) : 動物と人との交渉史。平出博物館ノート, 14, 1 - 14。
- 松井 章 (1999) : 考古学からみた犬。部落解放なら, 第11号, 7 - 25。
- 中村若枝 (2011) : 横浜外国人居留地のイヌたち---横浜市山下居留地遺跡出土埋葬犬をめぐって。考古論叢神奈川第19集, 神奈川県考古学会, (2011), 21 - 49。
- 直良信夫 (1965) : 日本産狼の研究。校倉書房, Pp.290。
- 西本豊弘・小林園子・樋泉岳二・太田敦子 (2003) : 汐留遺跡出土の動物遺体。東京都埋蔵文化財センター, 214 - 262。

- 斉藤弘吉 (1940 - 41): 日本石器時代家犬遺骨に関する報告ならびに内地史前家犬の分類。史前学雑誌, 12(4,5,6), 13 (3), 57 - 169。
- 斉藤弘吉 (1963): 犬科動物骨格計測法。私家版(東京), Pp138。
- 茂原信生 (1985): 沓掛城址出土の犬骨について。「沓掛城址第四次発掘調査報告書, 豊明市教育委員会, 15 - 23。
- 茂原信生 (1986): 東京大学総合研究資料館所蔵長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ, 東京大学総合研究資料館標本資料報告 第 13 号, 東京大学総合研究資料館, Pp. 187。
- 茂原信生 (1991): 日本犬に見られる時代的形態変化。国立歴史民俗博物館研究報告, 第 29 集, 国立歴史民俗博物館, 89 - 108。
- 茂原信生・松井 章 (1995): 草戸千軒町遺跡出土の中世犬骨。「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ---南部地域北半部の調査」, 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編, Ⅲ, 289 - 312。
- 茂原信生 (2007): 形から探るイヌ。生物科学, 58 (3), 130 - 139。
- 茂原信生・江木直子(2002): イヌ *Canis familiaris*に関する文献集 (日本で出版された文献)。人類学雑誌, 110(2), 89 - 104。
- 篠田謙一 (2019): 日本人になった祖先たち---DNA が解明する多元的構造。NHK Books, Pp. 236。
- 菅原弘樹 (2001): 動物遺体。「市川橋遺跡」, 宮城県文化財調査報告書, 宮城県教育委員会, 184, 203 - 233。
- 内山幸子 (2014): イヌの考古学。同成社, Pp. 267。
- 山田康弘 (1993): 縄文時代のイヌの役割と飼育形態。動物考古学, 1, 1 - 17。
- 山田康弘 (1997): 縄文家犬用途論。動物考古学, 第 8 号, 37 - 53。
- 山崎 健・茂原信生 (2007): 埋葬犬。「国指定史跡吉胡貝塚 (1)」, 田原市埋蔵文化財調査報告書第 1 集, 田原市教育委員会, 86 - 92。
- 山崎京美 (1985): 縄文文化におけるイヌの埋葬について。國學院雑誌, 86 (2) , 27 - 65。

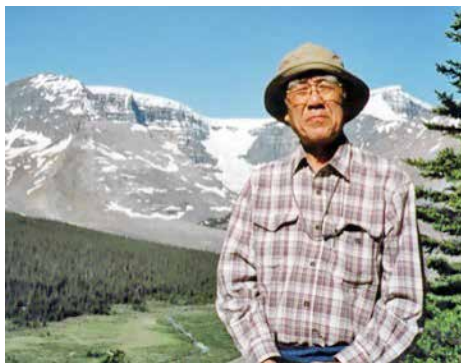
金子浩昌先生の紹介

先生は、1931年生・東京都出身。現在、東京国立博物館・考古課で、日本の各時代の骨角貝製、中国その他の諸地域で採取された品々、約1400点の鑑定をなさっていると伺いました。

本誌に寄せていただいた「縄文人と動物たち」は、先生の人柄のように、温かみのある表題となっております。考古学の文献では、少々短絡的ですが、縄文時代の生業・狩猟・漁撈という文字が並び、更にシカ何%、イノシシが何%・・・骨が出土、何時代である、という内容が主題です。

しかし、ここでは違います。縄文人は、それぞれの動物たちへの、畏敬の気持ちが込められております。

縄文人は、動物の遺体に対する深い思いの現れがあ



ると、先生は考えております。それは、多くの骨角製品や装身具をみて、彼らが如何にして素材を入手し、考え、力を尽くし、工夫し、道具をつくり、それぞれの製品が、生活と

なって遺されてきたからです。その事を最初に考えるようになったのは、会誌に骨角製品を掲載した頃だと伺いました。考古学には、こんな素晴らしい見方があった事に感動です。

金子先生の趣味は、登山や山歩きが大好きで、上高地や穂高に何度か行き、スイスやオーストリア、カナダなど雄大な大氷河に魅せられ見に行きました。また愛犬も長年飼育しておりました。

感謝で一杯です。ありがとうございます。(五味)

著作は全てではありませんが以下の目録を紹介 (筆名、発行年、表題、雑誌名、巻、号、頁)

2011.6 金子浩昌著作目録『金子浩昌著作目録』を刊行する会編.P226。

以下は、イヌやオオカミ関連の主な著作です。

- 金子浩昌・田中新史・西本豊弘 (1971)：家犬の埋葬骨格、船橋市教育委員会「高根木」, 275。
- 金子浩昌 (1973)：狩の展開「縄文土器と貝塚」古代史発掘 2, 講談社, 128 - 134。
- 金子浩昌 (1978)：縄文時代遺跡出土の動物遺存体(2).考古学ノート, 7,18。
- 金子浩昌 (1982)：古代北方の海洋文化と犬 - 礼文島オホーツク文化遺跡で犬を発掘する。動物と自然, 12(1), 15 - 17。
- 金子浩昌・大竹憲治・山崎京美 (1983)：犬は良き友だった。アニマ, 121, 6 - 11。
- 金子浩昌 (1983) 埋葬された家犬。「上総国分寺台発掘調 概報-西広貝塚第4次調査」, 千葉県埋蔵文化財センター, 58 - 59。
- 金子浩昌 (1984)：「貝塚の獣骨の知識 - 人と動物のかかわり」考古学シリーズ 10 (東京美術)。
- 金子浩昌 (1985)： a) 土橋遺跡弥生期土墳 (SK80)出土のイヌの遺体. b) 土橋遺跡弥生期土壇(SX1) 出土のイヌの遺骸 について、「土橋遺跡-基礎資料編」袋井市教育委員会, 197 - 200。
- 金子浩昌 (1987)：縄文人に いくつかされたイヌ - 遺跡からよみがえる先史犬. アニマ, 172, 28 - 33。
- 金子浩昌 (1988)：石器時代の遺跡から出土した縄文犬、愛犬の友,誠文堂新光社, 37(6), 338 - 340。
- 金子浩昌 (1989)：縄文時代の犬.考古学ジャーナル, 303, 6 - 14。
- 金子浩昌 (1989)：縄文時代の犬-人とのかかわりの中から,考古学ジャーナル, 303, 6 - 14。
- 金子浩昌・田名部雄一・戸川幸夫 (1991)：日本犬と日本人 - 1. 動物たち(日本動物愛護協会), 67, 4 - 9. (対談)。
- 金子浩昌・田名部雄一・戸川幸夫 (1991)：日本犬と日本人 - 2. 動物たち(日本動物愛護協会), 68, 4 - 9. (対談)。

金子浩昌 (1992): 日本考古学における動物遺体研究史-動物とのかかわりにみる日本列島の文化の形成、国立歴史民俗博物館研究報告, 42, 47 - 281。

金子浩昌 (1993): 縄文時代のイヌ - 遺跡にみるイヌとその歴史, 週刊朝日百科「動物たちの地球」, 朝日新聞社, 128, 242 - 243。

金子浩昌(1997): 大田駒込貝塚一号土壌 出土のイヌの遺骸. 大田の文化財, 32, 155 - 163。

(イヌとの関わりとして、茂原信生・江木直子 2002: 「イヌに関する文献集—日本で出版された文献」人類学雑誌より参照)

JSRC 会誌掲載の著作

金子浩昌(2006): 「随想 縄文人とイヌ」 - 柴犬 93。

金子浩昌(2008): 「縄文時代のイヌの埋葬」 - 柴犬 100。

金子浩昌(2015): 「縄文人の狩猟①」 - 25。

金子浩昌(2015): 「縄文人の狩猟②」 - 26。

金子浩昌(2015): 「縄文人の狩猟③」 - 27。

金子先生と五味の誌上交流 (2013): 上顎歯牙の摩耗について(1) - 17。(2) - 18。

茂原信生先生の紹介

茂原信生(しげはら のぶお)先生は1943年生、長野県出身。京都大学名誉教授。経歴などは多岐におよび、私が簡単に紹介する立場ではありませんので、ここでは、JSRCと私の30年余の関わりから、一部分ですがご紹介させていただきます。

先生は、主に自然人類学が研究のテーマで、霊長類からヒトの進化を研究されています。その中の一つに、日本人および日本犬の起源と形態の変遷が含まれます。

私が頭骨の標本に興味を抱いた「ヒトの咀嚼器官の未来を示すもの-歴史の実験としての将軍とイヌ-」(歯界展



望、70,6)など、その後の縄文柴犬の考え方を考える事になりました。

先生が獨協医大在籍時には、収集した標本から、哺乳類頭蓋骨のデータベースを作製しております。これはインターネットで公開されていて、将来的に研究・教育に役立つ標本とされると伺いました。私も犬の骨格計測の参考に、何度か勉強させていただきました。そうしたこれまでの過程には、常に、的確な優し

いアドバイスがあり、誠実な人柄に触れ勉強の支えとなりました。

趣味と云えるのか分かりませんが、ご夫妻でバードウォッチングをされています。(五味)

茂原信生先生のイヌとオオカミ関連文献目録

(筆者名、発行年、表題、雑誌名、巻、号、頁) (年代)

- 茂原信生 (1973)：縄文時代のイヌ-南境貝塚出土犬骨癒合例について。矢本町史, 1, 63 - 64。(縄文時代中期のイヌ)
- 茂原信生・江藤盛治・馬場悠男 (1980)：宇賀崎貝塚出土の人骨および犬骨について。宮城県文化財調査報告書, No.67, 121 - 126。(縄文時代のイヌとされているが後代のものではないかという意見がある)
- 茂原信生・小野寺覚・桜井秀雄(1982)：乙女不動原北浦遺跡出土の哺乳動物遺存体。「乙女不動原北浦遺跡」, 小山市教育委員会, 433 - 436。(縄文時代のイヌとされるが時代は確定されていない)
- 茂原信生・小野寺覚 (1984)：田柄貝塚出土の犬骨について。人類学雑誌, 92 (3), 187 - 210。(縄文時代後・晩期のイヌ)
- 茂原信生・桜井秀雄 (1985)：南坪貝塚発掘調査報告書, 茨城県小川町教育委員会, 70 - 113。(縄文時代後期のイヌ)
- 茂原信生・小野寺覚 (1985)：仙台城三ノ丸跡出土の17世紀犬骨について。「仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第76集, 547 - 559。(江戸時代のイヌ)
- 茂原信生・西本豊弘・松井 章・土肥 孝 (1985)：古代家犬の系統に関する研究。文部省科学研究費 補助金研究成果報告書, 1 - 61。
- 茂原信生 (1985)：沓掛城址出土の犬骨について。沓掛城址第四次発掘調査報告書, 15 - 23, 図版21 - 23。(中世のイヌ)
- 茂原信生 (1986)：東京大学総合研究資料館所蔵長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ。東京大学総合研究資料館標本資料報告, No.13, Pp, 187。
- 茂原信生・小野寺覚 (1986)：田柄貝塚出土犬骨の形態的特徴について。「田柄貝塚」, 宮城県文化庁, 宮城県文化財調査報告書111集, 589 - 672。(縄文時代後・晩期のイヌ)
- 茂原信生・瀬戸口烈司 (1986)：食肉類(目)(Carnivora)。歯の比較解剖学(医歯薬出版, 後藤仁敏, 太泰司紀之編), 166 - 171。
- 小野寺覚・茂原信生・江藤盛治 (1987)：骨格による性の判別-シバイヌについて。解剖学雑誌, 62, 19 - 32。

- 茂原信生 (1987) : ヒトの咀嚼器官の未来を示すもの - 歴史的実験としての将軍とイヌ。医歯薬出版株式会社, 歯界展望, 70, 4, 711 - 719。70, 5, 947 - 955。70, 6, 1185 - 1194。
- 茂原信生・小野寺覚 (1987) : 鎌倉材木座遺跡出土の中世犬骨。人類学雑誌, 95No.3, 361 - 379。(中世のイヌ)
- 茂原信生 (1988) : イヌと将軍に学ぶ。歯界展望, 71 (2), 333 - 337。
- 茂原信生 (1988) : 285号遺構出土のイヌ。白金館址遺跡 (I) 白金館址遺跡調査会, 194 - 196。(江戸時代のイヌ)
- 茂原信生・大江文雄・桜井秀雄 (1988) : 三貫地貝塚出土の動物遺存体。「三貫地貝塚」, 福島県立博物館調査報告第17集, 495 - 501, 図版 84 - 95。(縄文時代後晩期のイヌ)
- 茂原信生・馬場悠男・芹沢雅夫(1988) : 薄磯貝塚出土の家犬およびオオカミ。いわき市埋蔵文化財調査報告書第19冊, 558 - 571。(縄文時代晩期)
- 茂原信生 (1988) : 太古から犬は人の友だった。アニマ, 189, 98 - 101。(このレポートは出版社が 進入路を裏返しに印刷したミスのため図は正しくない)
- 茂原信生 (1989) : 古代日本犬の形態変化。考古学ジャーナル, 303, 22 - 27。
- 茂原信生 (1989) : 38号遺構出土の犬骨「西新橋二丁目 港区No.19 遺跡」港区教育委員会, 267 - 272, Pl62。(江戸時代のイヌ)
- 茂原信生 (1989) : 百間川米田遺跡 (中世) 出土の犬骨。「百間川米田遺跡3 (旧当麻遺跡)」, 岡山県教育委員会, 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告, 74, 372 - 374。(中世のイヌ)
- 茂原信生・芹沢雅夫・桜井秀雄(1989) : 浜野川神門遺跡出土の脊椎動物遺存体。「千葉市浜野川神門遺跡 (低湿地貝塚の発掘調査)」, 千葉県文化財センター調査報告 第159集, 77 - 87 図版 23 - 34。(縄文前期のイヌ。一部に古墳時代のイヌが混じる)
- 茂原信生・芹沢雅夫 (1990) : 仙台坂遺跡出土の犬骨。品川区埋蔵文化財調査報告書「仙台坂遺跡」品川区遺跡調査会, 171 - 180。(江戸時代のイヌ)
- 茂原信生 (1990) : 里浜貝塚出土の犬骨。里浜貝塚V, 東北歴史資料館, 107 - 114, 写真 30, 31。(縄文晩期のイヌ)
- 茂原信生 (1990) : 食肉類にみられる歯列不正。哺乳類科学, 30, 1, 53 - 58。
- 茂原信生 (1990) : 芝金杉通町町家遺跡出土の犬骨。港区立港郷土資料館研究紀要, 1, 105 - 112。(江戸時代のイヌ)
- 茂原信生 (1991) : 日本犬に見られる時代的形態変化。国立歴史民俗博物館研究報告, 29, 89 - 101。
- 茂原信生・本郷一美・網谷克彦 (1991) : 鳥浜貝塚出土 (1985年度調査) の哺乳類遺存体。国立歴史民俗博物館研究報告, 29, 329 - 342。(縄文時代前期のイヌ)
- 茂原信生・石毛直道・田名部雄一・小山修三 (1991) : 人類とともに動いた動物, 犬。平成3年度文部省科学研究費補助金, モンゴロイド, No.11, 2 - 9。
- 茂原信生 (1991) : イヌも歯を病んでいる。医歯薬出版株式会社デンタルハイジーン, 11(12), 1093 - 1107。
- 平口哲夫・茂原信生 (1992) : 金沢市西念南新保遺跡出土のイヌ頭蓋骨。金沢市西念・南新保遺跡, 295 - 29 図版イヌ頭蓋骨。(弥生時代後半のイヌ)
- shigehara, N. , Matsu'ura, S. , Nakamura, T. and Kondo, M. (1993): First discovery of the ancient Dingo - type dog in Polynesia (Pukapuka, Cook Islands). International Journal of Osteoarchaeology, 3, 315 - 320
- Shigehara, N, (1994): Morphological changes in Japanese ancient dogs. Archaeozoologia, IV (2), 78 - 94.
- 茂原信生・芹沢雅夫 (1994) : 中田南遺跡出土の人骨と脊椎動物遺存体。仙台市文化財調査報告書, 182, 「中田南遺跡」, 423 - 431。(中世のイヌ)

- 茂原信生 (1994) : 忘れられた歯---犬歯。歯界展望, 84, (5), 1220 - 1225。
- 茂原信生 (1995) : 城ノ台南貝塚出土の縄文時代早期犬骨。千葉大学考古学教室「城ノ台南貝塚発掘調査報告書」, 266 - 269。図版 64。(縄文早期のイヌ)
- 茂原信生・松井 章 (1995) : 草戸千軒遺跡出土の中世犬骨。広島県草戸千軒町遺跡調査研究所羅草戸千軒遺跡発掘調査報告 III, 289 - 312。(中世のイヌ)
- 茂原信生・松井 章 (1995) : 原の辻遺跡出土の動物遺存体。長崎県教育委員会, 長崎県文化財調査報告書 第 124 集「原の辻遺跡」, 189 - 207。(弥生時代のイヌ)
- 茂原信生 (1995) : 米田遺跡 (岡山県, 鎌倉~室町時代) 出土の人骨と犬骨。岡山県教育委員会, 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 101「米田遺跡」, 61 - 68。(中世のイヌ)
- 茂原信生 (1995) : 飯田町遺跡出土の江戸時代犬骨。飯田町遺跡調査会「飯田町遺跡」, 433 - 437。(江戸時代のイヌ)
- 茂原信生 (1995) : 水子貝塚の埋葬犬骨。「水子貝塚」, 富士見市教育委員会, 富士見市文化財報告 第 46 集, 205 - 207。(縄文時代のイヌ)
- 茂原信生・桜井秀雄 (1996) : 吹田市五反島遺跡出土獣骨。吹田市五反島遺跡発掘調査報告書(自然科学編), 63 - 107。(中世のイヌ)
- 茂原信生・松島和巳 (1996) : 中村中平遺跡から出土した縄文時代晩期の焼かれた骨片。飯田美術博物館研究紀要 6, 137 - 151 (1996, 3)。(縄文晩期のイヌ : 焼骨)
- 平口哲夫・溝口優司・小川数也・茂原信生 (1996) : 八間道遺跡出土の動物遺体。八間道遺跡—平成 8 年度公立加賀中央病院改築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—加賀市教育委員会, 267 - 281。(江戸時代のイヌ)
- 茂原信生 (1996) : 安子島城跡 (郡山市) 出土の中世の犬骨。「安子島城跡」, 郡山市教育委員会, 郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書, 134 - 145。(中世のイヌ)
- 茂原信生 (1997) : 石川条里遺跡水田出土の人骨と獣骨。埋蔵文化財発掘調査報告書 (長野県教育委員会) , 15, 676 - 682。(弥生時代後期のイヌ)
- 茂原信生 (1997) : 石川条里 (微高地) 遺跡 (長野市) 出土の古墳時代ならびに中世の人骨と獣骨。長野県教育委員会, 長野県埋蔵文化財センター, 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 15, 長野市内 その 3 - 石川条里遺跡第 2 分冊, 402 - 417。(中世のイヌ)
- 増田雄一・茂原信生 (1997) : 日本産食肉目の種名の検討。哺乳類科学, 37 (1) , 87 - 93。
- 桜井秀雄・茂原信生 (1997) : 篠ノ井遺跡出土の動物遺存体。「篠ノ井遺跡群」, 成果と課題編, 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書, 16, 246 - 274。(弥生時代のイヌ)
- Shigehara, N. , S. Onodera & M. Eto (1997) : Sex determination by discriminant analysis and evaluation of non-metrical traits in the dog skeleton. in "Osteometry of Makah and Coast Salish Dogs", Edit. by S. J. Crockford, 113-126.
- Shigehara, N. , Qi Guoqin, Hajime Komiya, Yuan Jing (1998) : Morphological Study of the Ancient Dogs from Three Neolithic Sites in China. International J. of Osteoarchaeology, 8, 11- 22.
- Shigehara, N. , (1998) : Book Review, A History of Dogs in the Early Americas. Marion Schwartz . , American Scientist, 1998, August, 389.
- 茂原信生 (1998) : 上信越自動車道屋代遺跡群から出土した獣骨と人骨。「更埴条里遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・窪河原遺跡)」, 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書, 25---更埴市内その 4, 229 - 232。(弥生~古墳時代のイヌ)
- 茂原信生 (1998) : 浅川扇状地遺跡群・三才遺跡出土の人骨と動物遺存体。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 34, 「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 5---長野市内その 2」, 246 - 254。(近世? のイヌ)

- Okumura, N., N. Ishiguro, M. Nakano, A. Matsui, N. Shigehara, T. Nishimoto, and M. Sahara, (1999) : Variations in Mitochondrial DNA of Dogs isolated from Archaeological Sites in Japan and Neighbouring Islands. *Anthropological Science*, 107(3), 213 - 228.
- Shigehara, N. & Hongo, H, (2000): Ancient Remains of Jomon Dogs from Neolithic Sites in Japan. In *Dogs Through Time, An Archaeological Perspective* (ed. S. J. Crockford). BAR International Series, 889, 61 - 67. (縄文時代のイヌ)
- 茂原信生・桜井秀雄・今野 渉 (1999) : 上信越自動車道屋代遺跡群出土の脊椎動物遺存体。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書, 42「更埴条里遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・窪河原遺跡)」, 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書, 26---更埴市内その5(古代1編), 342 - 378. (古代のイヌ)
- 茂原信生 (1999) : 榎田遺跡(長野市)出土の人骨と脊椎動物遺存体。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書, 37, 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書, 12 ---長野市内その10 榎田遺跡第2分冊(本文編II)」, 392 - 413. (5世紀、古代のイヌ)
- 茂原信生 (2000) : 人骨及び骨角牙製の遺物(松原遺跡)。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (長野県教育委員会), 36, 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書, 5---長野市内その3」, 339 - 353. (弥生時代中期のイヌ)
- 茂原信生 (2000) : 第2節 脊椎動物遺存体。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書, 53, 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書, 6---長野市内その4---松原遺跡 古代・中世本文編, 400 - 422. (古代~近世のイヌ)
- 桜井秀雄・芹澤雅夫・茂原信生 (2000) : 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡出土の古代2・中世・近世の脊椎動物遺存体。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 50「更埴条里遺跡・屋代遺跡群・古代2・中世・近世編」, 239 - 251. (古代以降の中大級のイヌ)
- Ishiguro, N., Okumura, N., Matsui, A. & Shigehara, N. (2000) : Molecular genetic analysis of ancient Japanese Dogs. in *Dogs Through Time: An archaeological perspective*. Edit. by S. J. Crockford, BAR International Series, 889, 287-292.
- 茂原信生・本郷一美 (2000) : 鳥浜貝塚(福井県)出土の縄文時代前期のイヌとオオカミ。鳥浜貝塚研究, 2, 23-40. (縄文時代前期のイヌ)
- 茂原信生 (2002) : 保地遺跡出土の獣骨の観察記録, 特にオオカミを中心として。坂城町埋蔵文化財調査報告書第20集, 「金井遺跡群-保地遺跡」, 94 - 97. (縄文時代のオオカミ)
- 茂原信生・江木直子 (2002) : 荒井猫田遺跡出土の中世ニホンオオカミの全身骨格。郡山南拠点土地区画整理事業関連「荒井猫田遺跡(II区)」第14次発掘調査報告書, 291 - 302. (中世のオオカミ)
- 茂原信生・江木直子 (2002) : イヌ *Canis familiaris* に関する文献集(日本で出版された文献)。人類学雑誌, 110, (2), 89 - 104.
- 茂原信生 (2003) : 縄文人はどのようにイヌと付き合ったか。考古学ジャーナル, 501, 6 - 10. (縄文時代のイヌ)
- 茂原信生・土肥直美 (2003) : 笠利町宇宿小学校構内遺跡出土の埋葬犬骨(縄文時代前期, 鹿児島県)。奄美考古(特集宇宿小学校構内遺跡発掘調査報告)奄美考古学研究会, (5), 53 - 60. (縄文時代前期のイヌ)
- 茂原信生 (2003) : 子と清水貝塚出土の犬骨。松戸市立博物館紀要10(松戸市教育委員会), 59 - 68. (縄文中期のイヌ)
- 茂原信生・平口哲夫・櫻井秀雄 (2004) : 三引遺跡出土のイヌならびに他の中・小型哺乳類。一般国道470号線改良工事及び主要地方道氷見田鶴浜線建設工事に係わる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書(VIII), 「田鶴浜町三引遺跡III(下層編)」石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター, 305 - 331. (縄文早期末~前期初頭のイヌ)
- 茂原信生 (2004) : 須坂市井上・幸高遺跡群, 井上氏居館址南堀跡から出土した人骨と獣骨。長野県須坂市市道園芸高校井上線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書「井上・幸高遺跡群, 井上氏居館址南堀跡」, 須坂市教育委員会, 35 - 42. (古墳から近世: オオカミか大型のイヌ)

- 茂原信生 (2004) : イヌの形はどのように変わってきたか。形の科学百科事典,形の科学会編集, 175 - 176。
- Intoh, M., Shigehara, N. (2004): Prehistoric Pig and dog remains from Fais Island, Micronesia. Anthropological science Vol. 112, 257-267.
- 茂原信生 (2005) : 三引遺跡出土の縄文時代犬骨に関する考察。一般国道 470 号線(能越自動車道)改良工事及び主要地方道氷見田鶴浜穿孔地に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 (IX) [七尾市三引遺跡IV],石川県教育委員会,財団法人石川県埋蔵文化財センター, 63 - 70。(縄文時代のイヌ)
- 茂原信生 (2007) : 特集.イヌの生物学—形から探るイヌ。生物科学, 58, 3,130 - 139。
- 茂原信生 (2007) : 小特集. あなたの犬はどこからきたのか—イヌの遺伝子からわかること 2,古代犬の形態と現在日本犬。生物の科学遺伝, vol. 61. 4, 62-65。
- 山崎 健・茂原信生 (2007) : 埋葬犬(吉胡貝塚)。「国指定史跡吉胡貝塚(I)」,田原市埋蔵文化財調査報告書 第 1 集, 86 - 92。(縄文時代晩期のイヌ)
- 茂原信生 (2007) : 古代犬の形態と現在の日本犬。遺伝, 61 (4) , 62 - 65。
- 茂原信生・平口哲夫 (2008) : 石川県珠洲市粟津小学校遺跡出土の中世犬骨。県営中山間地域総合整備事業(三崎地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書「珠洲市粟津小学校遺跡」,石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター, 93 - 99。(中世のイヌ)
- 茂原信生 (2008) : 横浜市中区 No.2 遺跡(元町貝塚)出土の縄文時代犬骨。「中区 No.2 遺跡発掘調査報告」,横浜市ふるさと歴史財団, 103 - 110。(縄文時代前期末～中期初頭のイヌ, 時代は不明確)
- 茂原信生 (2009) : 長谷部言人の学位論文「石器時代日本犬」についての解題。動物考古学, 26, 82 - 83。
- Ishiguro, N., Inoshima, Y., & Shigehara, N. (2009): Mitochondrial DNA analysis of the Japanese wolf (*Canis lupus hodophilax* Temminck, 1839) and comparison with representative wolf and domestic dog haplotypes. Zoological Science, 26, 765-770.
- Ishiguro, N. Inoshima, Y., Shigehara, N., Ichikawa, H. & Kato, M. (2010) : Osteological and genetic analysis of the extinct Ezo wolf (*Canis lupus hattai*) from Hokkaido Island, Japan. Zoological Science, 27, 320-324.
- 茂原信生・石黒直隆・江木直子 (2011) : イヌとネコはどこから来たのか? ニュートン, 2011 年 10 月号, 52 - 57。
- 山崎 健・橋本裕子・茂原信生 (2011) : 京都大学大学院理学研究科自然人類学研究室所蔵の動物標本---とくに動物遺存体と動物化石について。動物考古学, 28 号, 95 - 111。
- 桜井秀雄・茂原信生・本郷一美 (2015) : 西近津遺跡群出土の動物骨について。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 104, 「佐久市 西近津遺跡群---中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2-佐久市内 2」,長野県埋蔵文化財センター, 239 - 245, Pl. 309 - 311。(中世のイヌ)

<http://j-shibainu.sakura.ne.jp/>

発行所 **NPO法人縄文柴犬研究センター**

NPO CO. Jomon Shiba Inu Research Center

郵便振替口座 02280 - 2 - 106951

10周年記念集

編集責任者：五味靖嘉

企画責任者：土井鐵徳

発行責任者：向井亮太

事務所 〒737-2214 広島県江田島市大柿町深江478-1

印刷製本：現代印刷出版 〒984-0001 仙台市若林区鶴代町4-33

非 売 品



許可無く本誌
の複写転載を
お断りします。

2020年10月1日



特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センター